

第 1 章

山形大学教員研修会 「第8回 教養教育ワークショップ」



日 時:平成18年8月2日(水)10時から16時30分まで
会 場:山形大学教養教育棟(山形市小白川町)

第1部 講演会 「学生参画型の教育改善
～学びの主権者としての学生のパワー～」
講師 岡山大学教育開発センター
カリキュラム研究開発部門長 橋 本 勝 氏

第2部 ラウンドテーブル

No	テーマ	コーディネーター
ラウンドテーブル1	YUeラーニングの展望	中村 三春 教 授(高等教育研究企画センター)
ラウンドテーブル2	学生参加による授業改善	金澤 真理 助教授(人文学部)
ラウンドテーブル3	高大連携の推進	栗山 恭直 助教授(理学部)

第3部 全体会 「現在進行形の教育改革」

主 催 :山形大学教育方法等改善委員会・高等教育研究企画センター
共 催 :地域ネットワークFD“樹氷”
お問合せ:山形大学高等教育研究企画センター (023-628-4707)

第1章 山形大学教員研修会「第8回 教養教育ワークショップ」

山形大学教員研修会「第8回 教養教育ワークショップ」 ー山形大学の活性化と授業改善の推進ー



日 時 : 平成 18 年 8 月 2 日(水) 10:00~16:30
会 場 : 山形大学教養教育棟
主 催 : 山形大学教育方法等改善委員会
山形大学高等教育研究企画センター
共 催 : 地域ネットワーク FD“樹氷”

趣 旨

山形大学の特色として、全学が一丸となって実施している教養教育の充実を挙げることができます。その充実を支え、恒常的に改善・発展させている装置が FD です。本学の FD は、全国的にも高く評価され、大学教育の研究者にも注目されています。その対外的な評価の一つとして、平成 16 年度の現代 GP に選定された「地域ネットワーク FD “樹氷”」があげられます。このワークショップには、“樹氷”を始めとして県内の大学等から多数の教職員が参加しております。さらに、8月7日から蔵王で実施される合宿セミナーには、全国の20校に及ぶ大学等からの教職員の参加があります。このように、相互研鑽を理念とした本学の FD は学内から県内へ、そして全国へと広がりをみせています。

本ワークショップは3部構成となっています。第1部の基調講演は、岡山大学教育開発センターカリキュラム研究開発部門長の橋本勝教授にお願いしました。授業改善や教育改善を進めている大学はどれも学生の声を聴いたり、学生にFDに参加してもらおうという考えに至り、それを実行している大学も近年増えてきました。そうした状況下にあつて、岡山大学は「学生参加型の教育改善」の全国の先頭に立っている大学であります。そのアイデアと実行力には全国が注目しているところです。岡山大学の取組みは平成17年度の特徴GPに採択されております。岡山大学のこうした取組みの中心にるのが、今回の講師である橋本先生です。先生の演題の副題に「学びの主権者としての学生のパワー」とありますが、先生には学生のパワーを凌駕するようなパワーがあります。今日は先生のパワーの一部もいただくことにしましょう。

第2部は、ラウンドテーブルという名の分科会となっています。机を円く組んで、お互いの顔を見ながら山形大学の各学部で展開されている現在進行形の教育改善や、直面している問題について忌憚のない議論をしましょう。第1テーブルは「YUe ラーニングの展望」、第2テーブルは「学生参加による授業改善」、第3テーブルは「高大連携の推進」です。

第3部は、全体会「現在進行形の教育改革」です。ラウンドテーブルで話し合われたことを全員で共有し、明日に繋げるためのものです。限られた時間ですが、参加者全員で実りを共有したいと思います。

本ワークショップによって、参加者のみなさま、参加大学等、そして山形大学のパワーが増幅することを主催者一同願っております。

日 程

10:00 開会
あいさつ 仙道学長
教育方法等改善委員会委員長
柴田副学長

日程説明

10:15 【第1部】基調講演
演 題:「学生参画型の教育改善
～学びの主権者としての学生のパワー～」
講 師:岡山大学教育開発センター
カリキュラム研究開発部門長
橋 本 勝 氏

質疑応答

12:00 昼食・休憩

13:00 【第2部】ラウンドテーブル
ラウンドテーブル1: YUe ラーニングの展望
コーディネーター: 中村 三春 教授(高等教育研究企画センター)
ラウンドテーブル2: 学生参加による授業改善
コーディネーター: 金澤 真理 助教授(人文学部)
ラウンドテーブル3: 高大連携の推進
コーディネーター: 栗山 恭直 助教授(理学部)

15:00 休憩

15:10 【第3部】全体会
「現在進行形の教育改革」
(各ラウンドテーブルの報告)

16:30 閉会



開会

司会(小田) 皆様おはようございます。お忙しいところお集まりありがとうございます。山形大学教員研修会 第8回教養教育ワークショップを開催いたします。

このワークショップもついに第8回となりました。山形大学を始め、いろいろな大学の方々からいらっしやっていただきまして大変感謝しております。

私、司会を務めますのは、本学の教育方法等改善委員会の小田でございます。よろしくお願いいたします。



さっそく、本学の仙道学長の方からご挨拶をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

仙道 おはようございます。ご挨拶申しあげます。



今、小田先生もおっしゃっていましたが、この8回というのは、かなりすごいことだろうと思います。

私自身も、教養教育の重要性ということを学長になったときから考えておまして、教養教育の大事さというのをずっと力説してきたわけですが、最近になりまして、私自身は、ちょっと待てよという気持ちがしております。

今日お話いただく岡山大学の橋本先生のお話を是非お聞きしてヒントを得たいと思いますが、教養教育の学生参加の形というのは私も講義の中でとっておりますし、他にもいろいろな方がとっていると思いますが、非常に大事なトライアルだとは思いますが、それを、例えば評価する場合にはどうなるんだろうかと思うのです。学生のいわゆる教養なるものに何かを与えていっているのかといったあたりが、いまひとつはっきりしていないのではないかとといったことを、私自身も反省しております。

学生は非常に学生参加型の講義を喜びますし充実感を持って終わっているようですが、だけれども実際、教養教育という中で、どれくらい、どういう進歩をしたのか、学生参加型の教養教育を評価の面から見るといような時期に、少なくとも我が大学は来ているのではないかといいような気が

いたします。

さらに突っ込んでいいますと、この前、悪口を言い教養見直し委員会のワーキンググループに行って、「今のままではダメだ」という話しをして、委員の先生方鼻白んでいましたけれども、こころに来ますと教養教育とはいったいどんなものであるのか、何をすべきかというようなことを、やはり基本的に議論をする時ではないかなと思います。

広島大学の先生があるシンポジウムで、「要するに先生がいて先生に張り付く形で今の教養教育というのはあるのではないか」といような疑問を投げかけられておまして、「そうではないはずだ、『これを教えなきゃいけない』というのがあって、それにどの先生が必要かといような形のことがやられていかなきゃいけないのではないか」といようなことをおっしゃってまして、まさにその通りだと思います。

是非そういった、ある意味では冷めた目でも、この教養教育というものを見直していただきたいと思います。そういう時期に我が大学は来ているのだらうといふなことを思います。

このワークショップが、是非そういう教養教育の改革といようなことの礎になればという風に思います。私も聞かせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。どうもありがとうございました。

司会 どうもありがとうございました。引き続きまして、教育方法等改善委員会委員長の柴田副学長の方からよろしくお願いいたします。

柴田 おはようございます。朝早くからどうもご苦勞様です。



本日、大学の教員研修会の第8回、教養教育ワークショップということで、岡山大学から橋本先生がいらっしやって、学生参画型の教育改革と題して講演があります。そのあと、皆さんと一緒にテーブルを囲んで議論するといような形になっています。

ここでは教育方法等改善委員会の委員長として挨拶しているのですが、この教育改革については教育方法等改善委員会でも議論しております。それから教養教育の見直し委員会でも議論しております。またその中の一部であるワーキンググループでも議論しております。それぞれの担当のところでそれぞれ議論しているのですが、もうひとつ、授業を担当している先生一人一人からも、教育改善としてこういことをしたいんだ、いようなチャンネルが出てくると、もっと本物の教育改革ができるかなといような感じがするわけです。

本日のワークショップは、いろいろな委員会の委員ではない先生方も参加されているという事が、非常に意味があるということと、山形大学以外の大学の先生方もいらっしやっているという事でも意味があるなということを感じております。

いろいろな立場の人がいろいろなチャンネルで教育を考えるということが、本当の教育改革を進める上での一番のポイントかなと思っておりますので、その意味で本日のワークショップ、非常に意義のあるものだと思っておりますので、今日一日、幸いにもあまり暑くない日ですので、集中力を持ってご参加いただければありがたいなと思っています。よろしく申し上げます。

司会 柴田先生どうもありがとうございました。

では、こちらから軽く日程の説明をしたいと思います。日程につきましては、パンフレットの中の方に書いてあります。午前中 12 時まで基調講演を行いまして、昼の休憩を 1 時間取ります。13 時からはラウンドテーブルを 3 ついたしまして、10 分間休憩を置いた後で 15 時 10 分から全体会。127 番教室、同じこの会場でやります。そして 16 時半には閉会という形にしております。長い 1 日ですけれども皆様のご協力のほどよろしく申し上げます。

第1部 基調講演「学生参画型の教育改善 ～学びの主権者としての学生のパワー～」

講 師：岡山大学教育開発センター

カリキュラム研究開発部門長

橋 本 勝 氏

司会 それではさっそく基調講演の方にうつりたいと思います。まず、私の方から今日の講師であります橋本先生のご紹介を軽くしたいしたいと思います。

橋本先生は、パンフレットの講師紹介にも書いてありますように、岡山大学教育開発センターのカリキュラム研究開発部門長でございます。経歴等についても書かれておりますけれども、1955 年、石川県のお生まれでございます。そして学会等の大学教育に関する理事を務められていらっしゃいます。また、平成 17 年度の特徴 GP を、まさにこの学生参画型の教育改善で取られた担当者でございます。この学生参画型の教育改善、早い話が、学生参加型の授業ではなくて、FD でございます。これは、日本でも一番先頭を走り、さらに、世界的に見ても先頭を走っている試みで高く評価されているものです。

今からご講演がありますが、橋本先生はすごいなと思われると思いますけれども、この過激さを、GP という形で文科省が、国が認知したんだということを言われていました。また同時に、文科省で GP 取らなくても、岡山大学はこれを自分たちでやっていく。それは我々の使命感なんだ、という形で、あるフォーラムでおっしゃっていたことを私は強く心の中に残っております。

第 8 回、満を持して、橋本先生の登場という形でございます。みんな楽しみにしておりますので橋本先生よろしくお

願いいたします。



橋本 おはようございます。知る人ぞ知る橋本でございます。ということは、知らない人は何も知らない。そういう橋本でございますが、しばらくの間、お付き合いのほどよろしくお願いを申し上げます。



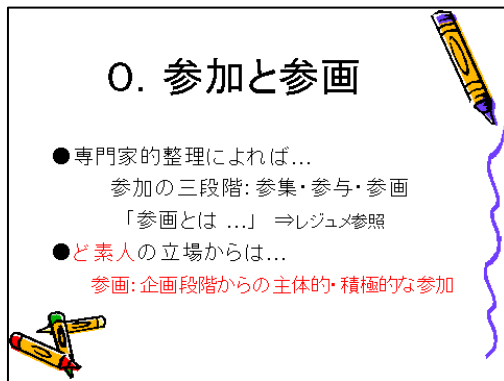
今、妙な入り方をいたしました。つまり知る人は知っている、という言い方をしたんですが、実は「知る」という行為は必ずしも単一ではございませんので、誤解をしていても知ったつもりになっているというケースもかなりございます。伝言ゲームのように伝わっていきますと、岡山がやっている試みを、例えば小田先生が山形大学、あるいは山形周辺でどうお伝えになったか、これによってずいぶん尾ひれがついてくる。そういう意味では、過大な期待をもってここに足を運ばれたという方もおられるかもしれません。知っているつもりの方はある意味で実態をあらためて知っていただく機会にさせていただきたい。そういう思いでここへ参りました。

それから問題はもうひとつの方の知らない人ですが、知らない人にとりましてはかなりカルチャーショックの大きい話です。全国的にもかなり有名なんですが、先ほど私の聞いた範囲では学長先生も誤解なさっております。私は実は、学生参加型の授業ということもやっております。それは、橋本メソッドというふうに称しております。それはそれで別の機会にいろいろなところで報告をさせていただいております。

今日お話をするのは、そちらの方の話ではございません。今、小田先生が少しおっしゃったのですが、学生参画型の FD なんです。学生参画型の授業ではないです、教育改善。大学全体としての教育改善のところに学生が関わっていくというお話でございます。そういう意味では、そんなところまで学生が踏み込んでいいのか。それこそ今、小田先生には本当に過大な評価をいただきまして、世界の先頭を走って

いるなどとおっしゃいましたが、ある意味ではそこまでなかなか走りきれない内容でございます。そういうことをしばらくご紹介申し上げようという形で進めさせていただきます。

全体の中では、これからお話をさせていただく中で十数分映像をご覧くださいます。むしろ私の話よりもそういう映像をご覧くださいいたほうが、内容がよく分かるであろうということで、後で映像をご覧くださいますけれども、そこに至るまでは、パワーポイントを使いながら若干説明をさせていただきたいということで進めます。

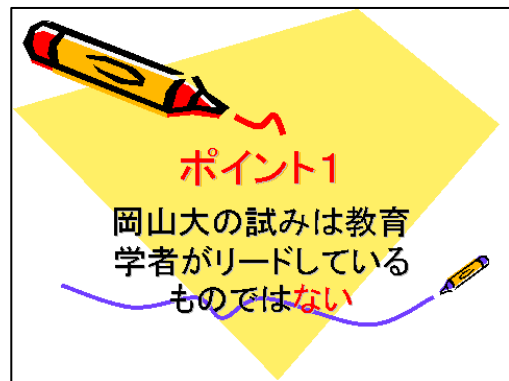


まずはじめに、レジメにもセクション0というふうに、私、0からよく始めるんですけども、それでは今まではなんだったのかと。0ではなくて-1だったということなんです、セクション0の話です。

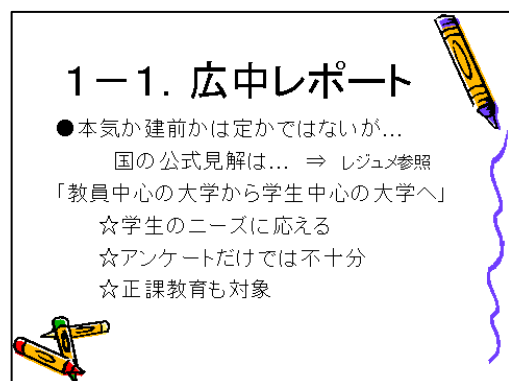
参加という言葉と、参画という言葉、これをできればやっぱり意識して使い分けていただきたい。非常に単純に言うならば参画のほうがより深いかかわり方というくらいだと思います。参画という言葉をおそらく日本の学者の中で最も強く主張してきた人間というのが、レジメに書いてございますが、林義樹という、いわば専門家がおられます。この春まで横浜国大におられました、今は日本教育大学院大学というところにおられます。長く武蔵大学というところにおられました。それこそ彼の場合は学生参画型の授業です。授業のところに学生をどうやって参画させるか。これを長年研究し続けてこられた。この方教育畑の方です。したがって彼は参画ということをかなり専門的に考えてきた人間であろうというふうに思います。

彼はいろいろなところでこの話をしているんですけども、参加というのを大体段階的に3種類に分けます。ただ集まるだけの参集。もうちょっと関わり方を強くする参与。そして一番発展した段階が参画。いろいろな本があるんですが、レジメの方に書いておきました学文社の本。少し古い本ですがこんなふうに説明してあります。「参画とはその場の全体状況を共有化しながら、計画段階から、実施、評価、伝承段階まで関わることで、場づくりそのものを担う包括的な関わり方」。なるほどというふうに思う反面、何か難しいこと言うとな。ようわからん。これが率直な印象ではないかなと思います。言っている日本語は難しくないんですが、何かこういうふうに長くしてみると、わからないではないけれども具体的にどういうことなのかというのがちょっと分かりにくい。かえって分かりにくいかなと思います。

これに対して、私は教育畑の人間ではございません。もともと経済の出身です、教養教育とも途中から関わりました。最初から教養教育とは関わっておりません。そういう意味では本当に素人なんですけれども、ついでに言えば、私が所属している岡山大学の教育開発センターはいわゆる教育畑の人間は一人もおりません。プロパーは一人もいなくて、みんな素人の集団です。素人の集団が考えた時に考える定義などという物は、いわばあまり重みは無いんですが、かえって単純でわかりやすいというふうなところがございます。別に何かの研究論文とか著書とか、そういうものに明記したわけではありませんが、例えば参画という物を私たちはこういうふうに定義します。「企画段階からの主体的、積極的な参加」。どの段階から関わるのか。最初の企画のところから関わる。企画の画が参画の画であるという位の軽いイメージです。それで、自分から、それから積極的に参加していく。そういうことの要素が入っていればこれで十分参画ではないかなと。



やっぱり難しい話をするじゃないかと思われるかもしれませんが、実は私はここで言いたいのはそういうことじゃなくて、岡山大学の試みというのは教育学者がリードしているものじゃない。つまり、ある意味で教育のことを考えている人間が、いろいろなことを考えていろいろなことを実践するというのは、必ずしもその教育学的なベースが無くてもできる。それが理想なのかどうかは別として、実際にやっているのがそういう現実である。そのことをまず押さえていただきたいというのがセクション0でございます。



さて、レジメの方には3つ並べて、広中レポート、認証評価、そして特色GPと書きました。岡山大学が何をやっているかについては、もうしばらく経ちましてから具体的にお話をします。ようやくセクション1で、ここから話が始まるとい

うぐらいですから、岡山大学がこれからお話をする中身をどうして推進できたのかというその背景のようなところ、これを少し説明します。

話を3つに分けて、まずは広中レポート。これは、現在でこそ広中レポートというふうに比較的有名な名前になっているんですが、発表された当初はほとんど見向きもされなかった物です。2000年の6月、今から6年前のことです。文科省があるレポートを出しました。当時はまだ文部省ですが、『大学における学生生活の充実方策について。一学生の立場に立った大学づくりを目指して一』。こういうタイトルです。先ほど申し上げましたように、これが発表された時に大々的に取り上げられたという事実はまったくありません。2000年の6月の段階ではほとんど日の目を見なかった。岡山大学もこの存在にはまったく気がつきませんでした。大分経ってから、実は2000年の6月にこんな物が出ていたということに気づいたのですが、かなり長文の物なんですけれどもその中から少しだけ抜き出しました。さらに私のほうで少し下線を引いてございます。要するにこれから先、大学というのはどうあるべきか、というところをこんなふうに書いてあります。

『『学生中心の大学』への転換を図るという観点から、大学教育においては、大学で教育を受ける学生の希望や意見を、適切に大学の運営に反映させることが重要である。』大学の運営です。一つ一つの授業ではありません。大学の運営に、学生の希望とか意見とかこういうものをどんどん適切に反映させることが重要であると。このこと自体はずいぶん前から言われていたわけなんですけれども、その際、どういうやり方があるか。(a)(b)(c)と書いてある部分の(c)だけアンダーラインをひいてあります。「(c)学生の代表を大学の諸機関に参加させる方法」こういうものも考えられると。何を内容としてそこに反映させるのか。サークル活動なのか福利厚生なのか。そうじゃないわけですね。正課教育、普通の授業、カリキュラムといってもいいですが、大学の教育全体に対して学生がもっと物を言ってよい。物を言うべきであると。「今後は、正課教育の内容のあり方や授業方法、さらに教育条件の改善などの分野についても、学生の希望や意見を適切に取り入れる仕組みを整備していくことが重要である。」



こういうことを2000年の6月に政府が発表している。政府と申しますか文科省が発表している。当初はほとんど省みられなかったわけなんですけれども、今ではかなり評価の高いレ

ポートのひとつです。これからの大学像を考える時にこういう側面というのは非常に重要であるということは、今はかなり共通した認識になっております。

1-2. 認証評価

●例えば、大学評価・学位授与機構の認証評価のための大学評価基準にも...

⇒ レジューメ参照

「FDについて学生のニーズを反映しているか」

- ☆FDは教員だけの問題ではない
- ☆組織的な対応が必要
- ☆観点は全部満たす必要がないといえ...

さて、一方、認証評価というのが一昨年から始まりました。認証評価っていうもの自体、一般の教員の方ですと余りよくご存じないという方もおられるかもしれません。大学のトップは、慌てていますけれども、要するに国の認証を受けた機関から大学が全体として評価される。特に教育が評価される。国立大学においては研究のことは主に法人評価で対象にします。むしろ教育のところは重点的に認証評価で評価される。こういうことが今進行中なわけですが、ほとんどの国立大学、おそらく山形大学も含めて、岡山大学ももちろんそうですけれども、大学評価学位授与機構の認証評価を受けたいと思います。別にそこで受けなきゃいけないという理由は無いんですが、いくつかの機関の中からどれかを選べばいいんですけれども、その大学評価学位授与機構が認証評価を行うにあたって、基準を11定めております。大学の目的から始まって、最後、財務とかそういうことも含めまして、ただ圧倒的な部分は教育の部分です。基準が全部で11あります。ひとつの基準について、数はかなりばらけますけれども、平均すると10前後の観点というのがついております。その基準を満たしているかどうかをこういう観点から評価する。

ずらっと並んだ評価基準のうちの9番目「教育の質の向上及び改善のためのシステム」。他はもっと大学の目的とか、教育の成果とか、タイトルが短いんですが、ここだけえらく長いタイトルがついていて、そこに基本的な観点というのが、今日はその資料持ってきてないんですけれども、私の記憶では6つか7つくらい観点が並んでおります。

その中の1つにこういうのがある。「ファカルティ・ディベロップメント(つまりFDですが)について、学生や教職員のニーズが反映されており、組織として適切な方法で実施されているか」。学生のニーズをちゃんと反映しているかということが、認証評価というもので問われている。こういうふうに受け止めてください。もしこの観点がダメだということになると、大学としてはダメな大学ということになるのかというと、そうではないです。この基準9の、さっき6つ7つある観点と言いましたけれども、その中の仮に1つがちょっと不十分であるという場合でも、全体として基準9はまあまあクリアできるというふうに判断されますと問題ありません。

ただ、この基準9に並んだほかの項目もいろいろ対応し

で考えていった時に、全体として基準の11並んだうちの1つが非常にまずいというようなことになる、この制度上、かなりまずい大学という烙印を押されることになります。そういう意味ではその基準9がたくさん項目から成り立っているわけではなくて、6つ7つしかないということが非常に重要なことに、逆になります。

認証評価そのものは相当なボリュームなものの報告書を出しますし、エビデンスも相当必要です。そういう中で、それが社会的にどう見られるかというのは、これは必ずしも定かではないんですけども、ただ、例えば一つ一つの観点について詳細に回答を求められます。したがってこれややってないならやってないというふうを書く必要がありますし、やっているというのなら証拠を出さないとはいけない。そういう話です。

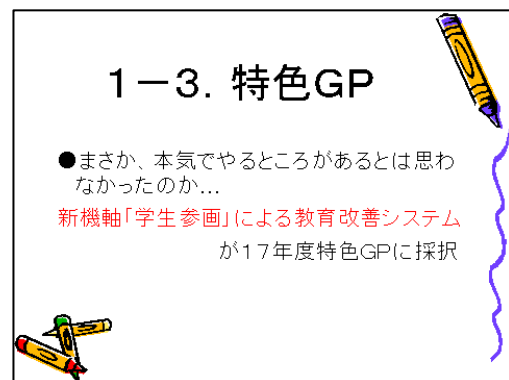
ちょうど広中レポートでいわれているようなことが、認証評価というものにも入り込んでいる。こんなふうに理解できると思います。要するにFDというのは教員だけの問題ではないんだと。つまり学生、あるいは職員、こういうものも含んだ、大学全体としての問題である。それから、当然のことながらその教員一人一人の問題ではなくて組織的な対応が必要であると。

それから、先ほど申し上げたように観点というのは、認証評価の中の基準の中の1つの観点が抜けたからといってすぐどうなるというものではない、ということを断ったつもりですが、ただそこを無視するわけにはいかない。全部で11の基準の観点をずらっと並べますと、100以上の観点になります。それからついでに言えば、大学基準協会のものを受けると、ここまで明確な観点は入っていません。あくまで大学評価学位授与機構のものを受けるとこうなる。最もちょっとこれには裏話がありまして、スライドにもレジュメにも書いてないんですが、何で認証評価にこんなことが入っているんだと。学生のニーズ、FD。FDに学生のニーズをくっつける。何かちょっと発想として、なかなか普通の一般の教員からは出てこないような発想、おかしい、とこういうふうに思われるかもしれません。実際これおかしな話で、裏話を聞けばなんだそうかという話になります。

この大学評価学位授与機構が認証評価の基準作りを作るにあたって、実は私はワーキンググループに入りました。そこで何か意見がないかと。素案が出てきた段階で意見がないかということが出ましたので、まあ私は2つほど意見を出しました。厳密に言えば意見はたくさん出したんですが主な意見を2つ出しました。こういう要素も入れてはどうだ、という話を2つ入れたんですが、そのうちの1つが実はこれなんです。つまり私が張本人でこれ入れてしまっていると。だから私の場合は、つまり岡山大学の場合はこれを問われても別に問題はない。後からお話するように、まさにそれにフィットするようなことをやっていますから、これを問われることは別に痛くもかゆくもない話なんですけれども、他大学にとっては大変な迷惑にあたることをちょっとやってしまったなという気はします。

ついでに言えば、もう1つ私が余計なことをその時に申しました。単位の実質化という話です。授業外の時間にどのく

らい学生たちに学習をさせるか。これをきちんと確保するというのを単位の実質化というふうに表現しますが、そういうことを、元々は機構の基準の中に入っていなかったんですけども、大学院も含めて全部入ってしまいました。せっかくそのワーキングに入った以上、何か意見を言えと言われた時に何もありませんでは、逆に仕事をしないという感じで、そんなふう意見を書いてしまったので、両方とも入ってしまっています。むしろこれは全国の大学に対して、ある意味では謝らなければいけないかもしれない。でもただ私としては決しておかしな方向を追求しているとは思いません。大学のあるべき姿としてどちらの話も重要な観点であろうというふうに信じています。まあ、それが裏話です。



それで、先ほど小田先生の話の中にもありましたように、岡山大学の取り組みというのは全体として今、昨年度の特徴GPに採択されております。タイトルが、「新機軸『学生参画』による教育改善システム」そういう内容で、今日お話を、具体的な中身全体のことなんですけれども、要するに学生参画を、教育改善というかなり大きいレベルで考えるということ、大学として推進しているということが評価されている。こういうふうにお考えください。ここまで来ますと、はっきりこう言い切っていいだろうと思います。岡山大、暴走という表現を私はよく使うんですけども、なかなか他の大学ができない中で、ある意味では暴走に近いことをやっております。岡山大学の暴走はもう1点あるのですが、今日はその話はいたしません。そのうちの片方だけ、少なくとも片方だけは政府公認という形になっているということです。



今一度振り返っておきますが、広中レポートを受けてスタートしたものではありません。岡山大学がその必要性を自然に感じ取った中で実施し始めたら、たまたま文科省も同じような時に同じようなことを言い始め、それから、認証評価

は私の一言でというのはちょっとオーバーな言い方ですから、時代がそういうものを要求したというふうにも言えます。そういう意味では、自然な流れの中で岡山大学がこういうふうに進んでいる、というふうにいえないではないんですけども。ただ他の大学がほとんどやれていない中でやっているということは、これはある意味では奇異といいますか、妙にうつるわけですね。しかしそれは決して妙なものではなくてすでに政府が公認していると。特色 GP ということは、つまり他の大学にも進められることだというふうに政府が認めている、というふう考えられます。

ここから具体的な内容を少し時間を取って紹介したいと思います。

2-1. 組織概要

- 11 学部から推薦された **学生委員**
(1 年の 6 月～3 年の 5 月までの 2 年任期)
... 残留委員を含めて約 **30 名**
- 学部・センターから推薦された **教員委員**
... 多くても **15 名** 程度
- 学務部から推薦された **職員委員**
+ 特色 GP で臨時雇用した職員 ... 現在は **3 名**

まず私どもの活動というのは、組織活動です。ですからどういう組織を作ってということからお話を始めます。

岡山大学では 11 学部がございす。文系理系、ほとんどのものはあるというふうに考えていただいているんですが、その 11 の学部からまず学生を 2 人ずつ推薦してもらいます。2 人ずつというのは厳密ではありませんで、厳密には 1 人ずつ推薦してもらいます。しかし任期を 2 年にするものですから、1 年生で推薦します。結果としては 1 年生が 1 人、2 年生が 1 人。ということで各学部から 2 名ずつの推薦、委員が出てきます。残留委員という言葉を書きおいたんですけども、2 年の任期というのが 3 年生の 5 月で終わります。しかし、面白がってまだ残留する人間というのが毎年数名、必ず出てきます。その関係で大体学生委員というのは、名簿上は常に 30 人ぐらいいる。2001 年からスタートして 5 年間、大体こういう状況が続けております。

よくこの話をしますと、学部からどうやって選ぶんだと、これが当然の疑問としてでてまいります。これは各学部に任せています。そういたしますと、最も進んだ学部では 1 年生全員集めて、うちの大学にはこんなものがあるという公開説明会のようなものを開く。先輩の委員に少し体験談を語ってもらい、あるいは私なんかはその補足説明に少し借り出されて、そういう説明を聞いた後、一定の期間、立候補期間を受け付ける。その中でやってみようという学生が何名かだった場合にはきちんと面接をして、その中から 1 名選出する。こういう手立てを取っている学部もあります。しかし一方では誰か 1 人出さなきゃいけない。上からそういう指示がきてると。まだ 1 年生は入ったばかりでよく分かんない。仕方がないので 1 年生のオリエンテーションの担当などになった教員が、たまたま名簿の何番目、お前やらないかという程度に声をか

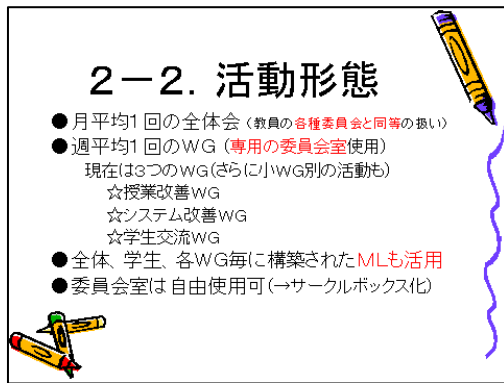
けてしまう。そういう例もございす。それから、こちらでもたぶんそうだと思うんですが、大きな学部ですとその学科制に別れておりますから、今年がどこそこの学科だと、単なるローテーションでお互いたらい回しにしているというところもあります。

ただ、このこと自体は初めから想定されますから、初めから織り込み済みでそういうシステムをとっております。どういことかという、だから当然、この活動に対してどのくらい積極性を見せるか、その学部の姿勢を計る物差しになります。それからもう 1 つ重要なのは、先ほど、名簿で適当に選ばれる、たまたま一番前の席に座っていたから選ばれる、というような学生が来た時に、つまりこの活動自身には何の関心も興味もなかった学生が来た時に、実際の活動に触れて面白みを感じるかどうか。ここをチェックしたい。予備知識があつて入ってくる人間というのは、やりたいという気持ちで、いわばサークルに参加するようなノリで入ってくるわけなんです。そうでない一般の学生が見たときにこれがどのくらい、いいものに見えるか。これをチェックする、この働きも重要です。その点では、ある意味では無責任に学生を推薦してくる学部もいくつかないと逆に困るんですね。幸いなことにその状況が今も続いておりますから、その意味ではいろいろな学生が入ってきます。こういう学生集団が常に 30 人いると。

一方、学部・センターからと書いてありますけれども、当然 11 学部の意味ですが、センターはいろいろなセンターがあつてそこから全部というわけではなくて、基本的には教育開発センターというふうに考えてください。ただ、教育開発センターの選任だけではなくて、当然のことながらこれは FD に関するものですから、全学の FD 専門委員会、こちらから責任を持って、3 名ぐらいは推薦するという形で出しますし、とにかく大学としてもこれには、ある意味では責任のある教員を 10 数名程度は常に貼り付けるという形にしています。で、あまりに教員の方を多くはしません。大体学生と 2 対 1 ぐらいになるようにということで、教員は多くても 15 名程度にとどめます。

一方、職員との連携も非常に重要ですから、各学部の事務となると大変な忙しさなので、全学の事務に当たる学務部から推薦された職員というのが 2 名、それと特色 GP で少し予算が取れましたので、この仕事を専用にする臨時の職員というのを 1 名。計 3 名の職員に、職員委員として加わっていただいております。全体としては約 50 名。50 名弱の組織がある。その組織は立ち消えになるものではなくて、毎年毎年必ずその組織が維持される。ここが非常に重要な部分です。





その人達を集めて何をするのか。活動形態という話でまとめてみました。まずはその人達に平均月1回集まってもらいます。しかしただ集まるというだけでは集まる意味がありませんから、集まって何かを会議する、協議する。こういうことですね。そういたしますとその前段として、いろいろな活動を何かやりながら新しい提案が当然出てこないといけません。したがってそれをやるために、週1回平均でワーキング活動というものをやっております。

今日、簡単なリーフレットを配らせていただきました。中を開いていただいて、ちょうど真ん中のところに、3つ部分ございますけれど、真ん中のところに、教員・学生・職員から矢印が向いていて、6つのワーキングの名前が書いてあります。この5月まではこういう感じのワーキングでした。レジュメ及びスライドでは、3つのワーキングにしておりますが、ちょっと整理統合いたしまして今は3つです。3つにしたために中身がわかりにくいかと思ひまして、今リーフレットの方をご覧いただいているのですが、例えば「新授業提案WG」。学生の発想で新しい授業を提案してもらう。こんな授業があったらいいなという程度のもではありません。中身、授業計画どういうふうにするか。評価、どうするか。教員は誰が担当するか。そういうことまで踏み込みます。あるいは折衝します。そういうことで新授業提案WGというのを、週に1回ぐらいのペースでどんどんやらないと、なかなか話が煮詰まらないというくらいのことをやりますし、それからシラバスWGは名前の通りですけども、学生視点からシラバスをいろいろ見ていくとか。あるいは授業評価WGというのは授業評価アンケートですね。履修相談WGというのは若干わかりにくいと思いますが、これはあとで映像でも出ます。1年生のためのオリエンテーションを学生がやってくれるというような感じのものなのですが、こういうワーキングはかつて6つあって、現在はそれを3つに統合しています。

ただ、実際には、スライドの方にも書き出しましたが、「さらに小WG別の活動も」ということで、授業改善WGの中には先ほどの新授業の部分で専門にやっているワーキングもありますから、それはそれでちょっとまた分かれて活動するなんていうこともまだやっております。とにかく、全体の会議をやるにあたって普段から活動しているということです。

活動する為には空間が必要です。そこでどうしているか。専用の委員会室と書き出しました。つまり、これもあとで映像で出てきますが、教員室がずらっと並んだ中に、1つだけ学生たちが専用で使える部屋があります。そこにはいろい

ろな機材も置いてありますし、厳密にいうと部屋は2つ用意してあるんですけども、そのうちの片方をそれ専用の部屋にしている。そういう部屋をいわば自由に使うことができます。自由にとはいっても、例えば部屋の管理とかそういうことがありますから、当然、先ほど1人臨時職員を雇っているという言い方をしましたが、その人間に管理を任せるというような形をしますし、それから当然、大学のルールにのっとった使い方をします。

スライドにはサークルボックス化なんて書きましたが、つまりサークルボックス的な使い方もしているんですが、ただ、あまりに、本当にサークルのようなものに完全にはならないような側面も持っているということです。

それから、かなり活用されているという意味では、教員も含めた委員全体とか、それから学生だけを対象にしたものとか、各ワーキングごととか、そのほかには1年生だけとか、1年生委員だけのというような、メーリングリスト、これを構築しております。

ですから、学生ですので、特に1年生というのはまだパソコンを十分使いこなせない、能力的なものよりは環境的なもののほうがネックになって十分使いこなせないという状況がありますから、基本的には携帯なんですけれども、携帯でもある程度の簡単な会議はできます。ですから必ずしも週1回のその場だけで会議するというよりは、少しその前段に当たるようなところを、携帯を使って少し相談しているというようなケースもございます。こういうメーリングリストも活用するという、そんな感じで毎日が過ぎていきます。



重要なのは、だから月に一回だけ集まってなんか会議をするとかいうんじゃないで、もうほとんど毎日のように何かをやっている、という感じですね。ワーキングをやる日がバラバラに設定されたりしますから、そういう意味では何曜日だけが活動の日というよりは、どこかのワーキングが何かをやっているという感じで、もう毎日そんなスケジュールが組まれますので、部屋は毎日使われているという感じです。

中にはワーキングとは関係がなく、自習のためにその部屋を使うとか、昼食のために使うとか、用もないのに来るとか、まあいろいろあるんですが、本当にサークルボックス的な自由な雰囲気も保つようにしています。実際さっき、1年生が、何も分からない1年生委員が推薦されてこの活動に入ってみると、まず感じるのとは何か知らないけど楽しそうなことをやっている、と、こういう雰囲気をまず感じ取れます。しかしよく聞いてみると普通のサークルで話し合っていることとはぜんぜん違って、授業をどうするか、大学をどうするか、

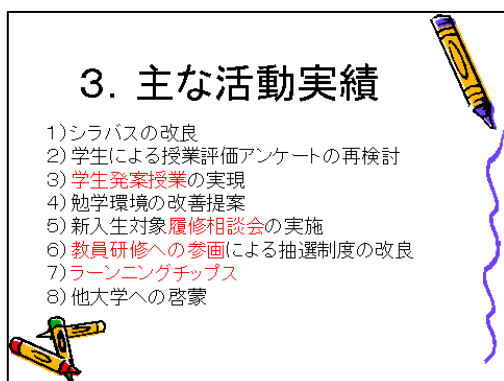
そんな話をやっているわけですね。ですから、そういう意味ではやっている中身はぜんぜん違うんですけども、雰囲氣的にサークル的な雰囲気がある。

最初の組織の作り方というのがそれとどう関わってくるのか。つまりその自由を最優先するんだったら、もっと本当にサークル化してしまったらどうだと、こういう話になるんですが、本当に希望者だけ集めてサークル的にしたらどうかという話があります。しかし、私どもは最初からそれをやったら必ず潰れるというふうに判断しております。先ほど私は組織の説明をした時に、これ今も最初の発足時からの体制が続いているといいました。将来にわたって続く、この保証が大事なんですね。ある意味では、その組織作りをそういう形でちゃんとやっているの、一定の規模というのは必ず維持できます。

それと、スライドの一番上のところにも書いてありますが、全体の会議というのは教員の各種委員会とまったく同列の扱いです。したがってここで決定されたことというのはその上の会議、教員の上の会議と同等な、例えば教育開発センターの運営委員会とか、そこは副学長をトップにした各学部の教務委員長がずらっと並ぶという会議ですけれども、そこにここからの、教育改善委員会からの提案ということで出されます。ですから例えば、学生が今度こんな授業を、かなり綿密に計画してやるようなことになった。これについて審議するなんていうことが実際に行われるわけですね。全学の専門委員会的なもの、というふうに理解していただければと思います。



ポイントとして整理すればこういうことですね。継続のコツというのは、公的な性格というのとサークル的な雰囲気、この両面を追求しているということです。



さて、どういうことを具体的にやっているか。これを少しお

話させていただきたいと思います。

まずはシラバスを改良することから始めました。2001年にこの活動を始めて、一番最初にやったのがシラバスの改良です。当時まだうちの大学では、いわゆる電話帳に当たる、冊子状の分厚いものを全員に配布する。他の学部の分も含めてドバツと重たいものを渡すと、こういうことをやってたわけですが、その時に学生はまず何を考えたか。何を考えるかというより何を言い出したか。「非常に使いにくい」と。それは単に重いとかそういうことじゃなくて、実は講義番号順に整理していました。事務的にはその方が整理しやすいのでそんなふうにずらっと並んでいたのですが、実際はそういう目的でだけ使うのはどうかと思うんですけども、学生にとっては一番シラバスを使うとすれば授業選択で使います。そういたしますと、例えば火曜の2限に何があるか。隣に火曜の2限が並んでこそ始めて比較しやすいのであって、これがあちこちのページに点在していたんではもう調べるだけでも大変だ。せめてそれを前期・後期別にして曜日・時限ごとにしてくれ。内容の濃い薄いはどう仕方ない。学生は初めからある程度諦めていましたから。そういう意味では中身の充実というのはこれから先追及するとして、まず形の上でそれをやってくれと。それすぐやりました。つまり、シラバスに最初に取り組んだのは、そういうところを提案してくれると、結果が見えやすいということをこちらで判断したので、まずそこを重点的にやってもらいました。

「ついでに何か項目を増やしたらどうだ」ということを学生たちに聞いかけましたら、今は、こちらの大学はどうなっているか分かりませんが、どこの大学でも大抵項目として入っているのが e-mail アドレスですね。連絡取りたいという時に連絡先がよく分からない。書いてあってもほとんど通じない電話番号が書いてある。これでは意味がないので、例えばオフィスアワーを使いたいと思っても、その連絡のしようもないから、メールアドレスをできるだけ書くようにと。例えば備考欄のところに書くようにというような指示だと書いたり書かなかったりしますから、始めから e-mail アドレスというところをきちんと書く。あるいはついでにオフィスアワーの欄も書く。埋めない教員もいますけれども、しかし全学としてできるだけそこを埋めるようにと。この e-mail アドレスの公開については別の問題が生じますから、抵抗の大きい教員もいます。ただ、現在の岡山大学のシラバス、今のものはほとんどウェブで外からも見れますのでご覧になっていただくと分かりますけれども、ほとんど e-mail アドレスは書いてあります。したがって連絡をしようと思えば、とりあえずシラバスを見れば何とか連絡先が分かる、というような形になっております。

それから、例えば他にウェブ版のシラバス、これは学生の方からの要求というよりは、大学がこういうふうにはしたいんだけど、冊子型とどうだろうかという、こういう比較のしやすさ、使いやすさ、比較をした上での使いやすさとか、そういうことを率直に意見出してもらいました。大事なことは、大学側が大学の財政的な事情等で何かを変えろといった時に、学生はそれをどう思っているか、それをちゃんと確認しながら前へ進む。そういうスタンスを取っております。学生たちが言い始めたことで、あまり効果はなかったんですが、そ

れでも自分たちは汗水たらして、要らなくなったシラバスを資源回収用に、リヤカー引っ張って回収していました。実は業者に持っていったら、これは全然使い物にならんとかいうふうに言われて、本当に骨折り損のくたびれもうけみたいな感じだったんですけれども、ただ、何かやろうということを学生たちが言い始めて、リヤカー貸してあげるよということはこちらではすぐにできますから、そういうことを、例えばシラバスのWGはやっています。



それから2)「学生による授業評価アンケートの再検討」。ここでは例えば、うちの授業評価アンケートというのは、全学の全科目が原則実施です。同一の質問項目で実施です。工学部等で、JABEEの関係がありますから、もっと詳しいものが必要だという場合には、全学の共通項目を含めて $+\alpha$ という形で実施します。したがって、質問項目というのを全学共通にする時に、あまりにたくさんにすると、全科目答えるということを前提に考えたらすぐ分かることなんです。学生には回答負担がものすごいことになります。しかもある時期に集中してやりますから、またかという感じですよ。20も30も答えると、なるほど授業改善には役立つかもしれないけれども、それはちゃんときちんと回答してくれてはじめて意味のあるものであって、もうイヤイヤながら回答するというようなものが幾ら集まっても、これはあまり意味がありません。そういう意味では本学の質問項目というのは、かなり圧縮して、当時、学生の意見を一番聞いたときには7つにしました。今はちょっと増えて9つなんですけれども、それでも1桁にこだわっています。9つくらいだったら答えるだろうと。しかもそのうちの2つは自己の振り返りですから、実際授業についての質問というのは7つしかありません。そういう形の授業評価の質問項目をどうするか。

それから自由記述何でも書いていいよというのは、意外とかえって書きにくいものですから、それを3本立てに分けました。変えてほしい点。このまま続けてほしい点。あとはその他、というような項目でどれかに答えてくれというようなことにすると、自由記述書かないという学生もちょっと書くようになります。

そして、アンケートというのはある種どうやってフィードバックするかということが非常に重要ですから、学生の方から少なくともマークシートの集計した分は原則公開してほしいという意見が出ました。この点に関しては山形大学には説明する必要がないんですけれども、うちはむしろ小田先生に一回来ていただいたあたりからそういうことに積極的に、うち

もやろうというような話が学生から出てきました。

次に3)「学生発案授業の実現」。先ほども少し申し上げました。学生が授業をプランする。1から10まで学生が作るというわけではありません。まず最初に学生の発想が来ます。それをやれる教員がいるかどうか。そこはいろいろパターンがありまして、例えば1つめの最初に実現した「癒しの公園計画」。これ、ずーっと科目は続いておりますけれども、これなどは最初に、学生が公園を作りたい。何か土木の専門家の一人はいるだろう。造園の専門家でもいいから誰かいるだろう。というくらいの軽い気持ちからそういう発想が出てきました。実際当たってみるとなかなかない。教員は一応1000人以上いますけれども、その中にちょうどこれにフィットするような教員はいない。これで潰れてしまうかというふうに考えたのですが、学生がそういう希望を持っているということを若干流したところ、それならちょっと希望と違うんだけど、自分だったらこういう授業ができるよということを言い始めた教員がいます。その教員は元々英語の教員だったんですけれども、ボランティアみたいな物に相当関心があって、公園というものが市民の手でどうやって作れるか。そういうことをかなり自分なりに今まで関心を持ってきた。それに近い形で実現している公園などもあるからそういうものを見に行くという、こういう授業じゃどうだろうかと。それだったら自分は公園を作れないけれども、まあ少し授業担当ができるし、それから場合によっては自分の知っている知り合いから少し関連したレクチャーを受けるというものを組み込んだらどうだ。というような授業を逆に学生の方に申し出てきました。ということでこの場合は、ある種、学生が発想して、それまでそういう授業をまったく担当していなかった教員がその学生の発想を受けて、学生の意向を確認しながら授業を組み立ててきた。そういう授業が最初に実現した物です。これも最終的な内容の詰め、ここまで譲れるかどうかというような話はその教員と学生とで相当協議を重ねました。

それから、2つめ。できたもの順という意味で2つめに書いているんですけれども、あとで映像で少し出てきます。最もエスカレートしている物で、「大学授業改善論」という名前もストレートですけれども。これは、他の教員が担当するとその教員は大学にいらなくなるだろうということで、私が担当しています。



何をやっているのかといいますと、先ほどの授業評価アンケートの自由記述に当たるようなこと、学生たちといろいろ協議していますと、どうフィードバックされるかがよく分からないと。さっきのようにマークシートの集計結果を公開するのはまあ実現しました。しかし自由記述で何とか書かれてど

う改善したかというのはよく分からない。本当にその教員は真摯に受け止めているのか。自分の伝えたあのことはちゃんと後輩たちにうまく伝わっているのか、改善につながっているのか。そのフィードバックがまったく分からない。そういう状況の中でもっと効果的な方法はないか、というふうに学生たちがいろいろ協議をした中に、直接言いに行けませんかねと。つまりアンケートに答えるんじゃなくて、その教員に直に会って直談判できませんかね、とこういうことを学生が言い始めました。

普通は、それはちょっと無理だろうという話になるんですが、この辺が私の私たる所以なのか、私はその時に、まあできるんじゃないかというような言い方をして、うまく授業という形に組み込んで、その授業を受けることによって何を伸ばすか、あるいは大学にとってどういうプラスがあるか。そういうことをしっかり考えてみよう。それで学生たちが中心になって少し考えました。結果としては、これは本当に直談判に行く授業というのを実現しているんですけど、単に直談判を最初から最後までやるんじゃなくて、最初にまず大学の事情、大学の状況はどういう状況に置かれているのか、大学の教育とはどういうものなのか。学生たちの中にもいろいろな考え方があるけれども、みんなで意見を出し合って、それで授業を全体としてどういうふうに改善したほうがいいのか。そういう意見が多いのか少ないのか。そういうことをきっちり確認した上で、やっぱりその教員にはそのことを伝えるべきであるということがはっきりした時に伝えに行こう。そんな形で授業は本当に実現をしております。

それから、3 つめと 4 つめ、これは微妙なところなんです、すでに実現している物というと、「知ってるつもり？ コンビニ」のほうが先です。しかし、早い段階から取り組んできた物が「ドラえもん科学」という授業です。もうこれは名前の通り、内容をすぐに予想できると思うんですが、ドラえもんの道具を科学的に分析してみよう、とこういう授業です。これは構想を 1 年半かけています、学生たちが中心になって。だから最初の構想から途中の折衝もいろいろあって、なかなか簡単には実現しない。そもそもドラえもんが授業になるか、あるいはドラえもんの話の内容が突飛すぎて、その科学的という考え方とうまく結びつくのか、というふうなところで相当議論をしました。結果としては、ちょっと大げさにいいますと今は工学部が学部を挙げて推進するという回答になって、工学部長が責任者で開講します。今年の後期に開講します。結果としてかなり中身の濃い物になりました。最初は非常に広い範囲で考えて、そういう道具ができれば社会の秩序が乱れてということで、倫理の面から見てどうかとか、そういうこともいろいろ考えたんですが、しかし結果としては工学部がやるということから、本当にその道具の持つ科学性、実現性、どこまで前段階の物が進んでいるのかとか。そういうことにどんどんつながっているんですけども。後期から開講するということで、どんな形で展開されるか私も興味を持っております。

この「ドラえもん科学」の場合は、学生たちから「ドラえもん科学」をやってみようというようなことを最初に提案したわけではありません。この場合は少しパターンが違いまし

て、まず全学を対象にしてコンテスト、あるいは希望を受け付けるシステムといってもいいんですけども、そういうものを実施しました。一般の学生から何か案がないか。そういうものを出してもらって、その中からこれはいけるんじゃないかということを選抜するということを、当時 2 年生だった委員の学生が中心になってやりました。その学生は結局、そこから構想を 1 年半かけて、工学部長と折衝したりいろいろなことを経験して、現在 4 年生ですが未だに残留委員をやっております。ですから、そういう意味では彼にとっては非常に面白いものだろうと思います。

ただ、これ重要なのは、例えば 1 年半かけなくても、ほとんどのものは自分が受講するんじゃないんです。1 年半かければ当然のこと自分は専門に進んでしまいますから。仮にそこまで行かなくても半年とか 1 年とかいうレベルで考えても、自分が受けるのではなくて後輩たちのために何を残すか。その発想で学生たちは発案をします。このあたりはちょっとサークルのノリとは違うんですね。自分たちが大学のスタッフとして、構成員として、後輩の学生たちにどういう教育をするか。明らかにこの観点になっています。自分たちがそれにどう協力ができるかという考え方でいって、とってもいいんですけども、そういう授業です。



それから「知ってるつもり？ コンビニ」というのは、それを少し拡大しまして、これもあとで映像に出てきますから、少し、その映像をご覧になっていただくほうが分かりやすいんですけども、全国から学生・教員・職員、いろいろ集まっていただきまして、学内でやったようなコンテストを 1 日がかりでやりました。

いろいろな発想を出してもらって、これは良い、これは良くないとかいうような話を出してもらって、その中の最優秀作が「知ってるつもり？ コンビニ」という題の、授業タイトルそのままのものでしたから、ちゃんと日本テレビにも了承を得て、この名前を使わせていただいております。「知ってるつもり？！」という番組自身とは何の関係ありません。タイトルだけを利用して、コンビニというものが現代社会の象徴である。環境問題も教育問題も、あるいは技術の面も、いろいろなところがそこから見えてくるというものです。そういうことで、当初学生が発想していたものと少し違うような形で授業は展開しましたが、これはもう今年の前期に実現して試験まで実施しました。

そういうふうに、授業の中身・内容、関わり方が授業によっては違うんですが、一番共通しているのは最初にまず学生

の発想がある。学生はどういう授業だったら積極的に受けたいと思うか。そこからまず授業を組み立ててみる。しかもそれは単なる上っ面なものじゃなくて、大学の授業としてどうあるべきかということを、途中から教員が加わって考えていく。一緒に考えていく。そういう形のものが学生発案授業です。

それから4)の「勉強環境の改善提案」というのは、例えば「教室表示」。これはどういうことかという、教室の表示が事務的な表示と教室表示という2種類あるので、新入生がものすごく混乱していたのを、一挙に直しました。2つめ「自転車置き場」。これはもう相当混乱します。岡山はキャンパスが広いので、どうしても授業と授業の間を移動するのに自転車を使わざるを得ません。その時に、もうちょっと自転車置き場を活用しようというようなことをこの委員が中心になってやってくれています。「掲示板」というのは、いわゆる本当の意味での物理的な掲示板もありますし、ウェブ版の掲示板の可能性を追求しているというような話もあります。



それから5)、「新入生対象履修相談会の実施」。これもあとで映像で出てきます。これまではこの部分前は静止画像だったんですが、今回新しく映像になっております。これも、実際映像を見ていただくのが一番分かりやすいんですが、要するに新入生が入ってきた時に学生が履修に関してかなり責任のある説明を行うということです。

どういうことかという、楽勝科目がどれだとか、先生の癖はなんだとかそういう話を伝えるんじゃないで、本当に、自分が1年生のときに何がとまどったか。単位というのは何なのかとか、履修手続きといわれてもあまりピンとこないわけです。だからその部分を、自分がとまどった感覚を思い出しながら新入生に懇切丁寧に説明してやる。実はこれは新入生にとっては非常に重要なんです。あまりに簡単なことは分からなくても大抵質問しません。あるいは教員の方もそれを見ておいてくれと。説明用の冊子とか配りまして、ちゃんと見ておくように、大学生になったんだから責任は自分にあるので、見逃したら自分の責任だ、などという言い方で済ませてしまいます。ところが本当に簡単なことというのは、聞けばすぐに分かるみたいなこともあるんですね。その聞ける場が用意されていないから、それを学生たちは提供しようじゃないかと、こういうことを考えました。

一応自由参加なんですけれども、今年度で新入生の7割は参加しています。同時に4会場で行ってやらないとできない、という形でいきますが、そういう新入生の履修相談会。全体の説明もやりますし、個別の説明もやります。各学部で委員を分けてそういう対応をしています。現在では、大学が新入生に対して配布するものの中に、この履修相

談会がいつあるというようなことがはっきり明記されていますし、それから教員が行うオリエンテーションの場に学生が入っていきまして、明日何時から学生のやる分があるから希望者はぜひ来るようにというようなアナウンスもするようになっていきます。

もしサークルがそんなことをやっているとすれば、大学はたぶん認めないと思います。認めないというのはそれをやってはいけないというふうに禁止するんじゃないで、教員が行うオリエンテーションの場にその人達が入ってきて、というようなことをやらないと思います。これをうちがやれるのは、先ほどこから申し上げているように、この活動というのはもう公的な性格を持っていますから、教員のやっている委員会活動と基本的には変わらないんです。ですからそれを組み込もうと思えば幾らでも組み込める。そういう形をとっております。

それから6)に、今日も教員研修なわけですけども、岡山にも教員研修というのがありまして、名前だけ言うとさすがに岡山だなとか思っちゃうんですが、桃太郎フォーラムなどと言ったりします。しかし、これは最初の会場が桃太郎荘だったということで、その建物の名前を使っただけでしたが、この名前良いじゃないかということでそのまま続けていて、桃太郎荘でやらなくなっても、いつまでも桃太郎フォーラムという教員研修をやっております。ワークショップという言い方ではなく、ずーっと桃太郎フォーラムという言い方のままなんですけれども、当初は本当に、誰か講師の先生から貴重なお話を聞くというような、今日の私の話は貴重でもなんでもないんですが、そういう話を聞いて研修するという感じのものだったんですけども、学生参画ということが目に付くようになってからは、学生がそこに入ってくる。さらには企画のところから加わってくる。こういう性格が非常に強くなってきて、教員研修ではなくてむしろその議論とか検討とかそういう場、いろいろな構成員がそこに入って教育問題について語る場。そういう場が変わってきています。ですから教員研修という名前にはしていますけれども、必ずしも研修というのとはちょっと違うかなという感じになっています。



例えば、これはまたあとで映像に出てきますけれども、昨年度の場合、教養科目の抽選制に学生の間からもかなり不満が出てきて、いろいろな問題点が指摘されていました。それをどう改善するかということを学生なりに提案をしました。その提案を受けてみんなで議論してみよう。そういうことを昨年度の桃太郎フォーラムでやって、実際それを受けて今年の春からかなり変えました。ですからそういう形で、研修を受ける場ではなくて本当に議論して、そこから何かをみんな

で見つけ出していく。言ってみれば普段やっている活動をもっと大きく拡大して、全学としてやるというのが、桃太郎フォーラムに今変わってきているかなと思います。

ついでに言えば、今年の桃太郎フォーラムを9月に開催しますが、5つの分科会の内1つの座長を学生がすることになっています。そういうところまでだんだん進んでいる。あるいは他の分科会にも学生が発表するというのが組まれています。教員だけのものではないというイメージにだんだんなっている。これが教員研修とのかかわりです。これもまた映像に少し出てきます。

それから映像に出ませんが、『ラーニングチップス』というまして、新入生はいろいろなとまどいもあるという話をしたんですが、とまどいを少しでもなくそうということで、半分遊びの精神で作っているんですが、冊子を新入生全員に配りました。副題がいろいろついているんですが、「新入生モモの奮闘記」とか、「先輩から新入生への学び方虎の巻」とか、要するに新入生が大学に入った時にいろいろな意味でとまどいがあるから、こういうホームページを見ると分かるよ、とかいうことが書いてあります。ただ、あまり事務的に書いてあるんじゃないで、相当な遊びの精神が入っています。これはウェブ上から確認できます。岡山大学のホームページ、あるいは教育改善委員会のホームページから見っていきますと、文章も全部出ております。

中を開くと、例えば、出だしの部分が、「ちょっとそこのおじさん。あなたよ。あ〜た。…」とか、そういう話で始まるわけです。ですから、普通のいわゆる事務的な説明が始まるのとはぜんぜん違って、会話調の説明書になっています。読んでいくと、これはここを調べればいいんだとかいうようなことが、資料的に分かるようになっていく。新入生に、必ずしもいろいろな意味で活用されているとはいいいくいく状況なんですけれども、でもそういう努力をした一つの証です。

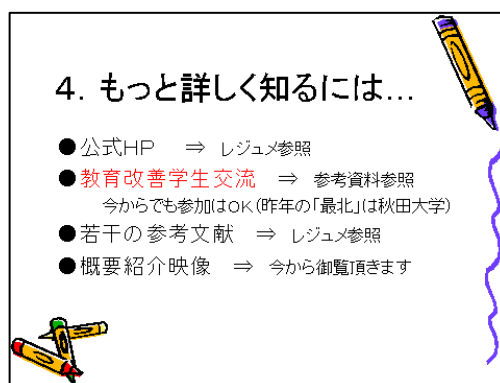
それから8)「他大学への啓蒙」、レジュメの方に具体的な名前、大変失礼ながら山形大学も挙げさせていただきました。この順番は特に意味はありません。山形大学はこの辺から我々のあとを追いかけた、というような感じではありません。むしろ、小田先生は非常に早い段階からうちの試みに興味を示されてましたから、私がここで念頭にあったのは地域ネットワークFD“樹氷”です。これは私が説明する必要もない話なんですけれども、山形大学を中心にして大学間のネットワークで学生たちを巻き込んでいこう。これは本学とはちょっと違う試みなんですけれども、趣旨はかなり私たちと似かよっているかなというふうに思います。

私どもの活動に最も近い活動を目指しているのが、大分大学とか愛知大学の一部、それからここに名前書き出しませんが徳島大学とか、その辺がかなり近いことを狙っています。京都大学を一番先に書いたんですけど、一番目立つような活動はしています。しかし、京大の場合はサークル色を前面に出しすぎたために、私は先ほどそれをやると潰れるという言い方をしたんですが、実際やはり今、休眠に入りかけています。つまり非常に活発にやっていた学生が卒業してしまうと、後をなかなか継げない。活発な学生であればあるほど、それを継承できない。それがあります。

例えば、あとで映像をご覧になっていただくと、いろいろなところと同じような学生が出てきます。これは昨年度版を映像化しているためにそうなっているのですが、今年の活動だと、必ずしもその学生たちが中心になってはいません。むしろ次の代に移行しています。1年前を考えると、あとで映像でご覧になっていただく学生とは違う学生がまた中心になっていて、本当に毎年毎年、次々に代替わりしていきます。うちの強みは、ある種そこにあります。ですから、先ほど大分大学とか愛知大学という言い方をしたんですが、特に大分大学あたりはその辺をかなり意識していて、うちと同じような仕組みを作ろうとしています。まったく同じじゃないんですが、同じようなものにしようというふうな考え方がちょっと見えています。



こうやって見ていきますと、要するに大学の教育に関わるいろいろなことに学生がどんどん口を出していく。それで中には、本来教員の縄張りであったところにどんどん踏み込んできている。授業もそうですし研修もそうですし、いろいろなところに入り込んでいる。こうお考えいただければと思います。本学の活動というのが、大学教育に関わることならすべてを対象にする。これがポイントの4になるかと思います。



あとは簡単な補足なんですけれども、もっと詳しく知ることになりますと、公式のホームページ、改善委員会のホームページがございます。そこを見ていただきますと、現在の活動だとか、あるいは若干の情報提供、今日の+αのような話があります。ホームページで映像を見るところとだけじゃなしに、もし可能だったら、実際にちょっと体験してもらうというのが一番です。

先ほど、「ドラえもん科学」の次のところで「知ってるつもり? コンビニ」というのは全国版だ。全国のところからいろいろな人が集まってもらって、という言い方をしました。去年の

場合は新しい授業科目を作るということで全国から集まってもらったんですが、毎年少しずつ趣旨を変えまして、岡山大学でやっているような試みを少し他の大学にも広めよう、関心を持ってもらえたらそこでその芽を伸ばしてもらおうということで、名前は「教育改善学生交流」という名前にしているんですが、今日は資料として配らせてもらいました。簡単なポスターをコピーしたものがあるんですが、今年9月9日に、朝10時からとしか書いてありません。終わりは一応6時というふうになっているんですが、そのあと、アンダーグラウンドで大抵懇親会が組まれたりしますので、ある意味ではそこで終わりきらないという意味合いも含んで10時からとしか書いてないのかもしれませんが。名前が学生交流となっているんですが、実際には職員とか教員とか、かなりの方が参加されています。

去年の一番北の参加は秋田大学でした。秋田大学からは職員の方が1名だけ参加されましたが、職員の方だけが参加されるというケースがあります。今年は今のところ東北からは参加の希望は出ておりません。関東からは10名くらい。去年も関東からも結構来られています。去年の場合は、最も遠方からは韓国から1人来られました。来られましたというか、ついでに人に連れられて来たという感じなんですけれど。非常に興味を持って実際に参加しています。

ここへ参加されますと、実際に学生たちと話をするというのはどういうことか、というのがかなり実感できるわけです。5分や10分話をするんじゃなくて1日それで付き合うと、学生は意外とまじめに考えてくれるということが分かります。現代の学生だとこんなことやってもそんなまじめに考えてくれんだろう、というふうに思うんですが、そうでもなくて、意外と学生たちからはこちらがハッとさせられるような発言とか、いろいろなものが見えてきます。それを感じ取っていただくということで、映像とか私のつたない話とよりは実際参加してもらうのが一番という感じがします。

それから、今日の資料の「新授業創作コンテストについて」。去年は「知ってるつもり？コンビニ」を全国版で作った。その前は学内でコンテストをやった。今年はコンテストをやるのか、と、気になっている方もおられるかもしれないのですが、今年はこんな感じで開催します。これは、太字のところを見ていただくと分かりますが、大学祭、どこの大学でも大学祭を年に1回やると思いますが、そこでコンテストをやります。案は学内外から募集することになっています。特に今年は意識的に高校生から何か意見をもらおうかというようなことで、大学祭、それからオープンキャンパスとかあるいは大学の授業を体験するとか、いろいろなことで高校生が大学に足を運んでくれます。そういう場にこういうものを持ち込んで、高校生から、まず最初のアイデアを出してもらおう。そういうものの中から、これはというような候補作を選んで、大学祭の時に投票して、一番多いものを実現するというより、一番実現可能性の高いものをもう少し追求してみようという形でいきます。

これをわざわざ資料としてつけたのは、岡山まで行けないという人のために、もちろん教員の方が応募していただいても悪いことはないんですが、もし可能だったら自分の知っ

ている学生たちに、「こんなものがあるよ。自分の大学では実現できないけれども、これを出してみると意外と岡山大学で実現するかもしれない」と話して欲しいからです。そういうことで学内外から募集する以上、ネットでもこういう形をとりますから、この場におられる方の指導される学生から応募していただいても別に問題はありません。この用紙を使ってもらってもかまいませんし、ネットからでもダウンロードできますので、そういう形のものをついでに併せて報告させていただきます。

若干の参考文献というのをレジュメの最後のところに2つほど書きましたが、もう間もなく、ミネルヴァ書房から、最近の大学のいろいろな状況も全部ひっくるめて、うちのことも少し出てきますが『大学力』という本が出ます。私が書いた文章なんかもちよつとありますが、それはレジュメに書いておきませんでした。一番新しい本だとその本かなと思います。



さて、長々話をさせていただきましたが、やはり、話をするよりは映像の方がいいだろうということで、ここから、長さにして17・8分。映像をご覧くださいます。ちゃんとナレーションは入っておりますから、私がそれほど口を挟む必要はございません。先程から申し上げている通り、この映像だけをご覧くださいになっていただいてもある程度分かるものにはなっていますし、本当は補足が必要ないんですが、1点だけもう1回繰り返しになりますけれど、これは昨年度の状況を示しているものである。したがって今年は今年で少し違うことをやっている。去年は去年、一昨年は一昨年。ちょっとずつ中身は違います。毎年似たようなことをやっている、というくらいにお考えいただければと思います。

<映像>



先程申し上げたように、大体この映像をご覧くださいだけでも一通りのことはお分かりいただけると思いますけれども、先に長々説明していたためにより理解しやすかったかなというふうには思います。

それでは、つたない話でしたけれども、ここで私の基調報告はお終いにさせていただきます。どうもありがとうございます。

司会 橋本先生どうもありがとうございました。

では、さっそくですけども、質問を受け付けますので、記録の関係上、所属とお名前を言ってください。ちなみに橋本先生は、いろいろな研究会、学会で質問魔です。もう何百人の全体会の前で、常に一番前に座ってすぐに質問しますので、どんどん受け付けられますので、この際ですので何でもお聞きになってはいかがでしょうかと思います。

中村 山形大学高等教育研究企画センターの中村でございます。

非常にすばらしい取り組みで、もう感嘆いたしました。何が一番感嘆したかという、学生の企画力、発表力、これが素晴らしいですね。やっぱり取り組みそのものの内実もさることながら、それを通じて学生が成長しているというか、あるいはそれとともに教員と学生との間のコミュニケーションが大きく発達しているという点が非常にすばらしいと思いました。

それでいくつか伺わせていただきたいんですが、時間の関係もありますので一言ずつお答えいただきたいんですが、1 つめは、この学生交流ワーキンググループというのはどんなことを授業とするのかということ。

2 つめは、新入生対象履修相談会、ラーニングチップスの提供などについてはよく分かりましたが、例えば岩手大学では日常的に常設型の修学支援室に学生を配置して、学生同士で修学支援を行っているというふうな事情がありますが、そういう常設型の学生参画の修学支援はなさっているのかどうかということ。

それから3 つめといたしまして、立ち入った話ですが、特色 GP のお金はどこに使っていらっしゃるのか。例えば新しい授業が立ち上げられた時に、その授業の費用などはそこから出すのかどうか。あるいは、学生はたぶん主体的熱意を持って参加しているんだろうと思いますけれども、学生に対するインセンティブなどはあるのかどうかということ。

最後に4 つめといたしまして、先生にも既にご参加いただきましたけれども、地域ネットワーク FD“樹氷”の、学生 FD モニター会議。学生による授業改善の意見を受けているわけなんですけれども、これをもっと発展させていくとしたら、どのようなところが秘訣になっていくでしょうか。何かお考えを聞かせていただければと思います。



橋本 はい、ご質問ありがとうございます。順番に答えます。まず、学生交流ワーキングというのはまさに先程の9月の催し、これを毎年1回やりますから、これがメインです。現在3つに再編した中で、履修相談もいわば学生交流だからということで対象にして、その2つを柱にして活動をするという形です。

それから、常設的な支援室のようなものは現在はやっておりません。もちろんその必要性は感じておりますが、うちの活動というのは基本的に学生からその声が出てきた時に初めて動き出すという考え方ですから、まだ、ある意味では学生たちはそういうものの存在には気がつかない、あるいは自分たちとしてはそこまで今は手が回らないという部分もあるかもしれません。



その点で、例えば今年の9月の催しというのは昨年度と違って、全国の他に活動しているところはどんなことをやっているだろうという報告を、6つほど受けて、それをいろいろな他大学の観点からいろいろ意見を言い合うということで企画しているんですけれども、その中に、岩手大学のような形とはちょっとイメージ違いますが、比較的立命館の取り組みに近いものがあると思います。それを聞いた岡山の学生たちがさてどう反応するか。自分たちも何か似たようなことができないだろうか。愛媛の活動はある程度、岡山大学の学生は承知しているんですけど、少し趣旨が、というかニュアンスが違う立命館の報告を聞いて、さてどう出るかなというふうにこちらは思っています。ですから、それこそ先程申し上げたように範囲は限定しませんから、当然そういうものが将来的に出てくる可能性はあると思います。またそういうものが出てきた時にそれ専用のワーキングを別に設定する。あるいは人員を補強する。こういうことは当然考えられる手立てかなというふうに思います。

それから、特色 GP の金をどこに使っているんだという話なんですけど、例えば先ほどの映像ですね。プロに任せていますから、こういうところにはかなり使います。それから、学生たちを FD の研修等に連れて行くという費用的な部分が、大学では十分補填できないんですけれども、それを、本当はあまりおおっぴらには言えないんですが特色 GP の方から少し回せるような手立てを取っております。それから新しい授業科目を作るというのは、ある程度固まっていと予算請求できないものですから、なかなかそこに完全な形で授業用にこれだけ確保するなんていうことはできません。

ただ、例えば今年の場合ですと、「知ってるつもり？コンビニ」をやまして、そこでコンビニチェーンの社長を1人呼びました。講師として呼んで、講師として話を聞くというより

は実際にチェーンのトップと学生たちが意見交流するという場を設定しましたが、その講師の謝金とか、そういうことには使わせていただいております。それからもちろん、設備的な部分の増強。例えば IT 技術の授業以上での力の伸ばし方とか、それはこの活動を推進するに当たってもう少しこういう力をつけたほうが、例えばホームページをもっと自分で作れた方がとかいうような話が出てきますから、そういうソフトを買ったり、あるいはそのための機材を少し整備したりとかいうことで使っております。

どっちかという、普通、特色 GP というのは教育プログラムに対しての予算ですので、比較的金を使いやすいんですが、うちのこの活動というのは、本当はそんなに金かけなくてもできるものが多いものですから、使いにくくて困っております。つまりなんでも使えるものじゃないんですね、特色 GP のお金というのは。だから文科省が金を使え使えというわりに、こういうことで予算使いたいんだけどという大抵文句を言ってくる。こういうことの繰り返して、まあ何とか消化しているという感じです。

それから、「樹氷」に対するアドバイスというのは大変難しいんですけど、1つはやはり、例えばこういう私の話を聞いて、大学がその学生のパワーといいますか、学生の力というものを一度やはり真剣に考えてみてもらう。そういう機会をできる限り増やす。これは一度二度ではなくて何度も繰り返して、あるいは受講者、人のかえて。例えば橋本だからあんなことをいうんだと言う話が、別の方が同じことを言うとまたちょっとイメージが違うと思いますし、そういうことで回を重ねると少し大学の認識が違ってくる。これは山形大学がどうだこうだではなくて、全体としてそれが自然なものであるという雰囲気作りを作っていくことが必要かなと思います。そういう意味では、どこの大学でも、例えばどこそこの大学でこんなふうなものをもっと進んだ、例えば岡山大学だけが突出してやっているんじゃないくて、先程申し上げたように既にいろいろな大学に普及してきています。そうするとあっちでもこっちでもやっているという情報、その情報自体も非常に意味があるかなというふうに思います。

司会 はい。それでは学長の方から。

学長 大変ありがとうございました。先生のやっていることを、僕は勘違いをしましたけれども、僕の考えていることはそんなに勘違いではないんじゃないかというラインでちょっと質問をいたします。



非常にびっくりしたのは、学生がアンケートをやって 7 割

の回収というのは、大変な状況で非常にびっくりしたし、そこまで育てた 1 つのシステムがあるんだろうなというふうに思いました。

それで、今、岡山でやられているそういう活動というのは、ある意味、広い意味での課外活動のことだと思うんです。というのは、彼らは参加することによって自己啓発されて、その中で、ものを考えて非常にグレードアップしていくという、その面が、非常に大きいのではないかなと思ってお話をうかがいました。

ただし、いわゆる教養教育の中でどういう意味を持つのかということを考える時に、私はまだまだ疑問があります。というのは、教養教育というのは実際に大きく分ければリテラシーを教えるということで語学、それからまあ情報の問題。それから大きく分ければ、東大なんかでやられた知の技法みたいな論文の書き方とか、それから発表の仕方とか、そういったことも含めてとにかく専門科目をやるのに大事な部分というものと、それと表現としては非常に分かりにくい表現になるわけですが、いわゆる人間としてどういうふうに考えるかとか。我々人間教育といたりしますけれども。はっきりと定義はなかなか難しいんですけど、それ以外の部分に分けられると思いますけれども、その、それ以外の部分にこれもおそらく入るんだろうと思うんです。学生が作ったりしてくることというのは。



だけど、やっぱりそれがどういうものであるべきかという議論というのは、私はあまりやられてないと思うんです。それは先程、挨拶のときに申し上げましたけれども、学生は確かにそれにインフルエンスされることによって非常に啓発される。だけど全体の教養教育というもののの中でこういったものがどういう意味を持って、学生にどういった影響を与えているのかということ、そろそろ何か検討してもらわなきゃいけない時期なのかなというふうに考えるんです。だから、これは始められたばかりですからこれから問題だと思いますけれども、学生がこうやって作った、そういうものがどういったふうに学生に影響を与えていくか。あるいは教養教育の中にどういった影響を与えるかというようなことをぜひご検討願いたいというのと、それからもう 1 つは、今の話とちょっと離れますけれども、学生さんが絡んでいるのは改善運動なんですね。だけど今、改善運動と同時に、何かひっくり返しちゃうという改革運動も僕はかなり大事だと思うので、教養教育のイノベーションに学生をもっと導入できないのかなと。

そうするとこうえらい混乱が起こると思いますけれども、私自身は非常に面白いことになるんじゃないかと思います。最後のはコメントですけども。どうぞよろしくお願いします。

橋本 ありがとうございます。まず最初の印象に対するところからの補足説明なんですけど、例えばアンケートを7割回答する。ああいったことがどうしてできるかといった時に、1つは、先程の説明の中で申し上げたように、ある種この活動が公的なものですから、改善委員会がやるアンケートなので、授業を担当している教員は可能な限りこれに応じる。こういう流れが1つ出来上がっております。

それととっても大事なことは、だんだんその改善委員会のやっていることが一般の学生に知れ渡ってきていますから、他のアンケートならともかく、改善委員会のアンケートならしっかり答えようかとの感覚をかなり持ってきています。実はこのことは先生が後半に少しお話をされたこととちょっと関わって、これを使って我々は何を目指しているのか、教養教育のどういう部分を担おうとしているのかといいますと、この活動に関わっている学生たち自身は確かに成長します。むしろ、この学生たちをどうしようとか我々は思っているわけではなくて、あるいはこの活動全体が教養の中でどういうふうな位置づけを持つかということはありません。将来的な課題として出てくる可能性はありますけれども今のところ念頭にはなくて、その代わりに何を目指しているかというと、要するに活動をしているのは学生30人です。それは年を重ねていったって、つまり4年、5年やったら100人、200人程度にしかありません。一方1学年、毎年毎年二千数百人入ってくるわけです。つまり圧倒的多数は一般学生なわけです。



我々の目指しているのは、一般学生にどういう刺激を与えるか。学生たちが関わることによって一般学生が大学の教育に対してどう関わるか、関わる変化を見せるか。そこを狙っているわけです。

そういう意味からいいますと、例えばアンケート1つにしてもそうなんですけれども、一番消極的な関わり方だったら、その参画の推進している委員会がやるアンケートに積極的に答えるという程度でも少し意識は違ってきますが、ただ学生たちがあんなふうに関わることが提案できるんだからという意識が一般の学生に広まった時に、ちょっと何か質問をしようとか、普通の授業の中で、単に聞くだけじゃなくて質問してみようとかという意識変化。これが若干でも少し大きくなってくればそれはずいぶん違いますし、授業全体の活性化が進みます。

うちの学長は、よく双方向という言葉を使います。言葉は使いますが、具体的に、教員に授業の双方向性を保つようにやってくださいというふうに指示をしても、具体的にどうするのか。やろうとするんだけどもうまいかない。そういう

声のほうがよく帰ってきます。その時に最も重要なのは受ける側の学生の意識改革というか意識変化です。自分たちが単に聞く側の人間ではなくて、授業と一緒に作る人間だ。こういう意識になってくると、自然ともうちょっと身を入れて授業を聞くとか、そういうことが若干でも高まってくる。そういうことを期待しています。いわば、だから刺激を与える。一般学生に対して大きな刺激を与えるというのが教養教育の中で果たしている役割だろうと思います。

それはたまたま1年生、2年生が対象ですから教養教育ということなんですけど、実際にはその委員たちは3年生、4年生と進級していきますから、専門の部分でも当然その力といいますか影響力を発揮し始めます。その点で必ずしも教養に限った問題ではなくて、大学教育全体のところで一般学生の学ぶ意欲といいますか学習力、こういうものを高めることに繋がればいいなというふうに思っています。

それから最後のところで改善と改革の話をおっしゃったんですけど、たまたまなんですけど、昨日、教養教育のあり方を考える検討委員会という各学部の副学部長を組織するような形で、もう5、6回の会議を重ねているんですが、中間答申をまとめました。当初はそれを取りまとめていた議長は、それを副学長に報告してお終いというつもりだったんですけども、私はその委員会に最初から関わっていて、それではダメだ。是非ともその根本を考えるんだったら、それを学生にも示してほしい。学生からの意見を沿えた上で副学長に上げてほしい、ということで了承を取っております。今、語句修正をしたものが近々私のほうに届きますからこれを学生たちに提示して、大学は今、教養教育を大きく変えるということではこう変わろうとしているんだけど、君たちはどう思うかという投げかけをしようと思います。

ですから、大学が大きく変わるという部分に対しても当然学生たちの意向を確認し、あるいは場合によってはそれを修正するような、そういう力になればなというふうに思っています。

司会 はい。最前列の、重厚な質問は終わりましたので、それでほとんど時間を取りましたけれども、最後に、二列目以降から後ろの人達の質問を、手短な質問ありましたらどうぞ。

三原 東北公益文科大学の三原です。



うちの大学でも橋本先生のお話をきっかけに、ちょっと似たような取り組みが始まっているわけなんですけれど、1つちょっと意地悪な質問になるかもしれませんが、1000名以上の教

員がいらっちゃって、今こういう活動に関わっている方々は、どうも聞いていると数十名の教員がという感じがするんですが、それ以外の教員の教育への取り組み、あるいは授業への効果ということは、先程おっしゃったその一般学生のじわじわじわじわとした刺激、意欲の喚起、それが回りまわって活性化みたいな、そういうかなり遠回りの形でのものを期待して、やってらっしゃるのか、それともまずそういう直接的な教員への、全体へのということは念頭にないというような形なのか、その辺りをちょっとうかがいたいと思います。

うちは40数名の教員なんですけど…。

橋本 ありがとうございます。小田先生あたりも言われるんですけれども、うちのような活動というのは比較的小規模な大学の方が行いやすいであろうと。教員の数が1000名を越えるような大きな大学でこれをやることはきわめて難しいというふうによくいわれます。実際その面は確かにその通りなんですけど、今のことに限って申しますと、先程、私、こんな言い方をしました。「岡山大学が暴走しているのは学生参画のほかに実はもう1つあるんだ。2つあって今日はそちらのもう1つの話はやらないけれども…」という言い方をしました。そのもう1つの話というのが実は教員評価なんです。教員を個人評価する。これが全国の国立大学の中ではおそらく最先端というか一番先頭を走っているだろうなと思います。教育に対してあなたはどう臨んでいるのか、というようなことを、本人が自己評価するだけではなくて、その評価するものを、エビデンスも含めて第3者が評価していく。同僚評価をしていく。これが相当なところまで進んでおります。ですから一般の教員は必ずしも学生参画だけから刺激を受けるのではなくて、いろいろなところから、これは教育に力入れなあかん、というようなことを相当やっております。

そういう中に、学生参画という程度ならいいとか、そんな感じで逆に学生の方から多少刺激的な意見が伝えられたとしても、大学としては、今は教育の方に相当力を入れるというのが全体の雰囲気では出来上がっておりますので、その点でいうとこれ以上の刺激を与える必要はないのかなという感じはしています。



司会 はい。今日のお話を伺って、今まで知っている人達も全体像がよく分かったと思います。岡山大学の取り組み、まさに、橋本先生がおっしゃったような形ですね。何度も強調された形の、公的ということですね。公的。それは大学の中の学生参画が委員会である。これは運営自体も大きく変わっているんだろう。教育面ではなくて運営の、おそらく

学長が言った形のレボリューションというものはそこに現れているんだろうと思っております。

橋本先生、長い時間どうも我々の為にありがとうございました。では、橋本先生のために今一度盛大な拍手をお願いいたします。

それではこれで午前の部を閉会させていただきまして、1時からラウンドテーブルになりますので、各ラウンドテーブルでよろしくお願いいたします。どうも午前中ありがとうございました。

山形大学教員研修会 第8回 教養教育ワークショップ
基調講演

2006/8/2

学生参画型の教育改善 ～学びの主権者としての学生のパワー～

岡山大学教育開発センター

橋 本 勝

学生・教職員教育改善委員会 教員代表

§ 0. 参加と参画

参画理論の権威 林 義樹氏（日本教育大学院大学）によれば…

参加の三段階：参集・参与・参画

「参画とはその場の全体状況を共有化しながら、計画段階から、実施、評価、伝承段階まで関わることで、場づくりそのものを担う包括的な関わり方」

『学生参画授業論』学文社 p. 166

素人の私たちの考え方は…

参画：企画段階からの主体的・積極的な参加

● ポイント1 岡山大の試みは教育学者がリードしているものではない

§ 1. 広中レポート、認証評価、そして特色GP

1) 文科省高等教育局『大学における学生生活の充実方策について—学生の立場に立った大学づくりを目指して—』（2000. 6）によれば…（下線は橋本）

「学生中心の大学」への転換を図るという観点から、大学教育においては、大学で教育を受ける学生の希望や意見を、適切に大学の運営に反映させることが重要である。また、学生が積極的に大学運営に関わることを通じて主体的に大学生活を送ることは、学生の社会的な成長を促すことを期待できるものである。

学生の意見や希望を反映させる具体的な方法としては、（a）大学として学生からのアンケート調査を行ったり、学生の実態調査を行うことにより、その希望や意見を聴取する方法、（b）学生の代表と大学の運営責任者等との懇談会等を実施し、その希望や意見を聴取する方法、（c）学生の代表を大学の諸機関に参加させる方法などが考えられる。

これまで大学において、学生の希望や意見を反映させる分野としては、正課外教育や福利厚生といった学生が中心となって活動する分野について考えられてきたが、今後は、正課教育の内容のあり方や授業方法、さらに教育条件の改善などの分野についても、学生の希望や意見を適切に取り入れる仕組みを整備していくことが重要である。

全文は http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/000601.htm

2) 大学評価・学位授与機構の認証評価における大学評価基準にも…

基準9 教育の質の向上及び改善のためのシステム の基本的観点（9－2－①）には
「ファカルティー・ディベロップメントについて、学生や教職員のニーズが反映されており、組織として適切な方法で実施されているか」

3) 17年度の文科省特色GPに採択：新機軸「学生参画」による教育改善システム

採択理由は http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/17/07/05071904/004/001/001.pdf

● ポイント2 岡山大の暴走(?)は政府公認のものである

§ 2. 組織概要と活動形態

- 1 1 学部から推薦された学生委員（任期2年） …残留委員を含めて約30名
- 各学部から推薦された教員委員+教育開発センター教員 …多くても15名程度
- 学務部から推薦された職員委員+特色GPで臨時雇用した職員 …現在は3名
- 総勢約50名を統括するのは学生委員長
- 月平均1回の全体会（教員の各種委員会と同等の扱い）
- 週平均1回のWG（専用の委員会室を使用）
- 現在は、授業改善/システム改善/学生交流の3つ（本年6月に再編）
- 全体、学生委員、各WG毎に構築されたMLも活用
- 委員会室はWG以外の目的でも自由使用可（→サークルボックス化）

● ポイント3 継続のコツは公的性格+サークル的雰囲気

§ 3. いったい何が出来たのか、出来るのか

- 1) シラバスの改良
 - 見やすさ・使いやすさの追求/利用者の視点からのWebシラバスと冊子シラバスの比較検討/過年度冊子シラバスの資源回収
- 2) 学生による授業評価アンケートの再検討
 - 質問項目の精選/自由記述の改良/個別集計結果の公表
- 3) 学生発案授業の実現
 - 癒しの公園計画/大学授業改善論/ドラえもんの科学/知ってるつもり?コンビニ
- 4) 勉学環境の改善提案：教室表示/自転車置き場/掲示板
- 5) 新入生対象履修相談会の実施
 - 今年度は約7割が参加。内容は学生の自主企画ながら大学から全幅の信頼
- 6) 教員研修への参画による教養科目の抽選制度の改良
 - 教員研修の変質：研修の場から検討・議論の場へ
- 7) ラーニングチップス：先輩学生からの学習指南
- 8) 他大学への啓蒙：既に各地で同様な動きの芽が…
 - 京都大学/大阪大学/愛知大学/太分大学/山形大学/金沢大学/長崎大学など

● ポイント4 大学教育に関わることなら全てを対象とする

§ 4. もっと詳しく知るには

- ・公式HP：<http://cf.d.cc.okayama-u.ac.jp/stfd/>
- ・教育改善学生交流：教職員だけの参加もOK（参考資料参照）
 - 今年は9/9（土）に本学で開催。（外部定員100名）
- ・概要紹介用映像（17分）：今から御覧頂きます。

その他の参考資料例：

- 「誰にとってのFDか—岡山大学 学生・教職員教育改善委員会がめざすもの—」
（『FDが大学教育を変える』文葉社 2002 所収）
- 「学生の活力を改革に活かす」（Between 2005.6-7月号 特集記事）

● ポイント5 百聞は一見にしかず

山形大学教員研修会 第8回 教養教育ワークショップ
基調講演 参考資料

新授業創作コンテストについて

岡山大学学生・教職員教育改善委員会
授業改善ワーキンググループ

この度、岡山大学学生・教職員教育改善委員会（教育改善委員会）は皆さんが「あったら良いな」「是非受けてみたい」と思う授業案を募集し、投票により最優秀授業案を決めるコンテストを実施します。本コンテストは今秋行われる岡山大学の大学祭(11月3～5日)にて行う予定で、現在このコンテストに向けて授業案を学内外から広く募集しています。**最優秀授業案は来年度以降岡山大学で実際に開講される予定であり、最優秀授業案を考案した方には素敵な賞品(iPod?)を用意しておりますので、ふるってご応募下さい。**

応募は、持参、郵送、電子メールのいずれでも受け付けます。持参の場合は裏面の応募用紙に所定事項を記入のうえ、教育改善委員会の委員会室（一般教育棟C棟220）までお持ち下さい。郵送の場合は所定事項を記入した応募用紙を下記の郵送先宛にお送り下さい。電子メールの場合は教育改善委員会のホームページから応募用紙（MS Word ファイル）をダウンロードして記入のうえ、電子メールに添付し、下記のアドレス宛にお送り下さい。また、**大学祭当日のコンテスト会場における応募も受け付けます。**

※岡山大学学生・教職員教育改善委員会は岡山大学教育開発センターに設置された委員会であり、本委員会では、学生・教員・職員の三者が対等な委員として、岡山大学における教育改善の活動に参画しています。このコンテストは本委員会の授業改善ワーキンググループによって企画されました。本ワーキンググループはこれまでも新しい授業の企画・立案、担当教員の人選と交渉などを行い、学生立案型授業の開講に大きく貢献してきました。本ワーキンググループの活動により、「癒しの公園計画」、「大学授業改善論」、「知ってるつもり？コンビニ」、「ドラえものの科学（平成18年度後期）」などの授業が開講されています。

応募要領	
〳切	平成18年11月3日（大学祭当日の応募も可）
応募先	教育改善委員会 委員会室：一般教育棟C棟2F（C220） 電子メール： stfd@cfid.cc.okayama-u.ac.jp ※教育改善委員会ホームページ： http://cfid.cc.okayama-u.ac.jp/stfd
郵送先	〒700-8530 岡山市津島中1-1-1 岡山大学 教育開発センター 学生・教職員教育改善委員会 「新授業創作コンテスト係り」

新授業創作コンテスト

—応募用紙—

● 応募者情報

【氏名】	【学部・学科・学年】
------	------------

● 新授業提案内容 *は必ず記入してください

【授業科目名】*
【授業の概要】*（できれば詳しく記述してください。）
【その他の項目】（例えば成績のつけ方の希望，授業の目的等あれば、記述してください。）

学生力に教育改善

第3回 教育改善学生交流

シンポジウム・ワークショップ

*i * See* 2006

進化の時。
変えるのは、
あなたです!!

日時 平成18年9月9日(土) 10:00～

場所 岡山大学創立五十周年記念館 他

参加費 無料

主催 岡山大学教育開発センター

学生・教職員教育改善委員会

詳細 <http://cfd.cc.okayama-u.ac.jp/stfd/wg/iSee2006>

E-mail : stfd@cfd.cc.okayama-u.ac.jp

平成17年度文部科学省
特色GP採択

平成17年度 「特色ある大学教育支援プログラム」 に採択されました。

「特色ある大学教育支援プログラム」とは、平成15年度から文部科学省が始めた、国公立大学の大学教育の改善に資する種々の取組のうちから特色ある優れたものを選定、公表するものです。

新機軸「学生参画」による教育改善システム

知的共同体としての大学において、最大構成員である学生の声を教育改善に活かすことは、21世紀の大学のあり方を考えるとき不可欠の要素であり、学生・教員・職員が一体となって推進する本学の様々な取組実績は全国から注目を集めています。

このシステムの主役は？

学生・教職員教育改善委員会

岡山大学の正式な委員会です。

教職員だけではなく、
学生が主体性をもって
参画しているから、
学生の意見がダイレクトに伝わり、
学生自身が検討できるの！

学生委員
約30名

教員委員
約15名

職員委員
数名

この三者が一体となるため…
教育改善の実現度がUP!

あなたもパワー・待ってませー！

あなたの
声 あなたの
手で



大学や先生や授業について、「ああだったらいいな」「こうしてほしいな」と思う事はありませんか？ 私たち学生の声が、本当に届く。大学が変わる!!それがこれからの岡山大学が目指すカタチです。

学生力に教育改善

—新機軸「学生参画」による教育改善システム—

岡山大学
岡山大学教育開発センター
学生・教職員教育改善委員会

お問合せ

〒700-8530 岡山市津島中2丁目1-1

一般教育棟C棟2F (C220)

E-mail stfd@cfd.cc.okayama-u.ac.jp

HP <http://cfd.cc.okayama-u.ac.jp/stfd/>

改善委員会は全体会と主に6つのワーキンググループ(WG)に分かれての活動があります。

この活動は、学生主体で運営され、気軽に参画できる体制となっています。

全体会とWG

委員会の活動は、月に1度の全体会と各WGが週1回程度実施されています。
活動の拠点として、学生・教職員教育改善委員会の部屋も用意されています。



これらの活動により、様々な改善や履修相談会、学生交流等が積極的に展開されています。

全体会

教育改善学生交流ワークショップ i*Sae

毎年9月に実施されるワークショップには全国の大学から学生・教職員が参加して教育改善に向けた交流が行われています。



教育改善

学習意欲の向上

教員への好影響

履修相談

- 学生提案の新授業科目の実現
- 抽選制の改善
- 制度面・環境面での学習環境の改善
- 学生視点からの授業評価アンケートの改善
- 見やすく使いやすいシラバス

学生交流

履修相談会

4月に入学生への履修に関するお手伝いを行っています。
履修相談会は、岡山大学準公式行事として位置づけられています。



各WGの検討された事項が具現化し、実際の教育改善につながっています。

平成18年4月初版発行

学生力に教育改善

進化できるか

ラーニングチップス

新入生モモの奮闘記

<http://cfid.cc.okayama-u.ac.jp/stfd/lt/>



先輩から新入生への
学び方虎の巻



岡山大学教育開発センター

学生・教職員 **教育改善委員会**

一般教養棟C棟2F(C220) E.mail stfd@cfid.cc.okayama-u.ac.jp
HP <http://cfid.cc.okayama-u.ac.jp/stfd/>

平成17年度文部科学省
特色GP採択

第2部 ラウンドテーブル

【ラウンドテーブル1：YUeラーニングの展望】

コーディネーター：中村 三春 教授(高等教育研究企画センター)

パネリスト：小池 隆太 氏(山形県立米沢女子短期大学)

清塚 邦彦 氏(人文学部)



【ラウンドテーブル2：学生参加による授業改善】

コーディネーター：金澤 真理 助教授(人文学部)

パネリスト：三原 容子 氏(東北公益文科大学)

小田 友弥 氏(地域教育文化学部)



【ラウンドテーブル3：高大連携の推進】

コーディネーター：栗山 恭直 助教授(理学部)

パネリスト：山崎 昭 氏(県立上山明新館高校)

鵜浦 啓 氏(理学部)

水戸部 和久 氏(工学部)

黒沼 毅 氏(学務部教育企画ユニット)



ラウンドテーブル1:YUeラーニングの展望

記録

山形大学教員研修会 第8回教養教育ワークショップ ラウンドテーブル1:YUeラーニングの展望

日 時:平成18年8月2日(水) 13:00~15:00

会 場:山形大学教養教育2号館211講義室

コーディネーター:中村 三春 氏(高等教育研究企画センター・人文学部)

パネリスト:小池 隆太 氏(山形県立米沢女子短期大学)

清塚 邦彦 氏(人文学部)

参加者数:17名

記 録:小田 隆治

記 録

話題提供

1. 山形大学教養教育eラーニング化の取り組み (報告者:中村三春氏) (パワーポイント資料参照)

■大学コンソーシアムやまがた(ゆうキャンパス)

- ・参加9大学・短大・高専間での単位互換
- ・平成18年度より制度発足

■eラーニング実験授業

- ・『変異する日本現代小説』(教養教育,文化・行動領域)

授業担当者:中村三春

- ・「授業改善アンケート」

高い評価が下された。

■これまでの講演会や講習会,リーフレット配布などのeラーニングの啓蒙活動

■単位互換の受講者が少ないので,オンデマンドにこれから取り組む。

■平成18年度eラーニング授業の具体的説明

■Campusmate(LMS)の使い方

■今後の課題

■ニューヨーク州立大学とのeラーニングによる単位互換

■国内のeラーニング先進大学ならびにOCWの状況報告

2. 遠隔授業を担当して(報告者:清塚邦彦)

■平凡な並みの教員が遠隔授業を行った経験談

授業『哲学ってどんなこと』

- ・道具立て
- ・当日配布していたものを前日12時までにLMSにアップロードし,かつ,印刷した形で当日配布
- ・スライド

■明らかな成果

- ・パワーポイントを使うことで、題材の整理が促され、計画的な授業になった。
- ・授業進行が効率的になり、可能性の幅が広がった。

■疑問

- ・これはパワーポイントを使うメリットであった。
- ・LMSのおかげで、講義資料類をファイル形式配布することが容易になった。
- ・LMSに蓄積された自分の授業の動画（音声）ファイルを見ることは、授業改善に大いに有益。

■学生のためになったか？

- ・LMSを通じての連絡や質問解答は、機能しなかった。双方向性の確保には、出席カードへの記入と、それに対する口頭・プリント等での応答を行った。
- ・機材の操作に気をとられ、学生との関係性が少し希薄になったかな。

■著作権問題はクリアできたか？

- ・結論から言えば、できなかった。

■今後の展望

- ・著作権問題のクリア
- ・教育技術の向上を図るFD活動としては明らかに有意義だった。
- ・授業支援システムの明確化。

3. E-learningにおけるWebの利用形態とその課題 ―CAIからWebへ―（報告者：小池隆太氏）

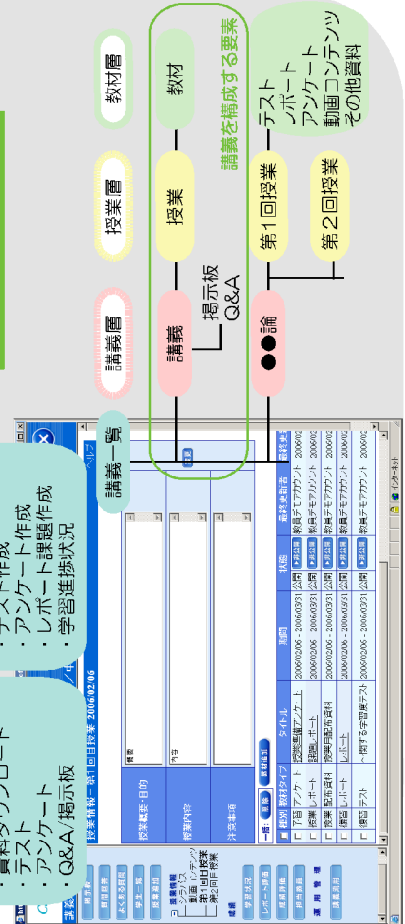
- パッケージ型の授業支援ソフトから、ネットワーク・Web利用型への移行に伴って生じて来た諸課題を報告者の体験から提示
(パワーポイント資料参照)



の効果を高めることが目的。

離れたキャンパスとの教員と学生の簡易ポータル的な役割もあり、「必要な情報」、「欲しい情報」が明確になるように予習・授業・復習を一つのサイクルと考える。階層管理し、目的の授業にアクセスしやすい。講義一つ一つに複数の掲示板が設置でき、他にもQ&Aを利用して教員と学生、学生同士がコミュニケーションをとることができ、

- ・講義概要
- ・学習計画
- ・レポート提出
- ・ティスカッション
- ・資料ダウンロード
- ・テスト
- ・アンケート
- ・Q&A/掲示板
- ・授業登録
- ・Q&A/掲示板回答
- ・レポート採点
- ・成績管理
- ・テスト作成
- ・アンケート作成
- ・学習進捗状況
- ・学習履歴



ラウンドテーブル1：Y U eラーニングの展望
中村 三春（高等教育研究企画センター）

配付資料

山形大学教養教育
eラーニング化の取り組み

山形大学高等教育研究企画センター
学外連携推進部門長

大学コンソーシアムやまがた
地域ネットワークFD “樹氷”

中村 三春

山形大学
eラーニング導入の機運

- ◆山形大学
 - 県内3地区4キャンパスに分散
 - リモート講義／地域連携への活用
- ◆大学コンソーシアムやまがた（ゆうキャンパス）
 - 参加9大学・短大・高専間での単位互換
 - 平成18年度より制度発足
- ◆地域ネットワークFD “樹氷”（現代GP）
 - 参加3大学・3短大合同でのFD
 - IT導入による授業方法の共同開発

1

山形大学
eラーニング実験授業

山形大学
Yamagata University
変異する日本現代小説

平成17年度 山形大学教養教育 文化・行動領域 文学
水曜日 8:50～10:20 受講者数 77名

2

山形大学
“樹氷” 公開授業・検討会

平成17年11月21日 学内・他大学から教職員が授業を参観し、その後、検討会を開いた。時間割上、参観できない教員は、昼休みにビデオを視聴。

3

山形大学
アンケート結果(5点満点)

◆ 4 意欲的に受講したか ■ 4. 28	◆ 11 授業方法は工夫されていたか ■ 4. 26
◆ 5 内容を理解できたか ■ 3. 76	◆ 12 話し方は聞きやすかったか ■ 4. 50
◆ 6 知識向上に有益か ■ 4. 21	◆ 13 教科書等の情報提供は ■ 4. 20
◆ 7 シラバスは適切か ■ 4. 37	◆ 14 板書・配布物・資料提示 ■ 4. 52
◆ 8 教員の熱意はあったか ■ 4. 59	◆ 15 教室環境に配慮していたか ■ 4. 34
◆ 9 教授法は分かりやすかったか ■ 4. 27	◆ 16 教室・施設・設備は ■ 4. 36
◆ 10 双方向性は確保されたか ■ 3. 34	◆ 17 総合的に判断すると ■ 4. 52

★77人中70人回答(90・90%) 全体総合平均値 4.09

4

山形大学
自由記述(良かった点①)

- ◆ 専門課程に比べると専門の授業ばかりなので新鮮だった。現代文学に触れることが少なかったのが、勉強になった。
- ◆ リモート形式。鶴岡キャンパスでは講義内容に偏りがあって、考えも偏りがちになるが、この講義を通して、少しでも多面的にもの考えるようになった。めったに読まなかった本も読めたので、その面でも感謝している。
- ◆ 色々な作家に対する興味が沸いた。作品にも。
- ◆ たくさん小説を紹介していること。
- ◆ 毎回、授業に使用するパワーポイントをプリントアウトして配布してくれる所。助かる。
- ◆ 様々な作風の小説家について知ることができた。

5



山形大学
Yamagata University

自由記述(良かった点②)

- ◆ 授業で取り上げられた作家に興味を持ち、本を読む機会が増えたと思う。また、今までただ娯楽として本(小説)を読むだけだったが、授業で取り上げられた作品に関しては考えて読むようになった。
- ◆ たくさんの作品について、自分が思いもつかなかった視点からのおもしろい解説が聴けてよかった。
- ◆ 先生の授業がおもしろかったこと。再び読書への意欲をかきたてられたこと。
- ◆ この授業がなければまず出会わなかったような作品に出会ったこと。
- ◆ 作家として有名な人から、大衆的にはあまり知られていない人まで、様々なタイプの作家をとりあげてくれたこと。
- ◆ 資料はたくさんあったが読みやすかった。
- ◆ 色々な作家がどういった特徴等を持っているのかを知れた点。

6



山形大学
Yamagata University

自由記述(良かった点③)

- ◆ 時々、中村節とでも表現すべき興味深い論理展開があり、非常にためになったと思います。とりあげる題材をシェイプしてもこれだけは残すべきかと。
- ◆ ふだん小説は読まないが、そのおもしろさがわかった。
- ◆ 先生の話がとても面白かったです！また、小説に対して今までとは少し違った見方をできるようになった気がします。充実した授業で楽しかったです！
- ◆ 様々な作家について幅広い作品が紹介されていて、参考になった。
- ◆ とり上げる作品が魅力的であったこと。
- ◆ 先生が抜群。
- ◆ 難解な文学・小説を理論立てて話してくれるので、わかりやすく、おもしろかった。今まで知らなかった作者にも興味が湧いた。ぜひ読んでみたい。

7



山形大学
Yamagata University

自由記述(改善すべき点①)

- ◆ 資料が多すぎる。
- ◆ 質問する時間が欲しかった。
- ◆ 他学部での会場においても質問を受けつけて欲しかった。
- ◆ シラバスの授業予定と最後ずれてしまったので、自分が楽しみにしていた作家が1回になってしまっただけで残念だった。
- ◆ こちらの意見を授業に反映しづらい点。感想文は後手すぎるかも。
- ◆ アバンギャルド、メタフィクション、モンタージュ……など、横文字が多くわかりにくかった点もあった(直観的に)。

8



山形大学
Yamagata University

自由記述(改善すべき点②)

- ◆ 授業で取り上げられた作品のうち2、3冊でもいいので参考文献として大学の書籍部に置けてもらえたら良かった。
- ◆ 古い作品が多く、手に入れるのが難しかった。
- ◆ 各回の感想を考える時間がもっとあったらいいと思いました。
- ◆ たまに、早口で聞き取れない部分がありました。
- ◆ 紹介する作家の人数を少なくして、もっと作品の詳細について解説してもいいのではないかと思います。
- ◆ 高度である。
- ◆ 一気に話すので時々わからなくなることがありました。

9



山形大学
Yamagata University

自由記述(その他の要望)

- ◆ 少人数で教養セミナーにしても面白いと思う。
- ◆ もっと画像を鮮明にした方がよい。
- ◆ 一般教養科目にしては多少難しい気もしたが、興味深い内容で楽しんで受講できました。
- ◆ パワーポイントだと前の席に座ると電気が暗くて目が疲れました。

10

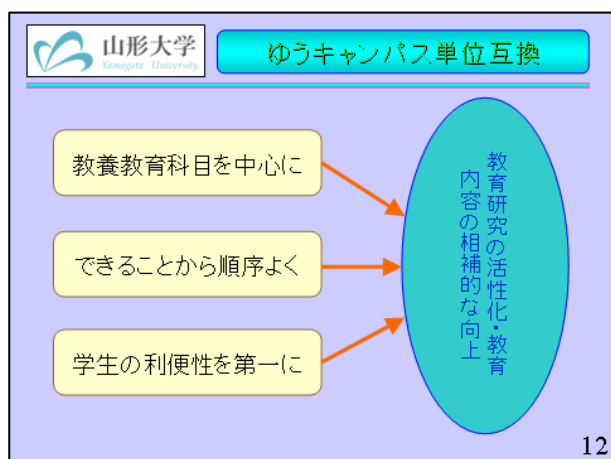


山形大学
Yamagata University

やまがたeラーニング展開の構想



11



山形大学
Yamagata University

平成18年度eラーニング授業

前期

撮影・配信用教室を使用、TAの常駐、スタッフによる設定

日曜日	1-2時	ギリシア哲学の源流(哲学)	文化・行輪	小敷 正久	人文学部
日曜日	7-8時	新幹線(歴史)	文化・行輪	三上 泰幸	人文学部
水曜日	1-2時	近代ヨーロッパ国家の多様な文化(歴史)	文化・行輪	山崎 彰	人文学部
水曜日	7-8時	哲学ってどんなこと?(哲学)	文化・行輪	横山 典彦	人文学部
水曜日	1-2時	「新」はなぜだ?—現代社会とアイロニー—(文学)	文化・行輪	中村 三孝	人文学部
水曜日	5-6時	先進国「社会」のための情報モラル(教育セミナー)	総合	知徳 貴子	学術情報基盤センター

後期

日曜日	1-2時	経済について(経済)	文化・行輪	小敷 正久	人文学部
水曜日	7-8時	哲学ってどんなこと?(哲学)	文化・行輪	横山 典彦	人文学部
水曜日	1-2時	香の歴史(化学)	理数・化学	尾山 孝雄	理学部
水曜日	5-6時	学びの心(心理学)	文化・行輪	出口 敦	地域教育文化学部
水曜日	1-2時	ヨーロッパ史の中のドイツ(歴史)	文化・行輪	山崎 彰	人文学部

13

山形大学 **単位互換制度の出発**

ゆうキャンパス単位互換
平成18年4月スタート

◆なお、利用者は伸びず。

- 準備期間
- 広報
- 交通

↓

◆eラーニング受講者、残念ながら、ゼロ！

- 実験授業として開講

14



- 山形大学** **担当教員の意見**
- ◆パワーポイントの導入により、授業の計画性が高まった。これまでのように、用意した半分までしか進まない、などということは無くなった。
 - ◆学生の反応は抜群であり、また、前回の復習がやりやすくなった。
 - ◆最初は文字の大きさ、色が見づらいという苦情があった。そこで、初めの3回くらいは学生に感想を聞きながら修正した。その結果、苦情は無くなった。
 - ◆LMSの掲示板は、学生が使わない。授業中に行う、質問紙法で足りている。もっとLMSでコミュニケーションをしたい。
 - ◆授業計画・資料はその都度アップロードしている。
- 16

- 山形大学** **今後の課題①**
- ◆授業運営
 - ①受講者の確保
 - 募集方法、広報
 - ②授業担当者の拡大
 - 前・後期各10科目以上へ
 - ③他大学への拡大
 - 相互にeラーニングで単位互換
 - 設備・システムの整備
 - ◆授業方法
 - ①コンテンツ品質の向上
 - 撮影教室の改善
 - ②LMSの活用
 - 広報、実演
 - ◆その他
 - ①地域連携
 - 小中高大連携、市民向け
 - ②国際交流
 - 海外向けコンテンツの開発
- 17

ラウンドテーブル1：Y U eラーニングの展望
清塚 邦彦（人文学部）

配付資料 1

偽であるものを真であるとして受け入れてきたことか、また、その後、私がそれらの上に築き上げてきたものは、どれもみな、何と疑わしいものであるか、したがって、もし私が学問においていつか堅固で揺るぎのないものを打ち立てようと欲するのなら、一生に一度は、すべてを根こそぎくつがえし、最初の土台から新たに始めなければならない、と」（『省察』）

「我々は生まれたときは幼児であつたゆえに、そして、我々の理性を完全に使用する以前から、感覚的な事物についてのいろいろの判断を下してきたゆえに、多くの先入観によって真理の認識から遠ざけられている。そこで、そういう先入観から脱するためには、少しでも不確実だと思われるものを、一生に一度は、疑おうと努めるほかにないように思われる」（『哲学原理』）。



b. 懐疑の手順

イ、**錯覚**：「これまでに私がこのうえなく真であると認めてきたすべてのものを、私は**感覚**から受け取ったか、あるいは間接に、感覚を介して受け取ったのである。ところが、これらの感覚が時として眠るものであることを私は知っている〔例えば、遠くから見て円い塔と見えるものが、近づいてよく見ると実は四角な塔であつたり、また、水中に真つぐな棒を入れると折れて見える〕。そして、ただの一度でも我々を欺いたことのあるものには決して全幅の信頼を置かないのが、分別ある態度というものである」（『省察』第一部）。

ロ、**計算間違ひ**：「次に、幾何学のもつとも単純な問題についてさえ、推理を間違えて誤謬推理を犯す人々がいるのだから、わたしもまた他の誰とも同じく誤りうると判断して、わたしが以前には明らかな論証と考えていたあらゆる推理を、偽なるものとして投げ捨てた」（『方法叙説』第4部）。

ハ、**夢**：「……いま私がこの紙を見詰めている眼は、確かに目覚めたものである。私が動かしている眼はまどろんではない。この手を私は、故意に、しかも意識して、伸ばすのであり、伸ばすことを感覚している。これほど判明なことが眠っている人に起こるはずがないだ

哲学ってどんなこと？20060523
第6回：ルネ・デカルト（1596-1650）



フランスの数学者・自然科学者・哲学者。
解析幾何学の創始者。「デカルト座標」で有名。
主著：『方法叙説』『省察』『哲学原理』
翻訳：中央公論社『世界の名著 21 デカルト』、河出書房新社『世界の大思想 21 デカルト』、その他、岩波文庫、中公文庫。
参考文献：野田又男『デカルト』（岩波新書）、伊藤勝彦『デカルト』（清水書院、井上庄七・森田良紀編『デカルト 方法序説入門』（有斐閣新書）、他

デカルトはよく、近代哲学の始祖として名前が挙げられる。それは、デカルトが、近代という時代を特徴付ける二つの大きな思想的テーマに正面から取り組み、それぞれについて一つの典型的な回答を示した人物であるためである。

二つの大きな思想的テーマの一つは、自然科学的な世界観をどう考えるか、という問題である。また、もう一つは、自然科学が描き出す自然の中で、人間はどのような位置を占めるのか、という問題である。

どちらの問題についても、デカルトが示した回答は、決して誰もが受け入れうるようなものではないが、しかし、これらの問題について考える時にまずもって考慮に入れなければならない正統的な答案として、今日に至るまで、様々な論議の的となってきた。

デカルトの業績は哲学に限らない広い射程を持つが、以下では、デカルト哲学の出発点となる「方法的懐疑」、及び、それに基づいて展開される人間観と自然観の要点だけに話を限定する。

1. 方法的懐疑

a. **懐疑の狙い**：デカルトは宗教的な世界観に代わる新しい知叢の体系の基礎を捜し求めらる中で、一種の思考実験として、「**少しでも疑いを抜く余地のある知識はすべて偽であることみなせ**」という原則を採用する。それが、いわゆる「方法的懐疑」である。その動機は次のように述べられている。

「すでに何年も前に、私はこう気づいていた――まだ年少のころに私は、それほど多くの

では、**存在**することが疑いえないこの《私=心=精神》とは、正確には何ものなのか。
↓

b. 《私》は物体ではない。

物体の存在は、疑いの余地がある。しかし、《私》の存在には疑いの余地がない。だから、《私》は物体ではない。したがって、《私》は、私の身体（これも物体の一種）とは独立に存在するものである。

→二元論。

デカルトによれば、常識的な意味での人間とは、互いに独立に存在する心（精神）と身体（物体）とが一体化してできた合成的な存在者である。そして、心と体が分離すれば、当の人間は死ぬが、しかし、その人間のいわば核心部分にあたる**心（精神）**の方は、（単に物体から分離するだけであって）不死である。つまり、デカルトは、心が物体とは別個の存在者であるという事実を、心（精神）が不死であることの証拠だと考える。

c. 《私》とは、考えるもの（res cogitans=thinking being）である。

歩くことや、栄養を摂取すること等は、身体の属性（性質）であるから、《私》の属性ではない。そして、身体に属する性質をすべて除去して行くと、最後に残るのは、「考えること」だけである。だから、《私》の性質と言えるものは、厳密には、考えることだけである。

以上の**b**と**c**は、次のような箇所でも明瞭に表明されている。

「…私は、私が身体を持たず、世界というものが存在せず、私のいる場所というものもない、と仮想することができると、しかし、だからといって、私が存在しない、とは仮想できない。それどころか反対に、私が他のものの真理性を疑おうと考えること自体から、極めて明らかに、しかも確実に、私が存在することが帰結する。逆にまた、もし私がただ考えることだけをやめたとしたら、たとえそれまで私が想像した他のすべてのものが真であったとしても、だからといって私がその間存在していたと信ずるべき何の理由もない。これらのことから、私は次のことを知った。つまり、私は一つの実体であって、その本質あるいは本性はただ、考えるということ以外の何ものでもない。私が存在するためには、何らの場所も必要でなく、いかなる物質的なものにも依存しない。したがって、この「私」というもの、すなわち、私をして私たらしめるところの「精神」は、物体からはっきりと区別されるものであり、また、精神は物体よりも認識しやすいものであり、たとえ物体が存在しないとしても、精神は、それがあるところのものであることをやめないであろう」（『方法序説』第4部）。

コメント

(*) 心の本性が「考えること」にあるという思想は、裏を返せば、考える能力を持たないものは心を持たない、という考え方でもある。

ろう。とはいえ私は、別のときには夢の中で、やはり同じ様な考えにだまされたことがあったのを、思いださないだろうか。これらのことをさらに注意深く考えてみると、**覚醒と睡眠とを区別しうる確かなしるしはまったく存在しない**ことが分かる…」(『省察』第一部)。

二、 **欺く神、または悪しき霊**：我々の抱く信念はすべて、膨大な知識と能力を持った邪悪な神（又は悪霊）によって、常に誤るように操作されているのかもしれない。

「私がよく覚えている或る古い意見によれば、すべてのことをなす神が存在し、この神によって私は現にある通りのものとして造られたのだという。もしもそうなら、ことによるとこの神は、天も地も、広がりも形も大きさも場所もまったく存在しないにもかかわらず、それらが現に見られる通りに存在すると私が思いこむようにとりはからったのかも知れない。そればかりではない。……私が2に3を加えたり、四角形の辺の数を教えたり、あるいはもっと簡単なことが考えられるなら、それをするたびごとに、私が誤りを犯すように、この神は仕向けたのではないだろうか」（『省察』第一部）。

↓

c. 懷疑の帰結

「私がかつて真であると思ったものの中には、それについて疑うことの許されないようなものはない」（『省察』第一部）。

2、考える《私》の存在

a. cogito ergo sum (I think, therefore I am).

かりに物体的世界に関する知識や、数学・幾何学の知識が、すべて誤りだとしても、私がそれらの知識を真だと信じたり、あるいは疑ったりしていること自体は、疑いのような真理である。

そして、私が疑いを持ったり何かを信じているということが疑いような真理である以上、そうした信念や疑いを持つ《私》が存在することもまた、疑いような真理である。

「……私がこのように、すべては偽である、と考えている間も、そう考えている私は、必然的に何ものかでないければならない。そして、『**私は考える、ゆえに私はある**』(Je pense, donc je suis.)』というこの真理は、懷疑論者のどのような法外な想定によってもゆり動かしえぬほど、堅固で確実なものであることを私は認めた。そこで私は、この真理を、私の求めていた哲学の第一原理として、もはや安心して受け入れることができるかと判断した」（『方法序説』第四部）。

→ **近代主体主義**：すべての知識の最終的な基礎を、各々の主体が持つ自己認識に求める立場。

この考え方は、デカルトでは極端な形にまで徹底される。

→動物機械論

デカルトは、『動物は言葉を語さないこと』及び『感覚に對する動物の反応がステレオタイプ化されていて柔軟性を欠くこと』を理由に、動物には思考作用がないのだと主張する。もちろん植物にも。それゆえ、突き詰めれば、動物にも、またもちろん植物にも、心はないということになる。動物や植物は、単に複雑な機械であるにすぎない。そればかりか、人間もまた、精神を差し引いた身体のみを見れば、機械と違いない、とデカルトは主張する。『方法序説』第5部。

3、物体の本性

デカルトによれば、精神の本質が考える働きにあるのに対して、物体の本質（＝すべての物体が必ず持っている性質＝それを持たないものはもはや物体とは言えないような性質）は、**延長（広がり）**にある。彼にとって、物体とは、**様々な大きさ**と**形**を持ち、**運動したり静止したりする一定の広がり**に外ならない。

なぜこのようなことになるのか。

↓

a. 一次性質と二次性質の区別。

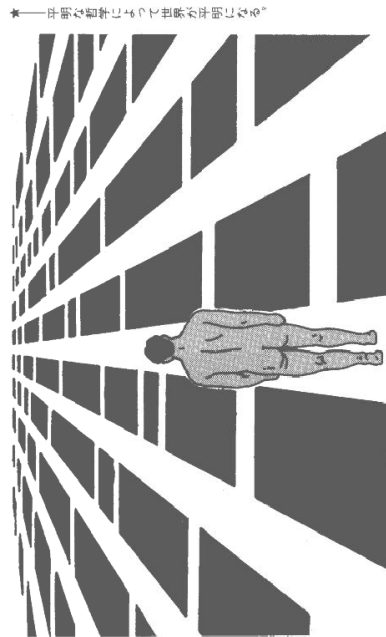
常識的な考えからすれば、我々が目にする様々な物体は、それぞれ個性的な特徴を持つ。微妙な色合い、手触り、匂い、暖かさや冷たさ、重さ、等々。しかし、デカルトによれば、色や暑さ冷たさ、重さや手触りといったものは、物体そのものの性質ではなく、物体が精神の側にもたらす結果にすぎない。われわれが色や熱さや冷たさ等々を感じようようになる原因が物体の側にあることは明らかだが、色そのもの、熱さそのもの、冷たさそのものは、われわれの内にある観念にすぎないのであって、物体自体のもとに色や熱さや冷たさがあると考えるのは間違いだ。そうデカルトは主張する。また、我々は「手が痛い」とか「足が痛い」とかと言って、あたかも身体（物体）の側に痛みがあるかのように考えているが、厳密に言えば、痛みは精神の内にある性質であって、物体が持つ性質ではない。

これらの性質は、「二次性質」と呼ばれる。そして、二次性質を除いた、幾何学的延長（大きさ、形、興行き）だけが、本来の意味での物体の性質（一次性質）である。

「…苦痛や色やその他これらに類するものは、単に感覚つまり思考としてののみ考察される時には、確かに明瞭に、はっきりと知られる。しかし、それらが何か我々の精神の外にある事物であると判断される時には、それらがいったいどのような事物であるかは、まったく理解することができない。だから、もしも誰かが、自分はある物体の内に色を見るとか、手足のどこかに苦痛を感じるとかと言うとするなら、その人は、それが何であるか全く知らないものを自分はそのに見たと言っているのに等しい。そして、これは、自分は何を見、何を感じているのか分らない、と言うのと同じことである。…」(『哲学原理』)

このような物体観からすると、自然とは、どこを取っても均質な、巨大な広がりにはならない。物理的な宇宙の真の姿は、色も味も匂いも感触もない巨大な立体である。

(*) デカルトの考えでは、自然界の物体に対して数学や幾何学を適用することができるのは、物体が単なる延長にすぎないからである。そして、デカルト以後発展した**近代科学（数学的な自然科学）**は、こうしたデカルトの自然観を基礎にしている（C.f. 「自然という書物は数学の言葉で書かれている」（ガリレオ））。



b. 慣性の法則 (law of inertia)

ガリレオ、デカルト、ニュートンといった人々によって確立された近代的な自然科学(物理学)では、物体の振る舞いを説明する時に、その目的や意図を引き合いに出す擬人法的な説明が徹底して排除される。土砂崩れがおきたのは山の神のたたりだとか、雷鳴や稲妻は力ミナリ様が雲の上で暴れることから生じるのだとかといった説明が原始的な迷信として退けられるばかりか、重いものは下の方へ向かおうとする性質があるとか、軽いものは上の方に向かおうとする性質があるとかといった説明もまた、物体に或る内面的な意図を備えるものとして退けられる。**物体には目的を持ちたり何かを意図したりする内面などはない**。少なくとも、そのような内面は物理学の対象にはならない。その点を明確化したものが、近代物理学の基礎とされる「**慣性の法則**」、すなわち、「**すべての物体は、他から力が加わらないかぎり、等速直線運動を続ける**」という原則である。科学史では、デカルトはこの法則を初めて明確に述べた人物としても知られている。

(*) プリント中の挿絵は小坂修平著（ひさうちみちお画）『イラスト西洋哲学史』（JTCC, 1984年）から借用しました。

対に、私が他のものの真理性を疑おうと考
えること自体から、きわめて明証的にきわ
めて確実に、私が存在することが帰結する、
ということ。逆にまた、もしも私がただ考
えることだけをやめたとしたら、たとえそ
れまで私が想像したすべての他のものが真
であったとしても、だからといって私がそ
のあいだ存在していた、と信ずるべき何の
理由もない、ということである。さて、こ
れらのことから私は次のことを知った、す
なわち、私は一つの实体⁴であって、その本
質あるいは本性はただ、考えるということ
以外の何ものでもなく、存在するためにな
んらの場所も要せず、いかなる物質的な
ものにも依存しない、ということ。したがっ
て、この「私」というもの、すなわち、私
をして私たらしめるところの「精神
(l'esprit)」は、物体から全然分かれたれてい
るものであり、さらにまた、精神は物体よ
りも認識しやすいものであり、たとえ物体
が存在しないとしても、精神は、それがあ
るところのものであることをやめないであ
ろう、ということ⁵。
.....

(*) プリント作成にあたり、野田又男氏
の訳文に一部補正を加え、また注を付加し
たことをお断りしておく。

なお、野田訳は中央公論社から出ている
『世界の名著』シリーズのデカルトの巻に
収められている。同シリーズは絶版のよう
だが、デカルトの巻は体裁を変えて同社か

⁴ 「实体」とは、他のものに依存することな
く、それ自体で存在できる事物のこと。
⁵ ここから、精神とは「考えるもの (res
cogitans)」である、という考え方が出てくる。

2006.06.23

デカルト『方法叙説』第四部の冒頭から (野田又男訳)

この国での最初の思索について語るべき
かどうか私にはわからない。というのは、
それはきわめて形而上学的 (抽象的) で、
ふつうの考えからかけ離れているので、だ
れでもが興味を持つとはおそらく言えない
だろうから。けれども私が選んだ土台が十
分しっかりしたものであるかどうか、判断
してもらうために、私はそれについて語る
ことを、ある意味で強いられているのであ
る。さて、前にも言ったように、実生活に
とっては、きわめて不確実とわかっている
意見にでも、従うことが、ときとして必要
であることには、私はずっと以前から気づ
いていた。しかしながら、いまや私はただ
真理の探究のみにとりかかろうと望んでい
るのであるから、まったく反対のことをす
べきである、と考えた。ほんのわずかの疑
いでもかけうるものはすべて、絶対に偽な
るものとして投げ捨て、そうしたうえで、
まったく疑いえない何ものかが、私の信念の
うちに残らぬかどうか、を見ることにすべ
きだと考えた¹。かくて、われわれの感覚が
われわれをときには欺くゆえに、私は、感
覚がわれわれの心に描かせるようなものは
何ものも存在しない、と想定しようとした。
次に、幾何学の最も単純な問題についてさ
え、推理をまちがえて謬誤推理をおかす
人々がいるのだから、私もまた他のだれと
も同じく誤りうる²と判断して、私が以前に
は明らかな論証と考えていたあらゆる推理
を、偽なるものとして投げ捨てた。そして

¹ これがいわゆるデカルトの「方法的懐疑」
である。

最後に、われわれが目覚めているときに抱
くすべての思想がそのまま、われわれが眠
っているときにもまたわれわれに現れうる
のであり、しかもこの場合はそれらの思想
のどれも、真であるとは言われない³、とい
うことを考えて、私は、それまでに私の精
神に入りきったすべてのものは、私の夢
の幻想と同様に、真ならぬものである、と
仮想しようとした。しかしながら、そ
うするとただちに、私は気づいた、私がこ
のように、すべて偽である、と考えている
間も、そう考えている私は、必然的に何も
のかでなければならぬ、と。そして「私は
考える、ゆえに私はある」Je pense, donc je
suis、というこの真理は、懷疑論者のどのよ
うな法外な想定⁴によっても揺り動かされ
ぬほど、堅固な確実なものであることを、
私は認めたから、私はこの真理を、私の求
めていた哲学の第一原理として、もはや安
心して受け入れることができる、と判断し
た。

次いで、私がなんであるかを注意深く吟
味し、次の (二つの) ことを認めた。すな
わち、私は、私が身体をもたず、世界とい
うものも存在せず、私のいる場所というも
のもない、と仮想することはできるが、し
かし、だからといって、私が存在しないと
は仮想することができず、それどころか反

² 夢の中での思考は現実とは一致しない。
³ ここで「法外な想定」と呼ばれているのは、
具体的には、われわれが邪悪な神によって絶
えず欺りを犯すように操られているのではな
いかという想定のことである。詳しくは『省
察』その他の著作を参照。

ヒラリー・パトナム『理性・真理・歴史』

(法政大学出版局、1994年) 7・10頁

水槽の中の脳の事例

……いま、ある人（あなた自身と考えてもよい）が邪悪な科学者による手術を受けたとしよう。その人の脳（あなたの脳）は身体から切除され、脳を生かしておくための培養液の水槽に入れられている。神経の末端は超科学的コンピュータに接続され、そのコンピュータによって、脳の持ち主はすべてがまったく平常通りだという幻想を抱かされる。人々も、いろいろな対象も、大空等も、みなあるように思われる。しかし本当は、その人（あなた）の経験していることはみな、コンピュータから神経末端に伝わる電子工学的インパルスの結果である。そのコンピュータは非常に賢く、その人が手を上げようとすると、コンピュータからのフィードバックによって、その人は手が上げられるのを「見」たり「感じ」たりすることになる。さらに、プログラムを変えただけで、邪悪な科学者は彼の思い通りに、どんな状況や環境をも、犠牲者に「経験」させる（幻覚を生じさせる）ことができる。脳手術の記憶を抹消することもできるから、犠牲者には自分がずっとこういう環境にいたのだと思えるだろう。犠牲者には、自分が墮ってこんなお話を読んでいるようにさえ思えるかもしれない。それは、おもしろいけれどもまったく馬鹿げた想定で、邪悪な科学者がいて、彼は人々の脳を身体から切除し、脳を生かしておくための培養液の水槽に入れる。その想定によれば、神経の末端は超科学的コンピュータに接続

ニケーションが成り立っている。私はあなたが現実存在するかどうかについて間違っていない（ただあなたの身体が現実存在するかどうか、脳以外の「外部世界」が現実存在するかどうかについて間違っているにすぎない）。ある意味では、「全世界」が集団幻覚だったとしても何の問題もない。なぜなら、たとえ問題の機構が、我々が思っているものとは違っていたとしても、私があなたに話しかける時、たしかにあなたのは私の言葉を本当に聞くのだからである（もちろん、我々がたんに会話をしている二人ではなく、情事のさなかの恋人二人だとしたら、お互いが水槽の中の脳でしかないという指摘は愉快なものではないかもしれないが）。

……いま、ここで説かれた物語がすべてまったく真実だとしてみよう。もしも我々がこのように水槽の中の脳であるとしたらば、我々は、自分がそうした脳ののだと言ったり考えたりできるだろうか。

前回(5/8)の出席カードから

人間が「生まれつき」持っている能力が完全に発揮、ということは、目や耳、手足が生まれついて不自由な人はその範囲で発揮している状態が「幸福」に当たるとはでしょうか、それとも、五体満足な形で範囲なのでしょう。個々人で違っているとすればそれまでなのですか・・・

——アリストテレス自身ははっきりした答を示していない微妙な点をついた質問です。この種の問いへの答がどうあるべきかという点は、具体的な事例に即して考えるときなかなか決着をつけにくい難問です。

『ニコマコス倫理学』の「ニコマコス」って何ですか？

——「ニコマコス」というのは、アリストテレスの父の名であり、また長男の名だとされます。書名にこの名前を冠したのがなぜなのかについては定説はありません。息子は早世したとされるので、「息子が筆記した講義録」という解釈は苦しいそうです。おそらく、父親もしくは息子に献呈された倫理学書、という意味であろう、というのが有力な説のようです。

LMSの資料は配った資料とおなじですか？

——おなじです。それから、授業使ったスライドもアップロードしておきました。

私は音楽が好きです。好きだからこそ、別に何が得られるわけでもないけれど、よく歌ったり、CDを聞いたりします。この行為は、アリストテレスに言わせれば、「活動」と呼べるものなのかもしれません。けれど、一度プロをめざそうと考えた時期がありました。そうすると、今まで楽しかったはずの音楽が、辛さを伴うようになってきたのです。「プロになりたい」という目的を達成しようとするあまり、「活動」が「運動」にいつの間にか変わってしまったのかもしれない。「活動」と「運動」は、紙一重のものなんだと思います。快楽を求めるということは、むしろいいことですね。

絵画『アテネの学堂』には何故、ソクラテスが真ん中にいないんですか？

——単純ながら、鋭い質問です。私は、考えたことがありませんでした。ラファエロがソクラテスをどう見ていたのか、機会があったら調べてみます。

日本で信じられている徳というのは、だいたい中国の影響を受けているものが多いと思うのですが、ヨーロッパやアメリカなどでも人間の「徳」として考えられているのは共通しているのでしょうか？ 紀元前時代のギリシアでの世間一般の通念は、日本で言うところのそれと同じでしょうか？

——ギリシア人が奴隷制度を当然視していたことを考えれば、彼らの常識とわれわれの

常識の間には大きな隔たりがあります。しかし、いくつかの点で大きな違いがある一方で、大きな共通性もあるように思われます。一致点と相違点をどう評価するかについては、全面否定でも全面肯定でもなく、ケースバイケースで考えていくほかありません。

哲学ってどんなこと 出席確認用紙

2006/05/23

学部・学生番号

氏 名

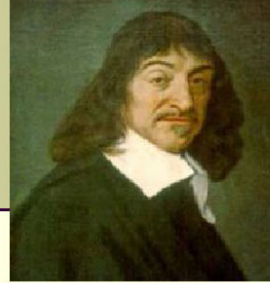
「身体が存在は不確実だが、心の存在は確実だから、身体と心は同一ではありえない」、というデカルトの主張に対して、あなたならどう答えますか？（受け入れるか、否定するか、その他の態度を取るか？）

その他、質問・意見・感想。

第6回: デカルトとコギト

清塚 邦彦(人文学部・人間文化学科)

デカルトという人



フランス・ハルスによるデカルト像

- フランス人の数学者・自然科学者・哲学者
- 生没年: 1596-1650
- 数学を駆使した近代的な自然科学研究の先駆者の一人。
- 「慣性の法則」をはじめて明確に定式化した人物として知られる。また、「デカルト座標」の考案者でもある。
- 主な著作: 『方法叙説』『省察』『哲学原理』

近代哲学の祖

デカルトはよく、近代哲学の始祖として位置づけられる。

→近代という時代が直面している二つの大きな思想的課題に対して、標準的な回答を提示したこと

- ↓
- 近代の自然科学的な世界観を、どう受け止めるか？ (とりわけ、自然界に数学が適用可能なのはなぜか？)
- 自然科学が描き出す世界の中に、人間をどのように位置づけるか？ (とりわけ、自然法則に支配された自然界の中で、人間の自由ということにどのような意味がありうるか？)

「方法的懐疑」

- 「我々は生まれたときは幼児であったゆえに、そして、我々の理性を完全に使用する以前から、感覚的な事物についていろいろの判断を下してきたゆえに、多くの先入観によって真理の認識から遠ざけられている。そこで、そういう先入観から脱するためには、少しでも不確実だと思われるものを、一生に一度は、疑おうと努めるほかにないように思われる」(『哲学原理』)。

↓
「少しでも疑いを挟む余地のある知識はすべて偽であるとみなすべし」という原則

懐疑の手順

- 錯覚
- 計算間違い
- 夢
- 欺く神、あるいは邪悪な霊

↓

「私がかつて真であると思ったもののうちには、それについて疑うことの許されないようなものは何もない」(『省察』第一部)。



Cf. 「水槽の中の脳」(H.Putnam)

- 身体から切断され、培養槽の中で生かし続けられている脳に電極をつなぎ、巧妙な仕方で電気信号を送りつづけるならば、その脳は、自分が五体満足で、ごく普通に健康な生活を営んでいるかのような幻想を抱くことだろう…。

↓

自分がそのような脳でないことを、どうすれば知ることができるのか？

考える私の存在

- 「……私がこのように、すべては偽である、と考えている間も、**そう考えている私は、必然的に何ものかでなければならない**。そして、『**私は考える、ゆえに私はある**』というこの真理は、懷疑論者のどのような法外な想定によってもゆり動かしえぬほど、堅固で確実なものである……」(『方法叙説』第四部)。

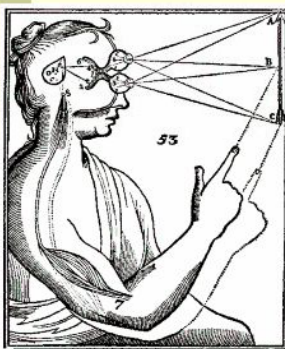
私は身体ではない

- **物体の存在**については、疑いの余地がある。(そして、もちろん、自分自身の身体も、物体の一つである。)
- 他方、**考える私の存在**については、疑いの余地はない。
- それゆえ、考える私と、私の身体とが、同一であるはずはない。

↓

心身の二元論

動物機械論



- 動物は言葉を話さない
 - 環境に対する動物の反応がステレオタイプ化されていて柔軟性を欠く
- ↓
- 動物には思考作用がない**

* 人間だって、精神を差し引いた身体のみだけを見れば、機械と違いがない……。

物体の本性は延長にある

一次性質と二次性質の区別

色や暑さ冷たさ、重さや手触り等は、物体それ自体がもつ性質ではなく、物体が精神の側にもたらした結果にすぎない。それらの結果が、物体そのものの内に存在していると考えるのは、誤解である。色や匂い、寒暖や手触り等の性質は、われわれの内にある観念にすぎない。→**二次性質**。

- 物体についてのイメージから、すべての二次性質を除去すると何が残るか？
→**幾何学的延長**(大きさ、形、奥行き)だけが、本来の意味での物体の性質(**一次性質**)である。

物体の本性(その2)

- **慣性の法則**:「すべての物体は、他から力が加わらないかぎり、おなじ運動状態を続ける(同じ方向に同じ速度で運動を続ける)」

→車は急に止まらない

↓

- 物体には、目的を持ったり何かを意図したりする**内面などはない**。少なくとも、そのような内面は物理学の対象にはならない。

物体とは、**惰性(慣性)的に存在する空間的拡がり**にすぎない。

遠隔授業を担当して

清塚邦彦(人文学部・人間文化学科)

講義内容

■ 教養教育での私の講義メニュー

(1)「生命倫理学の諸問題」

――安楽死・尊厳死、生殖補助医療、等の具体的な諸問題について、ビデオも援用しながら、問題の歴史的な経緯、論議の構図の紹介を行なう

(2)「哲学ってどんなこと」

――毎回一話完結の形で、哲学において伝統的に論議されてきたテーマを取り上げ、初歩的な解説を加え、必要に応じて代表的な学説の紹介を行なう。

遠隔授業をすんなり引き受けたのは、今年度の講義計画が(2)であったため。

1

講義計画

- ソクラテスと無知
- プラトンと正義
- プラトンの相対主義批判
- アリストテレスの快楽
- デカルトとコギト
- 哲学的懐疑論
- 心身問題
- 決定論
- カントの定言命法
- 価値は実在するか？
- 時は流れるか？
- 歴史と物語
- 芸術とは何か？

2

道具立て

■ 当日配布するもの

講義ノート、補足資料、質問回答、出席確認用紙

これらは前日12時までにLMSにアップロードし、かつ、印刷した形で当日配布。

■ スライド

これも、原則的には前日12時までにLMSにアップロード。(ただし、スライドについては講義後にアップロードしたこともある。)

3

明らかな成果

(1) パワーポイントを使うことで、**題材の整理が促され、より計画的な授業になった。**

(2) **画像類の提示が容易になった結果、授業進行がより効率的になり、可能性の幅が広がった。**

- ただし、題材の整理が不十分であることが、かえって露呈したり、画像をうまく活用する余裕がない回もあった。

→すでに熟した授業でないと、遠隔授業には移行しにくい？

4

疑問(1)

以上の成果は、「遠隔授業」の成果だったのか？

- 授業の計画性向上や画像の効果的利用という利点は、どちらも、遠隔授業というより、**プレゼンテーションソフト導入の結果である。**

それ以外の点で、何かメリットはあったか？！

↓

1) LMSのおかげで、講義資料類をファイル形式で配布することが容易になった。

2) LMSに蓄積された自分の授業の動画(音声)ファイルを見ることは、授業改善に大いに有益。

5

疑問(2)学生のためになったか？

とりわけ、小白川の学生にとって、利点はあったのか？

↓

- LMSを通じての連絡や質問回答は、機能しなかった。
双方向性の確保には、出席カードへの記入と、それに対する口頭・プリント等での応答、という従来型の手段が効果的だった。
- また、機械操作に気を取られて、教室でのやりとりが手薄になった印象も残る。

6

著作権問題はクリアできたか？

- 結論から言えば、できなかった。
配布物やスライドの中で使った文献資料、挿絵、写真等に関して、著作権上どのような扱いが適切かをいちいち確認して対応する余裕は、今回はなかった。
- 次の二つの違いが分かったことが、成果といえ成果。
学生への教育効果をもつばらの目標として授業改善をめざすという努力
V.S.
オリジナルな教育コンテンツを作る努力

7

今後の展望(個人的な)

- 今回の経験は、新しい授業形態を試すことで教育技術の向上をはかるFD活動としては、明らかに有意義だった。
- しかし、それはより本格的な遠隔講義に向けての第一歩だったと言えるか？

↓

(最低限) 乗り越えなければならない壁

- ・著作権問題の解決
- ・授業支援システムの位置づけの明確化

8

ラウンドテーブル1：Y U eラーニングの展望

配付資料

小池 隆太（山形県立米沢女子短期大学）

E-learningにおけるWebの利用形態とその課題

E-learningにおけるWebの利用形態とその課題

—CAIからWebへ—

山形県立米沢女子短期大学社会情報学科
小池 隆太

06.6.2 1

本報告の狙い

- 現在までのE-learningの展開：
パッケージ型の授業支援ソフトから、ネットワーク・Web利用型への移行
- その移行に伴って生じて来た諸課題を報告者の体験から提示

06.6.2 2

大学におけるE-learningの利用形態：

- 連絡／コミュニケーション
例) 電子メール・ケータイメール、ホームページ、掲示板、ブログ
- Web・コンピュータによる授業支援
例) CAI, ポータルサイト, CALL
- 授業コンテンツとしての利用
例) ライブ配信／オンデマンド配信
パッケージソフト, 自習サイト

06.6.2 3

連絡・コミュニケーションにおけるWeb利用

- 長所：
 - ◆ ブロードバンドネット、あるいはケータイの広汎な普及により、遠隔地からもアクセス可能
 - ◆ 時間的・距離的制約が解消
 - ◆ 導入コスト・管理コストが比較的安い
 - ◆ 教員の力量に応じた利用が可能
- 短所：
 - ◆ ネットワーク
 - ◆ 個人情報保護
 - ◆ 情報の質と量の調整
 - ◆ 学生ごとの環境の違いを考慮
 - ◆ 学生側に金銭的負担

06.6.2 4

山形県立米沢女子短期大学 小池隆太

E-learningにおけるWebの利用形態とその課題

Web・コンピュータによる授業支援

- 長所：
 - ◆ 授業の効率アップ
 - ◆ 出席・成績管理に利便性
 - ◆ 学生のコンピュータリテラシーの向上
- 短所：
 - ◆ 導入コスト、管理コストの問題
 - ◆ 教員の利用に際して学習が必要
→ 授業メソッドの改善
 - ◆ 学生のコンピュータリテラシーと学習意欲・効果に相関性

05.8.2 5

授業コンテンツとしての利用

- 長所：
 - ◆ 遠隔授業が可能
 - ◆ 学生の自習が可能
 - ◆ コンテンツの再利用が可能
 - ◆ Web利用により導入コスト大幅減
- 短所：
 - ◆ 制作コスト
 - ◆ 権利関係の保護
 - ◆ 対面授業との差別化

06.8.2 6

パッケージ型CAIとWebの比較

旧来のパッケージソフト型CAI ／オンデマンド型コンテンツ	Web利用型のE-learning
■ 長所： ◆ コンテンツの再利用が可能 ◆ 利用者のコンピュータリテラシーが比較的低くても良い ■ 短所： ◆ 導入コスト高 ◆ 対面授業との差別化	■ 長所： ◆ 金銭的成本安 ◆ コミュニケーション力の増大 ■ 短所： ◆ 個人情報・権利関係の保護 ◆ 即応性が必要 ◆ 利用者（特に教員）に比較的高いコンピュータリテラシーを要求 ◆ 新しい授業メソッドの必要性

05.8.2

まとめ

E-learningにおけるWeb利用

- 利用する教員・学生個人の力量が重要
- 授業における教員の「自己責任」「説明責任」がより大きく問われる

↓

コンピュータリテラシーを
利用者（特に教員）に過度に要求しない
環境がこれからの課題では？

06.8.2 8

ラウンドテーブル2:学生参加による授業改善
記録

山形大学教員研修会 第8回教養教育ワークショップ
ラウンドテーブル2：学生参加による授業改善

日 時：平成18年8月2日（水）13：00～15：00

会 場：山形大学教養教育1号館135講義室

コーディネーター：金澤 真理 氏（人文学部）

パネリスト：三原 容子 氏（東北公益文科大学）

小田 友弥 氏（地域教育文化学部）

参加者数：27名

記 録：今野 健一

記 録

〔話題提供1：金澤真理 氏〕

○人文学部での取り組み

1997年～：人文学部において授業改善アンケート実施

→学生参加のシンポジウムを2回実施

昨年度実施のシンポジウム〔授業の分かりやすさとは何か〕

分かりやすい授業を望む学生/教員の側でも戸惑い

アンケートの意義・危険性＝学生の要望を拾える/アンケート項目の制約・誹謗中傷の危険性

《シンポジウムでの議論》

「授業の分かりやすさ」とは？——単にレベルを下げることではない／教えるための最低限の工夫・努力が必要／学生サイドの主体的学びも必要……学生参画型の授業の取り組みの可能性を今後検討したい

〔話題提供2：三原容子 氏〕

○東北公益文科大での取り組み

1) 授業評価アンケート

「樹氷」参加がきっかけで実施／2005年度：8割実施、2006年度：一部を除き全科目で実施（強制力はない）／アンケートの改善の努力（公益大方式の検討中）／教員評価に連動させないという合意

2) 学生参加

学生モニター会議：橋本勝教授の講演で触発

学生の潜在的不満の存在（学生の声を拾い上げるシステムの不在）→公益大で可能な形の検討（学生の意見を聞く会（教育改善意見交換会））の実施へ

1月末実施：各ゼミから1人以上の出席を義務づけ＋α →3年・4年の学生が参加＝率直な意見交換

7月28日に実施：3年・4年が参加／〈学生の意見〉科目設置の要望、「公益学」の定義を教えて欲しい etc. ……学生の積極的な意見交換の存在

〔話題提供3：小田友弥 氏〕

○地域教育文化学部での取り組み

- ・「授業改善懇談会」の実施 → 授業改善アンケートとの関連を意識

H17年度授業評価についての報告

アンケート結果（数値）での総括

自由記載項目における「良かった点・悪かった点」の紹介

パネリストによる意見発表＝「よい授業・よくない授業」の紹介

→「良かった点・悪かった点」と「よい授業・よくない授業」との間に一定の相関関係

＊懇談会実施の意義とは……アンケートとパネリストの意見との間には相関関係はある。しかし、アンケートと懇談会とは異なるのであり、棲み分けをする必要があるのでは。

授業改善アンケートのネック＝個々の授業に関係するもの。授業担当教員以外の力を引き出す契機は弱いのでは？／項目が指定（限定）→項目間の相互の関連性（影響の及ぼしあい）は把握できない／一方的な側面がある→教員へのフィードバックはあるが、学生には教員の対応について伝えられないということ

↓

アンケートの弱点をカバーするために……懇談会の役割の重要性、懇談会の双方向的な性格

〔意見交換〕

○小野寺氏（院生・教育学研）

- ①現在の改善アンケートは学期末1回きり、意義が乏しいのでは → 初回授業の際に学生に意向を聴取してほしい（学生の実態の把握の必要）。
- ②教員＝表現力を磨く必要性がありはしないか。
- ③学生＝自覚をもつ必要性。学生同士の経験の伝達も有益。

○橋本勝氏（岡山大学）

授業評価アンケートの実施の形式 → 学生からも提案／（授業改善の進み方が学生にもわかるように）学期の途中でも実施するのはどうか？（フロアへの質問）

○後藤氏（人文学生）

学期途中のアンケートは有効ではないか。アンケート後の授業改善を見込める。学生も発展的な意見を出しやすくなる。学生へのフィードバックの必要性。学生の意見を反映させるためには、時間をとって「自由記述欄」に書き込んでもらうほうがよい。

○伊藤氏（地域教育文化教員）

アンケート（＋分析）は組織化される以前から実施。近時、「自由記述欄」への記入が減少。学期途中の意向聴取を行うと多くの意見が出される。工学部での取り組みに特色があるのでは。

○阿部宏慈氏（人文教員）

授業改善アンケートの目的と現在受講している科目の改善との関係について考え直すべき。

○伊藤氏

授業改善と教育改善とは異なる点に留意すべき。

○三原氏（東北公益文科大学）

毎回の授業の際、コメントを記載させる試みを実施。期末に授業改善アンケートを行う意味も。終わりにだけ言えることもある。

○白杉氏（芸工大）

学生は教員に話したいのではないかな？

○（学生）

改善の必要性や文句のある授業の場合は、アンケートで記入する。無記名ならば、学期途中でも不満を述べたりできる。

○（学生）

成績評価が気になるので、学期途中では率直なことは書けない。

○橋本氏

岡山大学のアンケートは記名式（自由記述は無記名）。小さな紙切れに記入させるだけなら、そのままになる。岡山では所定の用紙を使用し、学生の声を拾い上げるやり方をとっている。

○阿部氏

現在の授業の差し迫った改善を求める声がある。そうした学生の声を拾い上げる取り組みをする必要がある。現行の授業改善アンケートには限界があるので、ミニツツペーパー的な方式をとるべきではないか。

○金澤氏

学生の不満の多くは、授業の最低限度を保ってほしい、ということ。しかし、当該教員には言えない、という学生の側の状況もある。

○白杉氏

芸術工科大学では、授業改善アンケートは、教員に対する一定の効果（圧力）がある。

○

山大のアンケートの結果が、本当に将来的に生かされているのか疑問。将来的に生かす仕組みを考案する必要があるのでは。教員同士での改善のための取り組みなどはどうか。

（記録は14時半までのもの。氏名・所属等について記入しきれないものがあった）

ラウンドテーブル2：学生参加型による授業改善

配付資料

小田 友弥（地域教育文化学部）

授業改善懇談会を振り返って

山形大学地域教育文化学部

小田 友弥(総務委員)

I 実施の概要

1. 趣 旨

「本懇談会は、学生(学部生・院生・別科学生)と教員とが、授業の改善について、忌憚のない意見を直に交換することによって、教員の教育内容や方法の向上を図るものである。」

2. 内容

1) 前年度の「授業改善アンケート」の総括。(授業改善アンケートから問題点の提示)

2) 懇談会：学生(5～6名)と教員(同数)

3. 日 時 平成18年7月11日(火) 16:30～18:00

4. 会 場 地域教育文化学部 会議室

5. テーマ 「よい授業を求めて」

6. プログラム ・学部長挨拶

・平成17年度授業評価についての報告

・パネリストによる意見発表

・フリーディスカッション

・閉会の挨拶(総務委員会委員長)

7. パネリスト

学生・院生(6名)、教員(5名、そのうち1名は司会)

II 発表された意見等の要旨

A. 平成17年度授業評価についての報告

昨年度の「授業改善アンケート調査報告書」の概要説明。その「II アンケート結果の概要」は、1.学部学生からの声、2.大学院生からの声、3.別科学生からの声、4.教員へのフィードバックから、の四つの視点からまとめられていた。1から3では、学生・院生が授業を概ね肯定的に捉えていることを、「授業改善アンケート」の数値で裏付けてから、自由記載項目から「良かった点」、「良くなかった点」の紹介に移った。以下ではそうした例の幾つかをあげる。

【良かった点】

a. わかりやすい、丁寧、やる気がでる授業。

b. 指導案の指導や教員採用試験への対策をしてもらった。

c. 満足のいく授業の仕方(工夫)。(教育機器の活用、学生参加型・発表型の授業、課題が

学力向上に結びつく、etc.)

- d. 教員の人柄や熱意に好感がもてた。
- e. 実践的な内容でためになった。
- f. 学生への配慮が十分なされていた。

【良くなかった点】

- a. 板書がわるい。(多すぎる、見にくい、etc.)
- b. 学生の私語など教育環境を乱す事柄への、教員の注意が足りない。
- c. 授業の開始・終了時間が守られない。休講が多い。
- d. 授業がわかりにくい。(説明がわかりにくい、難しい、etc.)
- e. 教員の態度・姿勢に問題がある。(受講者への配慮が足りない、差別的、etc.)
- f. 提示用ソフト・機器の使い方に問題がある。
- g. 受講者の既知項目の把握が不足していたり一方的なために難しすぎる。
- h. 負担が多い(授業・課題・宿題)。
- i. テーマ、計画性に欠ける。
- j. 教育現場に即した内容を盛り込んで欲しい。
- k. 不満足な授業内容。

4. 教員へのフィードバックから、では、教員アンケートへの回答が低率なのが、ゆゆしい問題として指摘された。次に受講者へのアンケート結果に対する教員からのコメントや、アンケートに対応しての工夫の例が紹介された。そこからは「学生との対話の重視」や「板書の工夫」など、アンケート結果に示された受講者の声に前向きに対応する姿勢が窺えた。

B. パネリストによる意見発表

1. 学生・院生パネリストの発表

各パネリストはアンケートを実施したり、周囲から意見を聴取したりして発表に臨んでいた。また授業における学生側のマイナス面にも触れたり、この懇談会が簡単に単位が取得できるものがよい、といった安易な授業観を反省する契機になった、という発言もあり、真摯で率直な態度は好感を与えるものであった。ここでは各パネリストの発表から、よい授業とよくない授業についての発言を紹介するが、内容的に重複する部分があることをお断りしておく。

【よい授業】

- a. 学生が能動的に参加できる。自分の意見が述べられ、教員がよく聞いてくれる。ディスカッションできる。
- b. コミュニケーションがあり、教員と学生の人間関係、信頼関係が築ける。
- c. 受講者に考えたり書いたりする時間をある程度保証している。
- d. 現場や教員採用に役立つことを教えてくれる。実践的。
- e. 根本的原理に接することができる。

- f. 専門領域に触れさせてくれ、その領域の可能性を教えてくれる。扱っている分野に興味を喚起する。
- g. 研究領域の最新のコンテンツを提供し、受講者の興味、自発性を喚起する。
- h. 思考力を養う。
- i. グループ討議で様々に意見を交換できる。

【よくない授業】

- a. 教員が自分だけの世界に閉じこもっている。学生の興味をひくなどの工夫が足りない。
- b. 授業の進め方が一方的。コミュニケーション不足。教員—学生の距離が遠い。
- c. 授業内容の意義付けがはっきりしない。(実用性など示して欲しい。)
- d. 授業で扱わないことを試験で問う。課題とは別のことを問う。
- e. 授業で愚痴を言ったり、学生を批判する。自慢話に終始する。
- f. 教員がプロジェクターなどの機器の扱いに習熟していない。
- g. 教員が学生を注意しない。
- h. シラバスが授業内容と合致していない。
- i. 学生が参加する部分が小さい。教員の講義を聞くことに終始する。
- j. 高校にくらべて大学の授業は扱う範囲が狭い。
- k. 学生の受講態度に問題がある。(授業を一緒に作り上げようとしない。騒がしい。出席するだけ。)

2. 教員パネリストの発表

教員サイドからは、「よい授業」を求めての日頃の実践例や、「よい授業」とはどのようなものかに関して、以下のような発言があった。

- a. 知識、経験が不足したまま不安を抱えた学生も受講してくるが、まず学生が楽しむべきだという姿勢で指導する。そして、教員がイニシアティブをとるのではなく、受講者の参加を促す。(実践例として斬新な発想が発揮された授業、優秀なレポートのホームページでの公開、指導要領の学生個々の解釈の奨励、など。)
- b. 常に教育現場を意識して授業に望むように指導。(例として、遅刻、ガム、ペットボトル、サンダル音への注意や、授業前後での起立しての挨拶、など。)
- c. 卒業時に知っておくべきことに基づき授業プランを設計し、授業内容を組み立てる。
- d. 授業方法としては、学生参加型を意識し、調査と発表を取り入れ、プレゼンテーション能力向上を促す。(ただ、本学部のプレゼンテーション環境は十分でない。)
- e. 評価にあたっては、実験・実習の場合は、結果の解釈までを含める。テストは知識の定着、レポートは探求心を促すことをこころがけて実施する。
- f. 授業をする側にとって大切なのは、ユーザーフレンドリーの姿勢をもつこと。授業を受けるのに必要な知識を受講者がもっていない場合などに、この姿勢の有無が試される。(鶴岡の中学校の実践例のように、「飛べる飛び箱」を準備する姿勢が必要。)

III 授業改善懇談会と授業改善アンケート

授業改善アンケートは、学生参加型の授業改善方法として数年前から実施されていた。そうしたなかで授業改善懇談会を新たに開催するにあたっては、両者の果たす役割について検討する必要があるがあった。プログラムが示すように、地域教育文化学部の授業改善懇談会に授業改善アンケートも関わっているが、両者を関連付けるには、二つの方法があるように思われる。一つは、授業改善アンケートをベースにして問題点を提示し、それについて懇談会参加者が意見交換をするものである。他は、懇談会が独自にテーマを設定し、「アンケート」からはそれに関係する情報提供を求めるもので、私は後者が望ましいと考える。その理由は、授業改善アンケートが主として関わるのが、個々の授業の性格だからである。授業改善懇談会にはさらに進んで、学部の授業全般に関わるような、より大きなテーマを論ずる機能を与えるべきではなかろうか。

授業改善アンケートとの役割分担を考えるにあたり、懇談会の持つもう一つの大きな特徴は、双方向的な性格であろう。従来学生には、授業改善アンケートに記入したことが、果たして教員にフィードバックされているのか疑問があった。今回の教員の発表は、そうした学生の疑問を払拭するのに貢献するものであった。また、学生・院生間での質疑、意見交換がなされたが、それらは学年があがるにつれ授業に対する姿勢が変化することを示し興味深かった。

この他にも授業改善懇談会と授業改善アンケートの違いはかなりあると思われる。そうした差異を的確に認識して、両者が相互補完的になるように学生参加型の授業改善に組み込んでいく必要があるであろう。

ラウンドテーブル3: 高大連携の推進
記録

山形大学教員研修会 第8回教養教育ワークショップ
ラウンドテーブル3：高大連携の推進

日 時：平成18年8月2日（水）13：00～15：00

会 場：山形大学教養教育1号館136講義室

コーディネーター：栗山 恭直 氏（理学部）

パネリスト：山崎 昭 氏（県立上山明新館高校）

鵜浦 啓 氏（理学部）

水戸部和久 氏（工学部）

黒沼 毅 氏（学務部教育企画ユニット）

参加者数： 13 名（コーディネーター、パネリストを除く）

記 録：長谷見 晶子

記 録（敬称略）

発表1 栗山（13：00－13：08）

・配布資料に沿った説明

ラウンドテーブル3の内容 パネリスト及び話される話題の紹介

発表2 鵜浦（13：10－13：44）

・配布資料に沿った説明

SPPについて

理学部物質生命化学科の例についての紹介

連携先（南高校）を捜す（最初は高校側が報告書などのことを考えて消極的だった）、応募に至るまで、申請内容、予算申請、実施内容、報告書の具体的内容の紹介。

4年間の内容の紹介（高校がカリキュラムを変更するような対応があった）

人的なネットワークが作れることが大きなメリット。

高校側のカリキュラムが関係する申請では申請が採択されなくても対応する必要がある

採択例 多い地域がある。東北地方は少ない。

大学が申請するもの：材料関係が多い。純粋理学は少ない。

汎用備品の予算申請をすると物品購入目的とみなされることもある。

質問 人的交流で大学にどのような影響があるか

答え 大学での教育内容について高校の先生からフィードバックがある（？）

新しいことができるようになる（教材の共同作成など）。若い世代の教育に高校・大学で共同して当たれる。

質問 教育内容は指導要領の範囲を深めるものを考えるのか

答え SPPの趣旨が高校生に最先端の技術に触れてもらうもの。

内容が高校の授業範囲にあれば指導要領にのっとってすることもある。

質問 採択されなかったとき、実際にどのように対応したか

答え 学部長（学長？）に支援を依頼した。学科（？）の持ち出しで対応。

発表3 水戸部（13：45－14：10）

・配布資料に沿って説明

工学部の高大連携の例

出前授業 予算はだいたい高校が負担（高校で予算措置がされている）

90分授業では高校生が寝てしまう。

工業高校は高校、生徒とも熱心。

年間5回くらい対応。

小国高校研修例

生徒と一緒に先生も研修を受けた

レポート提出で高校が単位認定

生徒は複数のイベントで研究発表

大学進学により小国高校の志願者減少を食い止めるという目的があり、町がサポートしている。

高校の物理研究会

高校側 入試の物理科目について情報を必要としている

大学側 高校の状況を知る必要がある。

高校の先生は新しい実験方法をいくつも工夫して作っている。

新カリキュラムの教科書のわかりやすさ、新カリキュラムの理念など。

工学部機械システム工学科の問題について

エンジニアの需要があるが、人材確保が容易でない。

高校との連携で物理の素養がある人材を育てるという意義がある。

質問 出前授業の予算について、出所など

答え 出所は高校によっていろいろ、金額も1桁くらいの差がある。

質問 出前講義の経費の空欄は？

答え 事務方に伝わっていないものは空欄

質問 出前講義実験のときの保険はどうしているか。

答え 事故の危険があるものは持ち込まない（持ち込めない）。ビデオで見せる。

出前授業の申し込みの用紙に（？）保険必要かどうかの欄がある。

質問 産業界からのニーズがあるのに、なぜ物理離れが起きているのか。

答え 物理の授業が面白くないかも。エンジニアの仕事の実態がきついことが高校生にも伝わっているのかも知れない。

コメント 高校より小学校などもっと早い段階での対策が必要だろう。

質問 大学の教員の負担はどうか。

答え 大変。実験の準備などは高校の先生のほうが技が優れているのではないかな。

発表4 山崎（14：10－14：38）

（個人的見解と断った上で発表）

・配布資料に沿って説明

(1) 現状

機会に恵まれすぎ？ 大学、短大ほかから莫大な量の資料が来る。大学の説明会が頻繁。

(時代に逆行するけれど) 説明会参加のチャンスを減らしたほうがよい。

高校生には大学の活力を見せるべき。大々的なオープンキャンパスなどがよい。

個々に夏休みに静かなときを見せるより、活気がある大学を見せるほうがよい。

高校の部活をどうどうと休めるくらい大々的なオープンキャンパス行事を高校の先生は希望している。大学間で重複しても1, 2, 3年で回れる。

(2) 連携の下地

学生のインターンシップまたは学校ボランティアにより高校・大学の連携の下地を作ることを提案する。高大連携を負担に感じる高校もあるが、この形なら実現しやすい。

メリット 大学は：大学のPRができる

生徒は：将来像がみえる

学生は：社会性が養われる

高校は：業務が軽減される

高校—大学の人的つながりができる。

学生の就職時にメリットがあるかもしれない

(3) 今後の高大連携

人的交流により・・・間を埋める教科書の作成、実験メニュー開発など

質問 人的交流は教材開発のほかには高校にとってどういうメリットがあるか

答え 相談できる。特に小さい高校では同じ教科の教員がいないので有難い。

質問 高校ボランティアについて、具体的にどういう問題点があるか。

答え 実際のところは？考えたことはレジメに書いた

質問 個人的つながりで高校ボランティア派遣は可能ではないか

答え 学生に個人的に考えを聞いてみたことはある。

質問 大量の資料は見られていないのか

答え 山形の資料は優先的に紹介するが、生徒が見たいタイミングと合わないこともある。

発表5 黒沼(14:38-15:00)

・配布資料に沿って説明

山大の例

縦割りで対応 高等教育企画、社会連携課、・・・

出前講義に行っている高校からの志願者が増えている

質問 出張講義によって志願者が増える理由は？

答え 志願者を確保するという目的を兼ねて講義してもいいのではないかと(答え？)

質問 高校との提携は実際に考えているのか

答え まだ準備段階にない

質問 山形短期大は城北高校と連携をしていて多数が入ってくる。が、高校の教育と大学の教育のギャップを埋めるような連携は不十分である。山大の出前授業は地域貢献が主でほんとの連携が不十分で大学の意欲が空回りしていないか。

- コメント（鶴浦） 連携の主要なところは教育の連携。いまは高校側、大学側それぞれの事情が違い一方通行になっている。
- コメント（栗山） 連携のためには信頼関係が必要。出前授業は信頼関係を築く手始め。

ラウンドテーブル3：高大連携の推進
栗山 恭直（理学部）

配付資料

第8回 教養教育ワークショップ
ラウンドテーブル
高大連携の推進

理学部 栗山恭直

高大連携の推進

- ・ 教養教育における高大連携？
- ・ 高大連携の推進……高大連携をもっと進めていこう？

高大連携とは何か？

高校と大学の連携活動
高校への出前講義
大学への研究室訪問
教員研修
単位互換

・ 1 高大連携の現状と背景

高大連携とは、

狭義 「大学における学修を高校の単位として認定する制度」 **教養教育科目の高校への開放**

広義 「高校と大学の連携のもとに行なわれる教育活動」

高大連携の現状と背景

原 知章(静岡大学人文学部)

2004年度 静岡大学人文学部社会科学教育連携プロジェクト報告書より

・ 文部科学省では

高大連携を高校における「学校外の学修の単位認定」のひとつの形態

大学における科目等履修生、聴講生、研究生としての学修や、大学が開設する公開講座における学修

広義の「高大連携」は、オープンキャンパス・出張授業・高校と大学の相互理解を図るための連絡協議会の設置・高校における教科指導等の充実のための研究会・研修会の開催、大学生を対象とした基礎学力向上のための補習授業等の実施、

- ・ 中教審答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」は

- ① 大学レベルの教育を生徒が履修する機会を積極的に拡大
- ② 生徒の能力・適性・意欲・関心等に応じた進路指導や学習指導を充実
- ③ 大学入学者受入方針(アドミッション・ポリシー)をはじめ、教育の理念と目標、教育指導体制、成績評価の方法、就職・進学状況などについて積極的に情報の公開

- ④ 大学教育への円滑な導入を図る工夫する

- ⑤ 都道府県単位で高等学校関係者と高等教育関係者が一堂に会し、情報交換し理解を深める「連携協議会」等の開催の推進

- ⑥ 大学教員が高校において学問の紹介や講義、高校教員が大学での補習授業に協力

- 高大連携の意義と課題

第1の意義は、高大連携によって、高校の教育活動を補完し、多様に展開できるという点

- 高大連携プログラムを導入

高校では、従来の教科学習をふまえて、より発展的・専門的な学習

高校教員では対応できない分野や大学レベルの高度な学習に対するニーズに応えることが可能

第2の意義: 高大連携によって、生徒の学習に対する意欲や目的意識を高め、生徒の適切な進路選択を支援することができる点

高大連携プログラムは、生徒が、個々の学問分野の教育・研究の実際に触れ、大学における学習や大学生活の雰囲気を体験することを通じて、学習・進路に対するモチベーションを高め、自らの生き方や在り方について改めて考える機会になりうる。また、大学側との意見交換を通じて高校における進路指導や学習指導の充実を図ることも可能であると思われる。

大学にとっての高大連携

高大連携事業は社会貢献・地域貢献・教育・就職支援・受験層開拓、それらを包摂した広報効果など、多種多様な機能

高校教育の現場を知り、高校教育の現状に対する理解を深めることを通じて、大学の教育環境・教育体制を見直し、一層の充実を図ることが可能

関西大学の品川哲彦氏、

- 第1の課題

多くの生徒が参加でき、かつ、生徒が個々の学問分野の特質に対する十分な理解を得られるような高大連携のプログラムが少ない

- 第2の課題

高校と大学の間で高大連携の目的や位置づけに関する認識に齟齬が生じてしまいがち

高大連携を進めるにあたっては、高校と大学が、事前と事後に十分な協議や検証を重ねて相互理解を深め、高大連携の目的や位置づけに関する認識を共有することが重要である。

- 第3の課題は、高大連携プログラムに関与する教員が、しばしば特定の教員に偏りがち
- その意義についての認識を教員のあいだで涵養し、共有する
- 特定の教員だけではなく、多くの教員が高大連携に関与する体制を整え、教員の負担の軽減策や事務上の支援体制の拡充、予算措置等について検討を進める必要。

- 第4の課題は、従来の高大連携が、大学側が高校側に対して教育研究資源を提供するといういわば一方向的な連携

- 「新しい高大連携」:

高校と大学の教員が共同で、生徒・学生の育成を連続的な視点から捉えた教育改善を議論し、お互いの教育活動に参画する取り組み
一方向的／単発的な「従来型の高大連携」にとどまらず、より双方向的／持続的な「新しい高大連携」へと展開

[illegible]

- 今回の実績調査の項目
予算について
学内 学部の資金・学部長裁量・学長裁量
学外 高校側・外部資金(文部科学省等)
企画したのは
学内 教員・事務官
学外 教育委員会・高校

パネリスト紹介

- ・ 理学部 鶴浦啓助教授
県立山形南高校理数科とのSPPの実施
サイエンスサマースクール等の開催
- ・ 工学部 水戸和久部教授
県立小国高校と工学部の協定
- ・ 県立上山明新館高校 山崎昭教諭
高校側が望む高大連携とは
- ・ 学務部教育企画ユニット 黒沼毅課長
山形大学の高大連携の現状と将来

ラウンドテーブル3：高大連携の推進
鵜浦 啓（理学部）

配付資料

サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト(SPP)による高大連携
—山形大学理学部の取り組み—

山形大学理学部 物質生命化学科
鵜浦 啓

Contents

- SPPとは？
- どうしてSPPか？
- SPPの実際。
- SPPによる高大連携のすすめ。

サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト (SPP)とは？

■ SPPは、**学校、教育委員会等管理機関と、大学・科学館等との連携**により、児童生徒の**科学技術、理科・数学(算数)**に対する興味・関心と知的探究心等を育成するものです。(科学技術振興機構 JST)

〓02(H14)～〓05(H17)年度 文部科学省が募集
〓06(H18)年度から JST が募集

連携プログラム

- 大学、大学院
- 科学館・科学系博物館
- 公的研究機関 等

- 全国の中・高等学校
- 都道府県教育委員会 等

● 第一線の研究者・技術者を講師とする講座型の学習活動
● 最先端の研究現場での合宿型の学習活動
● 科学技術、理科・数学(算数)に関する教員研修

● 生徒に学習内容と現実に科学技術として活用されている事象のつながりを実感させる
● 生徒が研究者・技術者の姿に触れ、科学技術に触れる者に触れあう機会を充実する
● 研究者、TA等との交流を通じて生徒の職業観、進路意識の形成
● 教員の実験等の指導技術・科学技術リテラシーを向上する 等を図る

SPPのタイプ

実験・実習を主体とする学習・研修

- 講座型学習活動・教員研修 (旧SPP)
- 合宿型学習活動

デジタル教材と**実験・実習**との融合

- IT融合型学習活動・教員研修

旧SPP(文部科学省募集)

■ **最先端の研究成果や研究施設・実験装置等を有する大学、公的研究機関、民間企業、科学系博物館、学会等と、中学校や高等学校等の学校現場との連携**により、児童生徒の**科学技術・理科、数学**に関する興味・関心と知的探究心等を一層高める機会を充実することを目指す調査研究です。(文部科学省)

どうしてSPPか？

SPP の特徴

- 高大連携を国レベルで支援
- 競争的資金



冒険的な講座にチャレンジできる
強い人的連携が構築できる

- 採択率が高く、実現性が高い
- 報告会が開催され、情報交換が出来る

SPPの実際-山形大学理学部の取り組み

- 山形県立南高等学校の理数科との教育連携講座
-化学反応はエネルギー-

[illegible]

教育連携施設実施のための必要な経費内訳(総括表)			
区 分	金額		備 考
①慰労金	61,650		
②講師謝金	0		
③消耗品費	2,671,100		
④通信運搬費	0		
⑤印刷費	2,965,000		
⑥会費等	0		
⑦生協、食費材料	0		
⑧生徒の搬送料	20,000		
⑨その他	0		
合 計	6,242,750		
教育連携施設実施のための必要となる消耗品、測定、講師報酬等(詳細)			
事 項	単 価	数量	金額
①慰労金			
ディナー・アシスタント(講師1名x6人x1回)	4,110	15	61,650
②講師謝金			
③消耗品費			
イオンレchner内使用電線(約250巻x5巻)	2,500	5	12,500
電圧の基本測定器使用するに必要 電圧測定用電線(1巻x10)	1,500	5	4,500
電圧測定用電線(2.5巻x10巻x10巻)	1,200	5	6,000
電圧測定用電線(通電用電線)	1,900	5	9,500
モニター、電圧計、電圧表	2,000	20	40,000
上記4巻x5巻x10巻の電圧計(検定済x10巻)			
電力変換ユニット	10,000	10	100,000

9

第1回日：9月3日【木】：担当講師 尾崎 啓
 基幹内容：製造とエネルギーに関する解説

[illegible]

1

第2回目：9月8日【月】：担当講師 黒山恭直
実験内容：化学反応と光の関係に関する実験

最初、前田に罪した罪悪の因を回復した。33名の因が回復された。その際、ケミカルライトを使った演示実験などによって化学反応で発生するエネルギーの原理を、解説した。次に、この因でいうエネルギーが本館蔵の複製の原形として、複製品に蓄まり、複製を可能にする人間と複製を行った。仕組みは、水で満たしたの容器を使った化学反応で発生するエネルギーを、電圧計とエネルギーメーターを使って、電を測るのに電圧が増加することを確認した。化学反応によって発生エネルギーを電気エネルギーに変換することを確認した。次に、発生エネルギーを増加するエネルギーに換算して実験を行った。

原稿終了後、原稿と原稿は、生徒が提出した原稿の回数を検討し、そのなかから、次回に行う生徒発表の選定を選択する作業を
行った。また、その結果、生徒が提出した原稿の回数を検討し、そのなかから、次回に行う生徒発表の選定を選択する作業を
行った。

推薦幹委員、推薦者と教員は、生徒が提出した願書の回数を検討し、そのなかから、次回に行う生徒推薦の人数を選択する作業をおこなった。その結果、化学カイトの受験とそれを基にした電気の作業受験を行うこととした。



1

第2回目：9月8日【月】：担当講師 黒山崇広

実験内容：化学カイトに関する実験および身の回りのものを使用した電池の作製

第1回目の講義終了後にあえた懇話の回等とまとめたものを発表した。実験室に帰って生徒指導の実験である。鉄粉、亜鉛、食塩水を使った化学カイトの実験を行った。各装置の電圧と電流を測定させたところ9.9Vにまで上昇した値もあった。次に、化学カイトと同じ材料を用いた電池を作製し、熱エネルギーだけでなく電気エネルギーを得ることが出来ることを確認させた。さらに、身の回りのものを使った電池を作製する実験を行った。まず、ビタミンC飲料とうがい薬（白うがい入り）とを反応させるとうがい薬の色がなくなることが実験室内で確認し、これらを材料とした電池を作製した。この実験は本講義を通じていく際に実際に学習されたものである。



第3回目の講義の終了後に懇話会に際するアンケートを行った。とても面白かったという回答が多く寄せられ、まあまあ面白かったという回答を入れると全員が面白かったという回答を寄せた。さらに、今後身の回りの化学反応に興味を持ち、自分でも調べて行こうという気になった生徒が多かったことは、本講義の大きな成果の一つである。

12

その後の進展

- 2年目：1年生⇒化学反応はエネルギー
2年生⇒有機化学で分析する
- 3年目：1年生⇒物の性質を原子・分子から理解する
2年生⇒有機化学で分析する
- 4年目：1年生⇒物の性質を原子・分子から理解する
2年生⇒化学反応はエネルギー

13

SPPによる高大連携のすすめ

■ 新しい連携の模索

高校と大学が連携して若い世代を育てるための人的ネットワークの構築
ネットワーク作りに効果的な教員研修
複数高校同時参加型講座

14

SPPの募集について

- 1次募集＝2月頃：2次募集＝5月頃
カリキュラムが関係する連携は、採択されなくても実施する必要あり
- 連携機関の間での調整が必要
人的交流には大変役立つ

15

「サイエンスパートナーシッププロジェクト」に係る
「講義型学習活動」、「教員研修」(平成18年度1次募集)の募集結果

	実施機関	応募件数	採択件数
講座型 学習活動	初A 学校	35	28
	学校	273	216
	A 教育委員会等管理機関	22	9
	大学・科学館等	49	28
	B 教育委員会等管理機関	23	16
	大学・科学館等	49	32
	C	6	2
	学校	3	0
教員研修	教育委員会等管理機関	67	59
	大学・科学館等	48	40
	計	575	430

ラウンドテーブル3：高大連携の推進
水戸部 和久（工学部）

配付資料

平成18年8月2日

山形大学工学部における高大連携に関する報告

工学部機械システム工学科
水戸部和久

1. 工学部で行われている高大連携の例

- (ア) 高等学校での出前講義（別紙資料）
- (イ) SSH（スーパーサイエンスハイスクール）への協力
- (ウ) 小国高校との協定に基づく研修生受け入れ
- (エ) 山形県内高等学校の物理科研究集会へのオブザーバー参加
- (オ) SPP（サイエンスパートナーシッププロジェクト）での連携

2. 出前講義の概要と感触

- ① 高校では大学教員による模擬授業が予算化されている。進学意欲を高めることを目的とする高校、科学教室として利用する高校、予算消化のために事務的に行っている場合もある。
- ② 大学と同じ90分授業を求められる場合がある。黒板をつかつての講義では無理があり、高校生が興味を持って聞いてくれる出し物を準備しなければ失敗に終わる。
- ③ 普通高校の生徒は概して無反応である。日頃から芸を磨いておく必要がある。講義の後で個人的に詳細な質問をしてくる場合がある。工業高校の生徒は反応が良い。

3. 小国高校との協定に基づく研修受け入れ状況

平成17年度（受入生徒数3名）8月1日（月）～5日（金）

	研究を希望する学科	研究内容
生徒1	機械システム工学科	システム設計に関わる分野
生徒2	情報科学科	プログラミングに関わる分野
生徒3	機械システム工学科	機械工に関わる分野

- レポート提出（電子メールによる、質問受け答え、アドバイス）
- 単位認定
- 小国町での移動オープンキャンパス（9月17日）にて、体験入学報告会（生徒による成果発表）を行った。（別紙資料）

平成18年度（受入れ生徒数4名）7月31日（月）～8月4日（金）

	体験希望学科	分野
生徒1（3年数理科学コース）	機械システム工学科	ロボット工学など
生徒2（3年数理科学コース）	情報科学科	コンピュータネットワークなど
生徒3（2年国際文理コース）	機械システム工学科	自動車工学の基礎など
生徒4（2年国際文理コース）	応用生命システム工学科	生命工学の基礎など

留意点：

- ① 高校生は明確な課題をもって来るわけではなく、受身的に何かを期待してくる。
- ② こちらでメニューを準備しておく必要がある。1週間の期間で何かを達成できる課題が必要である。高校生は具体的に指示されなければ何をして良いか分からず困ってしまう。
- ③ 完全に付きっきりには出来ないので、ある程度は自分で進められるメニューである必要がある。高校生受けの良い課題や出し物を準備する必要がある。
- ④ 学生実験の中で高校生に興味を持ってもらえるメニューを、面白く焼きなおしたテーマなどが良いのでは？例えば、材料の強度試験・組織観察、ロボットマニピュレータのプログラミング、マイコンロボットの製作。

4. 高等学校の物理科研究会へのオブザーバー参加

研究会の内容

- ・ 生徒の興味を引き出す物理実験の開発
- ・ 新カリキュラムへの対応、情報交換

大学側が知るべき点

- ① 高等学校の物理の先生方は、生徒の興味を引き出すための物理実験を多数開発・調査し、豊富なメニューを持っている。

例：偏光板を使った手品、浮力を応用したおもちゃ、運動量保存を利用したびっくり実験

- ② 新カリキュラムの教科書はカラフルで興味を引き出す工夫が盛り込まれている。
- ③ 高等学校の物理では受験対応のために、旧カリキュラムに近い達成度を目指している。

問題点

- ① 新カリキュラムでは、公式暗記やパターン認識による入試問題解答方法ではなく、論理的な思考能力や本質的な物理の理解を目指す内容となっているものと思われる。しかし、授業内容が削減され、高校側の判断により学習項目が選択できるようになったため、受験対応との矛盾をかかえることになった。
- ② 受験への対応を考えると、結局旧カリキュラムと同様に詰め込み教育に戻らざるを得ない面がある。中学校での教育内容は削減されたままであり、高校の教育内容が逆に増加する可能性もある。
- ③ 大学入試が新カリキュラムの理念を阻害している面がある。ここに高大連携の必要性がある。

5. 工学部機械システム工学科における問題意識

- ・ 機械系エンジニア（物理/数学的知識を応用した製品設計/開発に携わる技術者）の産業界よりのニーズは高く、今後の日本の経済基盤を維持してゆくために必要と考えている。その意味で現在進んでいる高校生の物理ばなれは深刻な問題ととらえている。
- ・ 同時に18歳人口の減少による入試倍率の低下によっても、エンジニアを志す志願者は減少を続けている。（大学の存続にとっても深刻な問題である。）
- ・ 機械工学は力学を中心とする物理を応用する工学分野であるが、高校で物理を中心に学ばない層にも門戸を広げ、入学後の十分なケアにより機械系のエンジニアに育て上げることが社会の要請に合致し、大学の対社会的な存在意義にもなる。このような目的達成のために高校や教養教育と共通の認識を持ち連携することを望んでいる。

平成17年度出前講義・講演実績一覧

No.	日 時	高等学校等名	目的・対象	参加人数 (18歳以上調査)	人数算出処理	タイトル	依頼のあった分野(学科)	講師	経費(旅費)
1	4月28日(木) 8:30～11:00	仙台市立仙台高等学校(宮城県)	第2学年「一日大学授業」	20		ナノテクノロジーへの招待	環境高分子	佐野 正人	高校等から支給
2	5月20日(金) 14:30～15:50	県立米沢興隆高等学校(山形県)	ジュニアカレッジ 理数科1～3年生 113人	113		歩行ロボットの制御及び高校生に期待すること	機械システム	水戸部 和久	
3	5月21日(土) 13:00～15:00	山形大学エリアキャンパスもがみ開設記念事業	「やってきた大学祭！」(新庄市民プラザ)		大人対象とされる	模擬講義「ロボット技術を山形から」	機械システム	水戸部 和久	8,660 学長裁量経費から
4	5月31日(火) 13:50～15:20	県立米沢高等学校(山形県)	ジュニアカレッジ 普通科2年生理数希望者 20人	20		化学の不思議とその応用	物質化学	大場 好弘	
				20		ロボットについて	機械システム	水戸部 和久	
5	6月2日(木) 13:10～15:05	県立日立北高等学校(茨城県)	「大学模擬授業」 全校生徒(1講座あたり20～45名)	45		工學から身の不思議にせまる	応用生命システム	北嶋 龍雄	20,640 高校訪問経費から
6	6月22日(水) 8:00～9:50	私立米沢中央高等学校(山形県)	ジュニアカレッジ 普通科 人間環境クラス 2年生(33人)	33		環境問題全般及び最新の環境問題について	物質化学	高橋 幸司	
7	6月22日(水) 13:20～14:50	県立福島高等学校(福島県)	「一日大学」2・3年生 20人～40人	40		涙はどのように伝わるのか	機械システム	渡辺 一実	高校等から支給
8	7月1日(金) 14:10～15:40	古川高等学校(宮城県)	第2学年出張講義 237名	237		原料物質が自らの力で製品になる技術	環境高分子	折原 謙男	高校等から支給
9	7月6日(木) 11:00～14:50	県立鶴岡中央高等学校(山形県)	「一日総合大学2005」鶴岡中央 全校生徒	80		電波と私たちの暮らし	電気電子	平田 拓	高校等から支給
10	7月8日(金) 8:20～10:20	県立新庄神楽座高等学校(山形県)	講演会 第1学年生徒 240名	240		先端技術の取組について	生体センシング	仁科 辰夫	高校等から支給
				13		プラスチック形成加工技術から来パンができる?	環境高分子	西岡 昭博	高校等から支給
11	8月30日(火) 13:30～15:20	県立安積黎明高等学校(福島県)	大学・準大学体験講座 2学年生徒全員358名	17		人工知能と知的CADシステム	機械システム	大町 竜哉	高校等から支給
				24		電気で守る地球環境	電気電子	南谷 靖史	高校等から支給
12	9月5日(月) 13:25～14:15	米沢市立第二中学校(山形県)	キャリア教育にかかわる講演会 1年生	152	HPより	道路に対する目標や将来の職業に対する意識を高める	生体センシング	神戸 士郎	
13	9月13日(火) 14:05～15:45	県立高田高等学校(岩手県)	平成17年度大学教員による模擬授業 2年生希望生と(約40～55名)	55		ナノテクノロジーへの招待	環境高分子	佐野 正人	高校等から支給
				55		ダイオキシンと環境ホルモン	物質化学	多賀谷 英幸	高校等から支給
14	9月14日(水) 13:35～15:05	県立栗江川高等学校(山形県)	メイフラワーカレッジ(1年生・2年生 30～40名(計480名を14講座に分割))	40		人工知能と知的CADシステム	機械システム	大町 竜哉	高校等から支給
15	9月14日(水) 18:50～12:50	県立清沢高等学校(秋田県)	高大連携事業(アドバンスト連携) 2・3年生 理数生徒	60	教員に聞いた	環境ホルモンと人間の未来について	物質化学	大場 好弘	13,600 高校訪問経費から
16	9月17日(土) 10:00～12:50	県立長井高等学校(山形県)	ミニカレッジ(模擬授業) 2学年生徒 198名(11分科に編成)	15		情報セキュリティ(暗号とデジタル署名)	情報科学	小林 邦輝	高校等から支給
17	9月27日(火) 10:40～15:00	県立鶴岡南高等学校(山形県)	後期(カクショウ)アカデミア(大学講義体験) 第1・2学年各20～30人程度	60		工學より身の不思議にせまる	応用生命システム	北嶋 龍雄	高校等から支給
18	10月6日(木) 20:15～21:15	宮城工業高等専門学校(宮城県)	宮城高等芸術祭芸術鑑賞会	200	教員に聞いた	学生の発見を広げるための芸術鑑賞会	物質化学	大場 好弘	高校等から支給
19	10月13日(木) 13:20～15:10	県立上山明新高等学校(山形県)	平成17年度第1学年生徒保護者ガイダンス	40		太陽エネルギーの話	電気電子	東山 誠夫	高校等から支給
20	10月18日(火) 13:25～15:15	県立郡山北工業高等学校(福島県)	ものづくり教育の推進 スーパーテクノロジー授業 電子科3年生40名	40		歩行ロボットの制御	機械システム	水戸部 和久	高校等から支給
21	10月18日(火) 14:20～16:10	佐沼高等学校(宮城県)	高大連携講座 2学年 235名 6クラス	40		ナノテクノロジーへの招待	環境高分子	佐野 正人	高校等から支給
22	10月18日(水) 13:00～16:20	県立山形北高等学校(山形県)	一日総合大学 2学年生徒全員837人、3学年全員873人	14		ものづくりを通して学ぶ社会貢献	物質化学	水口 仁志	高校等から支給
23	10月21日(金) 13:00～15:00	県立角館高等学校(秋田県)	大学模擬授業 1・2年生対象 各講座20～40名	16		命を守る高分子	環境高分子	石川 優	高校等から支給
24	10月24日(月) 13:50～15:30	白石高等学校(宮城県)	大学セミナーデー 1学年 154名	40		液晶とは何か	環境高分子	菅田 智則	高校等から支給
				30		生き物のように動く溶液	物質化学	篠井 章久	
25	10月25日(火) 13:10～15:45	県立米沢高等学校(山形県)	平成17年度出前講座(総合大学体験学習) 1・2・3年生 676名	30		機械屋さんの振動・騒音技術～圧電スピーカによる音の発生と消音～	機械システム	鈴木 謙義	
				30		先エレクトロニクスと情報社会	電気電子	中川 清司	
26	10月28日(金) 8:00～10:15	私立米沢中央高等学校(山形県)	ジュニアカレッジ 普通科特進コース2年生 112人	112		超伝導について	生体センシング	神戸 士郎	
27	11月8日(火) 15:30～17:00	県立鶴高等学校(福島県)	「学問分野別講義」 全学年聴講希望者	15	教員に聞いた	University Life and Future - Invitation to Polymer Science -	環境高分子	高橋 辰宏	高校等から支給
				20	教員に聞いた	先で水を浄化する粉体	物質化学	木俣 光正	高校等から支給
28	11月10日(木) 10:50～15:10	県立福島南高等学校(福島県)	「一日総合大学」 2年生 246人	20		環境に優しいプラスチック	環境高分子	木村 宏	高校等から支給
29	11月14日(月) 15:30～17:00	県立鶴高等学校(福島県)	「学問分野別講義」 全学年聴講希望者	40	教員に聞いた	生体情報の計測とその原理	応用生命システム	新関 久一	高校等から支給
				20	教員に聞いた	歩行ロボットの制御	機械システム	水戸部 和久	高校等から支給
30	11月18日(金) 13:40～15:10	県立米沢興隆高等学校(山形県)	「興隆高等学校講座」(模擬授業) 2学年 234名を6つの分科会に分ける	30		超分子化学	物質化学	伊藤 和明	
				30		デジタルな考え方	情報科学	平中 幸雄	
31	12月8日(木) 13:45～15:15	県立南陽高等学校(山形県)	「南陽高校大学講座」 2学年 278名	14		涙はどのように伝わるのか	機械システム	渡辺 一実	高校等から支給
				10		ネットワークサービスの研究事例	情報科学	小山 明夫	高校等から支給
32	12月8日(木) 13:30～15:00	私立九里学園高等学校(山形県)	遠路別ガイダンス(模擬授業) 2学年進路希望者(725名)	20		音声とコンピュータの話	情報科学	小坂 哲夫	
33	12月9日(金) 15:50～16:50	県立郡山高等学校(福島県)	大学出張講義 1～3学年の希望生徒(約40名)	40		数学と私	共通講座	高橋 真央	高校等から支給
34	12月14日(水) 13:50～15:20	県立若高等学校(新潟県)	大学講義体験講座 工学部関係進路希望者		教員に聞いた	ナノテクノロジーへの招待	環境高分子	佐野 正人	高校等から支給
35	12月17日(土) 10:50～12:20	県立鶴岡高等学校(山形県)	第1学年土曜出張講義 1年生・理数選択者 約85名	55		高分子材料の研究	環境高分子	池田 進	高校等から支給
36	1月18日(木) 14:00～16:00	多賀城高等学校(宮城県)	遠路学習「教養講座」(出前授業)2学年40名	40		人工知能と知的CADシステム	機械システム	大町 竜哉	高校等から支給
37	1月23日(月) 14:30～16:30	吉小牧工業高等専門学校(北海道)	日本化学会北海道支部主催 富良野・苫小牧地区化学講演会 一日出前大学	88		身近な元素の化学とその発展 二酸化炭素、その循環系	物質化学	瀬沼 英郎	高校等から支給
38	2月1日(水) 13:15～15:20	県立谷地高等学校(山形県)	1・2学年312名を10講座に分ける	8		超伝導で見る量子の世界	電気電子	平野 信	高校等から支給
				10		運動を伝達する機械要素 (歯車やリンク機構の設計および応用)	機械システム	間接 淳	高校等から支給
39	2月14日(火) 13:30～15:00	仙台東高等学校(宮城県)	第5回大学模擬授業 1・2学年進路希望者 600名	8	教員に聞いた	電気気学よもやま話	電気電子	植原 浩一	高校等から支給
				33		頭がいいコンピュータを作りたい!!	情報科学	グリムベルゲン	高校等から支給

計 2464

参考資料2

資料
小国高校の研究レポート例

山形大学工学部との共同研究（機械システム工学科 水戸部研究室）

ロボットに関する研究

1. 目的

以前からテレビなどで自立二足歩行ロボットを見てロボットについて興味を持っていた。この研究を通して、ロボットの基本的な仕組みを学ぶ。

2. 研究概要

ロボットはモーターをICで制御することによってさまざまな動きをさせることができる。それらの接続を変えたり、センサーを使うことでロボットの性格が決まる。

3. 研究内容

(1) ロボットの基本的な仕組み

ロボットは目鼻にあたるセンサー、頭脳にあたるIC、そして手足を動かすモーターで構成されている。センサーとモーターなどの接続の仕方（センサーとモーターの協調）で、そのロボットの行動や性格が決まる。

(2) ICについて

① ICとは

トランジスタ、抵抗、コンデンサ、ダイオードなどの素子を集めて基板の上に装着し、各種の機能を持たせた電子回路。集積回路（Integrated Circuit）の略。

② モータードライブIC

モーターのONとOFFを制御するIC。さまざまなセンサーからの電気信号を、モーターの起動と停止の信号に変換することができる。

(3) センサーについて

① センサーとは

ロボットの内部の状態や周囲の状況などによって変化する各種の物理量や化学量を電気信号に変換して、数値として扱えるようにするシステム。自らの判断で行動するロボットにはセンサーは必要で、人間の五感に変わる機能として活用される。例としては、マイククロススイッチや光センサーなどがある。

② マイクロスイッチ

タッチセンサーともいい、物体と接触したかどうかを判定することができる。これを利用して、障害物などに当たらないかでロボット自身が進行方向を決めることができる。

③ 光センサー

明るさの度合いを判定することができる。これを利用して、ロボットの光の志向性を決めることができる。

(4) 基本的なロボットやロボットに利用されているシステムの例

① マウス型ロボット

タッチセンサーで、障害物をよけながら進むことができる。

② 光センサーつき自動車

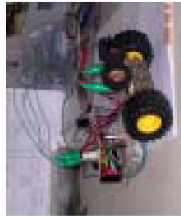
明るさの度合いによって前進、後退、回転を行う。例えば明るい方に向かって進んだり、明るい方を選んで進んだりなどの制御をすることができる。

③ サーボシステム

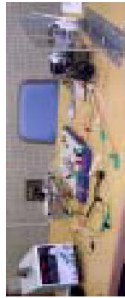
ラジコンのコントローラーのように、ロボットの部位を遠隔操作することができる。特徴として、電圧を高くすると動きがよくなりスムーズに動かすことができる。



マウス型ロボット



光センサーつき自動車



サーボシステム

4. まとめ

光センサーの自動車などは、回路のつなぎ方を変えるだけで性質が変わってしまうことを発見できた。

サーボシステムの回路を実際に作ってみたところ、最初はとても複雑で理解するのが難しかったが、電流を流したらしっかり動いた。アンプで電圧を変えてモーターに電流を流すと、ロボットの動く力を大きくしたり小さくしたりできることがわかった。実際の動きを見ながら学習できたので理解を深めることができた。

また、ロボット用のモーターはとても高価で高機能のもので教えて頂いた。そのコストが下ればもっとロボットが一般に普及するのではないだろうか。

最後に、水戸部先生、阿部さんをはじめ研究室の皆さんにお世話になりました。今回の研究で今までわからなかったことがわかるようになりとても参考になりました。本当にありがとうございました。

【参考資料】

山武アドバンスオートメーションカンパニーHP (<http://www.compclub.com/index.html>)

IT用語辞典 (<http://e-words.jp/>)

ロボット用語辞典 (http://ww4.et.tiki.ne.jp/~robot-th/robot_dic/robot_dic.html)

ラウンドテーブル3：高大連携の推進
山崎 昭（山形県立上山明新館高等学校）

配付資料

高大連携について考える

山形県立上山明新館高等学校
化学教諭 山崎昭

話題を3つ・・・

- (1)現状について
- (2)連携の下地として・・・
- (3)今後の高大連携

1

(1)現状について思うこと

多くの連携事業があるが、
なかなか活かされていない

とにかく生徒は
忙しい！

機会に
恵まれすぎ？

2

例えばオープンキャンパスは

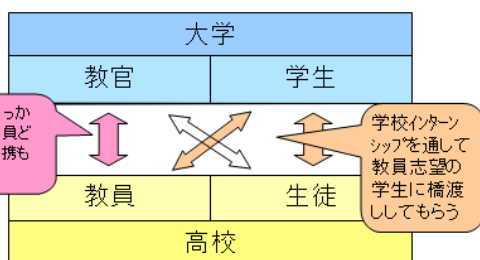
県内四大学
同じ日程で
開催
(この機会のみ)

県内の高校も
原則この日は
休日に！

とにかく大々的に、機会を制限して、
絶対行かなくちゃ！と思わせる

3

(2)連携の下地として・・・



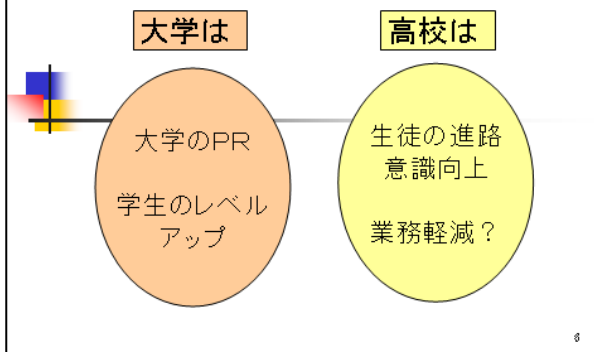
4

学校インターンシップとは？

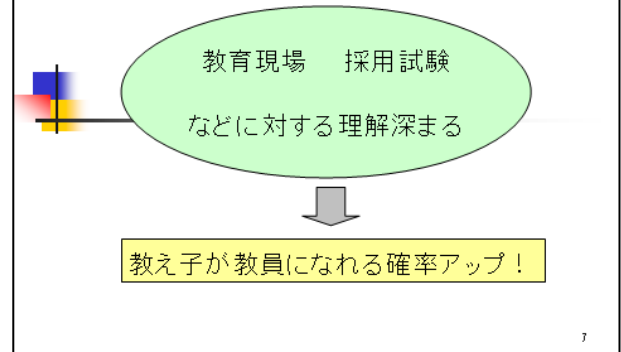
- | | |
|----|-------------------------------------|
| 対象 | 教員志望の学生 |
| 場所 | 受け入れ希望の高校 |
| 内容 | 補習や質問対応
実験TAや準備片付け
学校行事や校務の補助 |

5

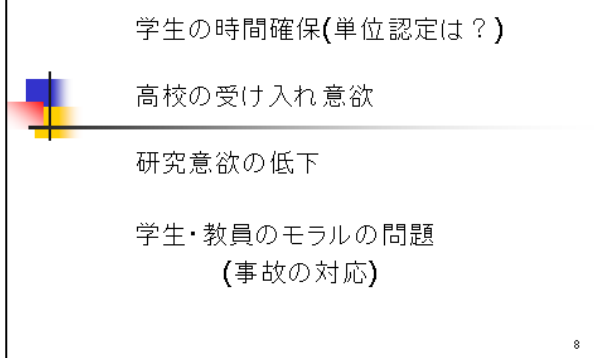
どんな効果が期待されるか？



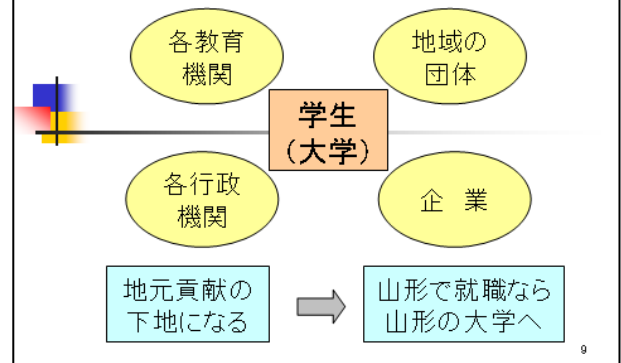
さらなるメリットとして…



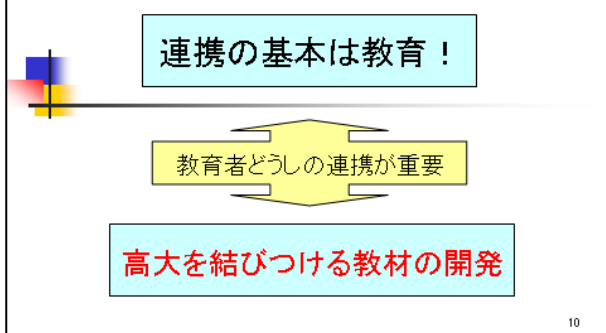
問題点は？



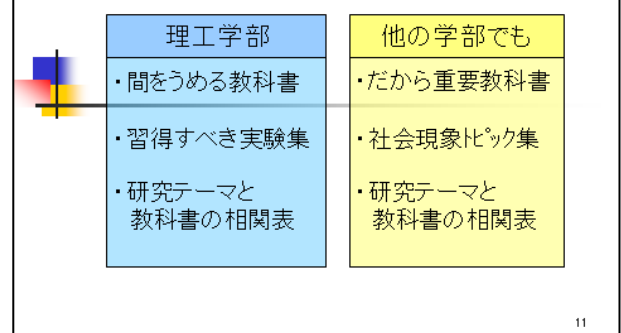
インターンシップを大きく捉えると



(3) 今後の高大連携

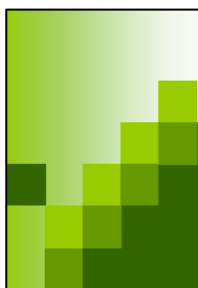


例えば…



ラウンドテーブル3：高大連携の推進
黒沼 毅（学務部教育企画ユニット長）

配付資料



山形大学における高大連携

事務担当者からみた実状

平成18年8月2日 黒沼 毅



高大連携の形

- 公開講座
- 講演会、セミナー
- オープンキャンパス
- 出張講義
- 研究室訪問など

1



公開講座などの大学開放プログラム (平成18年度)

1. 市民向け公開講座	15講座
2. 子ども向けプログラム	6事業
3. その他の大学開放プログラム	9事業

(資料参考)

2



- 講演会、セミナー
各学部ごとに実施
- オープンキャンパス
キャンパスごとに実施（資料参考）

3



出張講義

○山形大学では、開かれた大学を目指し、社会貢献の一環として、本学教員が高等学校等に出向いて講義を行う「出張講義」に積極的に対応

☆ 旅費、材料費等の実費のみを負担いただき、謝金はいただかない。

4



出張講義の実績

平成15年度	延べ 30力所	
[内訳]	高等学校	延べ27力所(県外14)
	小中学校等	3力所
平成16年度	延べ 38力所	
[内訳]	高等学校	延べ33力所(県外11)
	小中学校等	5力所
平成17年度	延べ 65力所	*高等専門学校2を含む
[内訳]	高等学校	延べ60力所(県外30)
	小中学校等	5力所

5

県外高校の県別内訳

平成15年度 14
宮城5、福島5、秋田3、栃木1

平成16年度 11
宮城3、福島3、秋田3、岩手1、茨城1

平成17年度 30
宮城16、福島10、秋田4、岩手1、青森1、
茨城1、北海道1、栃木1

5

出張講義開催校の例(近県)

- 宮城県の例
仙台三、白石、古川、仙台東など
 - 福島県の例
福島西、福島東、安積黎明など
 - 秋田県の例
湯沢、角館など
- ☆出張講義開催校からはコンスタントに入学志願者が

7

出張講義開催校の例(県内)

山形南、山形北、寒河江、楯岡、谷地など
興譲館、米沢東、南陽など
新庄北、新庄南など
鶴岡中央、鶴岡南、酒田南など

☆上記の他にも多数開催
☆上記の高校からはコンスタントに入学志願者が

8

出張講義担当教員の延人数

平成15年度	80人
平成16年度	117人
平成17年度	141人

9

研究室訪問

＊県の「豊かな学力創造事業」が中心

平成15年度	1校	担当教員延数	9人
平成16年度	3校	担当教員延数	22人
平成17年度	3校	担当教員延数	53人

10

貢献に対するインセンティブ

- ☆平成16年度は特別措置
前年度実績をベースに一定額の「協力費」を配分
 - ☆平成17年度は予算措置なし
 - ☆平成18年度は「協力費」配分を検討中
- ◎ある学部では貢献度に応じた措置を独自に配慮

11

従来型の高大連携

- オープンキャンパス等による大学紹介
- 公開講座
- 出張講義
- 研究室訪問など

☆大学側は地域貢献としての側面が強い
☆高校側は進路指導としての側面が強い
(大学進学に向けた動機付けなど)

☆一方向性

12

新しい形の高大連携

- 高校教員による補習授業
- 大学教員が最新の研究成果等を高校で講義
- 教科の指導法や教材開発を共同で
- 学校インターンシップ
- 入試科目等の研究など

☆高校教育と大学教育における双方の充実
☆双方向性

13

高大連携の新たな動き

- ◎私立大学が中学校・高等学校と提携
系列超えたエスカレーター方式
公立学校と一貫教育 (資料参考)

☆学生の確保

14

大学の事務担当窓口

大学全体

- ☆公開講座などの大学開放プログラム
総務部社会連携ユニット(旧 社会連携課)
- ◇実際の受付等は各学部事務が担当

☆出張講義、研究室訪問

- 学務部教育企画ユニット(旧 教務課)
- ◇高等教育研究企画センターが担当

☆オープンキャンパス

- 学務部入試ユニット(旧 入試課)
- ◇各学部事務と協力

15

第3部 全体会

「現在進行形の教育改革」 (各ラウンドテーブルの報告)



司会（今野） ではこれから本日の最後のイベントでございます，全体会を始めたいと思います。先ほどまで行われておりました3つのラウンドテーブルの議論の内容を受けまして，ここで，フロアの皆様から全体的にご意見を賜って有意義な議論をしたいという風に思います。

私は，教育方法等改善委員会委員で人文学部の今野と申します。司会を務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。



進め方としましては，まず，各ラウンドテーブルのコーディネーターを務められたお三方から，それぞれのテーブルでどういう議論が行われたのか，ということについてのご報告を賜る。そして，しかる後に質疑応答を行うという具合です。区切りとしましては，それぞれラウンドテーブルごとに区切ったほうが良いのかもしれないのですが，一通りご報告をいただいた後に，質疑応答の具合によって粗密が生じるかもしれないのですけれども，全体として，出された質問意見等に対していろいろと対応していただくという形にしたいと思います。

では，全体会の参加者の皆さんの共通理解を得るために，各ラウンドテーブルのコーディネーターの皆さんからご報告をいただきたいと思います。ちなみにお手元には，ラウンドテーブルの記録が配布されていることと思います。ラウンドテーブル 1:YUe ラーニングの展望。ラウンドテーブル 2: 学生参加による授業改善。ラウンドテーブル 3: 高大連携の推進。

それでは，中村先生，金澤先生，栗山先生より，それぞれご報告を賜りたいと思います。よろしくお願いいたします。

中村 最初にラウンドテーブル 1:YUe ラーニングの展望のコーディネーターを務めました中村でございます。よろしくお願いいたします。



パネリストの小池隆太先生は，山形県立米沢女子短期大学で記号学，情報メディア論，情報デザインなどを担当されている先生でございます。ゆうキャンパスの地域活動部の部会員であり，また米沢の学内のFD，SDの委員や自己評価委員などを務められております。企業に勤められてソフトウェア開発をなさっていたご経歴の持ち主でございます。

清塚先生は，このたびの山形大学教養教育のeラーニング授業のご担当者としてその経験に基づくお話を伺いました。

私の基調報告は，資料にございます通り，教養教育のeラーニング化の取り組みについての概要をご報告申し上げたものでございます。これは，ゆうキャンパスの単位互換に伴うeラーニング化でございまして，地域ネットワークFD樹氷のIT技術による授業改善という授業の一環でもございます。そして山形大学といたしましては，リモート講義の拡充という風な意味を持っておりまして，現在eラーニングの気運が高まっているということをご報告いたしました。

昨年度後期における私の授業を実験授業といたしまして，半年間さまざまな実験を行い，その結果を公開授業，検討会，さらには授業改善のアンケートなどで，どのように評価されたかということをご報告申し上げます。

また，その後，eラーニングの講習会やパワーポイントの講習会などを開きまして，さらにリーフレット・パンフレットを作りまして広報に努め，平成18年度より前期6科目，後期5科目の教養教育の授業をeラーニングとして現在配信しております。ただ，準備に少し急ぎましたせいか，先方の大学の用意が整わず受講者が出ないという風な帰結になっておりまして，これは後期以降の反省材料になっております。

現在の山形大学教養教育のeラーニングはライブストリーミング方式によるリアルタイムの授業配信でございまして，例えば水曜1コマの授業であれば，授業をカメラで撮影して他大学にインターネットで配信するもので，先方の大学では教室を確保し，それをパソコンからプロジェクターに投影して受講するという方式です。要するに教室の確保や機器の準備が必要ということになりまして，今年度当初はたばたと決まりましたので，準備が追いつかなかったということが，今回受講者が出なかった最大の理由ではないかという風に思います。

また、教員はキャンパスメイト・コースナビという LMS、授業支援システム、ラーニングマネジメントシステムを使いまして、ここに毎回の授業内容をアップロードし、また資料などもアップロードいたします。学生、受講者はここにアクセスいたしまして、リアルタイムで動画を見るということになります。それから掲示板機能、質問回答機能などもございまして、これによって双方向性を確保するということになっております。現在、平行して YU-SUNY プロジェクト、ニューヨーク州立大学との e ラーニングによる単位互換のプランが進んでいるところでございます。また、今後、地域連携や高大連携などにも活用できるという風なことを報告いたしました。

さらに付録といたしまして、国内の e ラーニング先進大学・先進地域の状況を、スライドとインターネットを使いましてご紹介申し上げました。北海道情報大学、千歳科学技術大学、それから OCW コンソーシアム、これは授業内容、シラバスやスケジュール、資料などを公開するというものでございまして、e ラーニングの一種ということができるとかと思っておりますけれども、東大、京大などの先進大学の事例を紹介したものでございます。

最後に岩手大学でアイアシスタントという、シラバスと授業記録、授業支援システムを一体化した非常にユニークなウェブシステムが現在構想中であって、そのサンプル版の画像を紹介しました。



続きまして、清塚先生には、実際遠隔授業を担当いただきましたのでどのような感想を抱いたか、ということを中心にお話を伺いました。平凡な並みの教員と書かれていますがそんなことはなくて、実は非常に高度な研究をなさっている清塚先生でございます。動画を拝見しても、授業は私が受けた教養教育などとは大違いでございまして、非常に高度な、内容の濃い授業でございました。自画自賛するわけではありませんけれども、山形大学の教養教育で行っている授業は、どこに出しても恥ずかしくないどころか、非常に高水準な良い内容の授業が多いと思います。特に今回 e ラーニングの授業として取り上げられたものは、そのようなものばかりだという風に思います。

また今回は e ラーニング授業ということで、特にパワーポイントの利用、それから LMS の利用ということで、これまでもきちんとした授業をなさっていたようでございますが、それをさらに厳密化していったということについてのお話がありました。

清塚先生も今年度初めてパワーポイントを使われたんです。今回 e ラーニングの授業を担当された先生方、ほとんどの方が初めてパワーポイントを手に入れた。多くの方がパワ

ーポイント講習会に参加された方ばかりでございます。どうせ未熟なんだろうなと思って見ましたらそんなことがなかったです。非常にきれいなパワーポイントで、すごく短期間に効果が上がったなということを私は実感いたしました。ご覧になればわかるんですけれども、最終的には、この LMS の利用方法が、現在、実際には e ラーニングではなくて e ラーニングの実験授業なわけで、遠隔履修者はございませんので、ということもありますけれども、掲示板や質問回答などの機能を十分に使っていないということが挙げられました。それから著作権問題についてどうもきちんとした対応をしなかったという風な反省をなさっております。結果的にはよい授業になったと思われるけれども、それは e ラーニング授業ということではなくて、特にパワーポイントを使ったことによる授業の改善という部分が大きかったのではないかと、このようなお話でありました。

それから小池先生のお話は、他にスライド資料を配布してございますのでそちらをご覧いただきたいと思いますけれども、一言で申し上げますとパッケージ型の授業支援ソフト、つまり 1 個 1 個の製品をパソコンにインストールして使うという風な、そういう授業支援ソフトから、ネットワークやウェブを利用するソフトへの移行に伴って生じてきた諸問題を体験に基づいて報告されたものでございます。

小池先生は企業でソフトウェア開発などをなさっていたということ、情報メディアなどがご専門ということもありまして、米沢女子短大でこのような授業の e ラーニング化、あるいはウェブによる学習支援のシステムを中心となって担っていらっしゃる方なんですけれども、そのさまざまな事例を実際のホームページをご紹介いただきながらお話していただきました。

大学における e ラーニングの利用形態、さまざまあるけれどもこれを 3 つにまとめられて、連絡・コミュニケーションにおけるウェブ利用、ウェブ・コンピュータによる授業支援、それから授業コンテンツとしての利用、ということでの話をなさいました。それぞれに長所と短所があって、最終的にはこれらの長所と短所をどのようにクリアして用いていくかということが今後の課題となるという風なお話でございました。

学生のコンピュータリテラシーというものをとって、学生の習熟度、あるいは授業の内容との関係などによってさまざまな場合があるという風なお話でございました。

また、今回のテーマであるパッケージ型 CAI とウェブとの比較ということに関しましても、一長一短があるということで、今後はウェブの利用が一般的になっていくと思われるけれども、これは例えば個人情報管理であったり、コンピュータリテラシーの問題であったり、そういうことを解決しなければならない。特に、最後のスライドにありますように、利用する教員、学生、個人の力量が重要となっていく、授業における教員の自己責任、説明責任がより大きく問われるということが、私たちの肩に重くのしかかってくる課題として上げられました。

この後、討論に入りまして、多々ご意見が寄せられました。何点かにまとめますと、第 1 点といたしましては、山形大学における e ラーニング戦略の明確なプランを示してほしいと

いうご意見が寄せられまして、私はそんな戦略は持っておりませんという風なことで、おざなりなお答えをしたんですけれども、現在は教養教育 e ラーニング化、それから YU-SUNY プロジェクト、これが 2 つの柱でございます。それで今後、LMS を利用した就学支援等の学生ポータルシステムの実験を行っていくという計画になっております。現在構想中である IT キャンパス構想などとの絡みで、今後、近日中に本学、本地域における e ラーニングの全容というものを戦略的に形成していかなければならない。そういう時期であろうという風に思います。

それから第 2 点。これは質問が集中いたしました。e ラーニングにおける著作権管理。これは、使用するコンテンツにおける著作権の管理。それから教員がコンテンツを作成したときに発生する著作権の管理についてどうなっているのかということです。

これは、概略をお話ししますと、ライブストリーミング方式の場合には、通常の授業と同じ著作権への配慮が必要となります。ビデオオンデマンド形式に加工した場合は、著作物の二次利用ということになり、ほとんど一件一件の著作物について許諾を得なければならない、というのがメディア開発センターで出された指針でございます。さらに、教員に発生する著作権に関しましては、現在、社会連携ユニット、知的財産の管理を担当している大学内の部局でその規則を策定中でございます。

これにつきましては小池先生のほうから大きなアドバイスがありまして、小池先生はこの著作権管理についてもご経験が豊富ということでございまして、従来、書籍における教養利用はほとんど OK でコピーして配布することが可能であった。けれどもデジタルデータのコピーは原則的には不可である。同じデジタルデータをフロッピーとかディスクに落としてみんなに配布するというのは、これは違法行為である。という基本的なことを教えられましたし、画像などの利用も、誰かが撮ったものを使うという場合には必ず著作権が発生する。自分で作るのが基本である。自分で作ったものを使うなら OK である。だから面白い例として、建築物を撮影した時に、その建築物全体、それからその管理者、さらにその部屋の持ち主、部屋の中にある美術品の著作者などと、複数の著作権が一度に発生する場合があるという風な恐ろしいお話も伺いました。

他大学では、著作権管理のスタッフを専従として、一年中その人は著作権管理だけをしているという風なスタッフを配置しているところも多いようで、教育学会、センターの会議などに出席すると、どこでもその話で持ちきりでございまして、みんな頭を悩めているところでございます。

それから、後は、今後の e ラーニングに関するクラスサイズ、それから開講授業数についてのご質問、山大的受講者の状況についてのご質問など。それから今後現れてくる在宅受講の上での問題などについてのご指摘が相次ぎまして、この e ラーニングに関しましては、ご存知の通りまだ山形大学は出発したばかりでございまして、未熟で原始的であり、また規則においても、技術的にも今後整備していかなければならない課題が多々あるわけでございますけれども、

一応今日の分科会におきましては、基本的な問題についての議論が非常に豊富に出されまして、今後何をしていかなければならないかということがかなり明確になったかと思えます。

今後とも e ラーニングの推進にご協力いただければと思います。どうもありがとうございます。

金澤 続きましてラウンドテーブル 2 を担当いたしました、人文学部の金澤でございます。



パネリストといたしまして、東北公益文科大学から三原容子先生を、それから地域教育文化学部から小田友弥先生にご出席を賜りました。その上で、他の大学、また学生諸君を含めまして、非常に多くの方のご参加、さらには、非常に白熱した議論になりました。非常に貴重なご意見をたくさん賜りましたことを、この場を借りてお礼を申し上げます。

パネリスト側の話題提供は、どちらかという短めに。それで、できるだけ多くの方のご意見を聞きたいということで、人文学部、それから東北公益文科大学、地域教育文化学部、それぞれの学部で、あるいは大学で行われている、授業改善の方策というものの紹介がありました。

まず人文学部では、樹水で作っております、基本的なフォーマットを同じくするアンケートの実施を、それぞれ前期と後期に行っているわけですが、そのアンケートについて。それからそれに加えて、97 年から始められております、授業改善の一環としての学生参加の授業改善のためのシンポジウム。これは 2 回行われているんですが、特に昨年度実施されました、授業のわかりやすさとはいったい何か、ということテーマとするシンポジウムの内容、質疑についての紹介を行いました。

そもそもなぜ「授業のわかりやすさとは」、というテーマを設定したかといいますと、これは授業改善アンケートの項目であります、「この授業は理解できましたか」とか、あるいは「教授法がわかりやすかったですか」という風なことにに関して、学生側の求めているわかりやすさと、教員の方の考えている、こういう授業がいいんじゃないかというものの間に、もしかしたらズレがあるのではないかと。あるいは、その点に相互の理解がないのではないかと、という風なことを考えたからであります。

質疑においては、特に授業のわかりやすさについて、学生の側からも、別に学生に迎合しろとか、レベルを下げろという風に言っているわけではなくて、むしろ知への好奇心というものを満たしてくれるような、あるいは自分でその問いに対して答えを見つけられるような、そうした深い問いというも

のを持てるような授業がいいのではないか、というような意見が出され、しかしそれとは別に、少なくとも授業として最低限の体をなしているということ、あるいはコミュニケーションを前提として何かを伝えたい、知識を伝えたい、あるいはこういう風なことを考えてほしいというのであれば、それを伝える工夫をぜひお願いしたいという要望が出されたところでありました。

第2の話題提供者であります三原容子先生の方からは、東北公益文科大学で行われているアンケート、これは樹木のアンケートで、同じものであるわけではありますが、特に、基本的には今年度から全科目で実施されているアンケートの実施状況。それと学生参加型の双方向型のモニター会議について、ご報告がありました。

特に、学生側からの要望というのがあるということで、教育改善意見交換会という形での学生の意見を聞く会というのが非常に盛り上がりを見せ、非常に意義の高いものであるということから、今後定期的に、しかももう少し頻度を上げるという風なことが検討されている旨、紹介がありました。

さらに小田先生から、地域教育文化学部での取り組みについて話題提供がありました。こちらも、アンケートと先ごろ行われました懇談会の報告ということになるのですが、アンケート結果、それから項目についての細かな分析、特に自由記載項目にある「良かった点」と「悪かった点」のまとめ。さらに懇談会とアンケートとの関係。あるいは学生参画型の懇談会の位置付けについて分析された結果が出されました。

特に重要でありますのは、その後の意見交換の核となる事柄でありますけれども、アンケート項目が授業改善に、本当に役に立つものになっているか。あるいは、アンケートを実際に答えてもらって、同じことが、学生側には異なった形で受け取られることがあるということです。

例えば例として出されたのは、自分の体験談をお話しされた先生がいた時に、その体験談が良いという風に受け取った学生もいれば、それは不快だとか、イヤだという風に受け取った学生もいた。このような場合に、それこそどうすればいいのかというようなことであるとか、あるいはアンケートに馴染まないような項目もあるのではないかと、といったような、今後のアンケートのあり方についてのご意見が出されました。

それを踏まえての意見交換でありますけれども、まず学生さんの方から、今行われている授業改善アンケートについては、学期末にしかやらないし、1回きりなのであまり授業改善にはならないのではないかとようなことから、これを授業の途中にやってはどうかという風なご意見。それから教員の中にも、同じことを言っても、非常に伝わりやすい人もいればそうでない人もいますので、表現力というものを、テクニックとか、そういうものをもう少し研磨する必要があるのではないかとようなこと。さらに学生諸君についても、相互の情報交換といいますか、経験の伝達というのが非常に重要ではないかという風な、非常に有益な提言がなされました。

ここに至って、ほぼどの大学もどの学部も、授業改善のために行われている取り組みは、大体アンケートと懇談

会であるということがわかってきましたので、まずそのアンケートについてご意見を伺うことにいたしましたわけですが、このアンケートについては、最初に出た実施の時期、それから方法、項目、あるいは記名であるか無記名であるか。あるいはそのフィードバックのシステム、実際にフィードバックができているのかどうか、に至るまで、非常に真摯な意見の交換がありました。



特に、学生さんの側からは、例えば授業改善のアンケートをしても、なんだかあまり効果がないといいますか、要するに授業改善のアンケートについては、特に問題はない、あるいは別にいいという人に関してはあまり書かない、という風なご意見があったのに対して、例えば改善してほしいという風な授業に対しては、これはまた逆に書きにくいという風な実情が紹介されました。特に少人数の授業などでは、たとえ無記名であっても筆跡、あるいはコース等で、結局特定されてしまうのではないかと、というような恐れがあるということになると、なかなか、例えば成績上不利に扱われるのではないかと、とか、そういった危惧がある、という風なご意見がありました。実際に、他大学の例として、極端な例だという風にちょっと私は理解しているんですけども、実際にそういう、報復的な例があったというご紹介があり、結局アンケートの使い方、フィードバックのあり方というのをいかにするかというのは非常に重要な問題ではないかと思われま

す。もちろんそれ以前に、アンケートをする際の相互の信頼関係というのも当然重要でありますけれども、どういう風に使うかということが非常に重要なのではないかと風には考えられます。

この間、アンケートのそもそもの意義をめぐって、例えば個々の授業、例えば板書がきれいだと汚いとか、あるいは声が聞こえにくいとか、こういった工夫をすればいいのではないかと、というのは、別に授業の途中にアンケートをするというのも1つの方法ではあるけれども、毎回出席カードのような形で、ミニツペーパーという形で、簡単に毎回の授業のコメントにそういったものを書いてもらってそれをフィードバックする。あるいは、少し大きめの紙に毎回の授業の欄を使ってもらって、橋本先生のご紹介で、岡山大学で実際にされている、シャトルペーパーという風におっしゃっていましたが、そうしたA4ぐらいの紙に、毎回3行か4行ずつ学生に書いてもらって、それに先生がコメントをして返すという風な形で、相互の、双方向性を維持することができるのではないかと。そうだとすれば、各個別の授業の改善というのは十分にこれで図れる。だとしたらアンケートというのはも

う少し対極的な観点から、例えば学部全体であるとか、あるいは大学全体の、授業なり教育の改善という風な意義付けを与えられるのではないかと、という風なご意見が出されました。

しかし一方で、先ほど紹介しましたような、何を言っても聞いてくれないケースということがあるのは残念ながら事実であり、そうだとすれば、少なくとも授業、あるいは大学で講義をしているという風に言えるだけの、最低限のラインをどのように保持するかということが、重要な問題になります。

ただこれは、一方で、アンケートを人事評価に結びつけるという風な例も、実際にやられているかどうかはわからなくて、中国でそうだったというお話をちょっと伺ったんですが、ただ、日本で、しかも今のような形で、できるかどうかという風に考えるのはちょっと時期尚早のようにも、個人的には思われます。さらに、そうした人事評価に使うということであれば、その前段階での問題であるアンケート項目の絞り込み、あるいはアンケート項目の見直しが必須であるという風な話になっていったわけです。

アンケート項目については、午前中の橋本先生のご講演の中にもみられましたように、できるだけ絞り込む、必要なことを。しかも岡山大学では記名で出してもらうという風なご紹介でありましたので、今後、今、少なくともわれわれが樹氷で使っているアンケートは17項目もあり、しかもそれは、非常に多岐にわたるものであり、授業の内容に関することもあれば設備に関することもあり、学生自身に関することもあるので、もう少しこれを見直し、精査して、再度本当にそれが授業、ないしは教育の改善になるかどうかというような検証を経てからの話であろうと思われます。

次に、懇談会についてですが、学生参画型の懇談会というのが、どこの大学、あるいはどこの部局でも、回数の頻度の差はあれ、行われているようであります。

今後、懇談会のあり方、あるいは学生の参画のあり方をどのようにするかということが次なる課題となりました。特に、例えば公益大の実例としてあげられた、三原先生のご報告によりますと、多くの学生さんが参加して非常に積極的な意見交換ができたということでもありますけれども、それは実は各ゼミから代表者を出す。最低限1人は出ていただいて、後は自由参加で、ですから必ず一定量の学生さんは出るように下支えがなされているという風なことでありました。これは、午前中に講演のありました岡山大学でも類似の方法がとられているように聞いております。

そういったしますと、例えば学生と教員が何らかのテーマを決めて事業の改善、ないしは教育改善のための懇談会を行う時には、やはり、かなりの力を割いて、学生にも、主体的にはありますけれども、できるだけ出てもらうような工夫をする。しかも、どうも時間が空きすぎるとだれてしまうのか忘れてしまうのではないかと、という風なご意見があったので、定期的に関っていくということが重要ではないかと考えさせられました。

さらに学生さんの提言でいくつかあったのですが、午前中の講演にもありましたけれども、学生さん自身が困ったことというのは必ずしもわれわれは完全には拾いきれてい

るわけではないのです。そうだとすれば、例えば1年たって2年生になった学生が、あるいは高学年になった学生が、改めて自分が入学当初だったときはどうだった、自分がその授業をとる時にどういうことを考えたかということを思い出して、先輩として、要するに縦のつながりを利用して、下級生に経験を教える。あるいは情報を伝える、といったような、その学生間の情報の交換を担保するやり方というものを保持する必要もあると実感させられました。

その意味では、学生側の主体的な取り組みというものを進めるために、そのための仕組みをある程度大学側のほうで作って、その後は、どういう風に困ったかとか、そういった経験談を持っているのは学生さんなので、そちらのほうにお任せするというのもできるのではないかと、という展望が見えてきたところであります。

私のです、司会の不手際でありまして、いろいろと大変貴重な意見が出ましたけれども、ちょっと時間をオーバーして、しかも、まだまだ皆さん喋りたいことがたくさんあるという状況で、やめなければならなかったのが大変残念でありますけれども、今後ともこのような形で、学生さん、あるいはほかの他大学、あるいはさまざまな学部からの、ご意見を賜ることができれば幸いに存じます。ラウンドテーブルの2に関しては以上です。

栗山 ラウンドテーブル3の高大連携の推進を担当させていただきました理学部の栗山です。



ラウンドテーブルの3では、高大連携の推進ということで、4名のパネリストの方にそれぞれ話題提供をいただき、15分ほどの発表の後に質問等を行なっていたんですけれども、結局、発表でほとんど時間になってしまっていて全体的な話をする余裕がありませんでしたが、ここで紹介させていただきます。

最初に、高大連携と言ったときに、いろいろな高大連携があるんですけれども、どういうものがあるかということを紹介した後に、SPPプログラムというのは理科系の高大連携に限ってしまうんですが、まず、理学部の鶴浦先生に、SPPプログラムをここ4年連続行なっていますけれども、どういう経緯で連携先を探し、どういうところの苦労があったかというような、実際にSPPプログラムを申請するに当たっての注意点などもいただきながら、報告いただきました。

その中でSPPプログラムを行なうことによって、高大連携としてどういうメリットがあるかということで、報告にも書いてありますけれども、人的なネットワークを作れることが大きなメリットであり、そういう外部資金を取ることによって、冒険的

な、チャレンジする、新しいことを行なうことができるということがあります。逆に高校側とすると、申請する段階である程度カリキュラムを変更するということが必要になりますので、もし最悪の場合、採択されなかった場合には、公的資金、外部資金が取れませんから、何らかの方法で行なう必要があるというような覚悟で申請をしなければいけないということもありました。



そして、報告に書いてあるような質問等がありまして、実際に申請する内容で、教育内容等の指導要領の範囲についてもあったんですけども、SPP のプログラム自体が、高校生に最先端の技術に触れてもらうということもありますので、現場の先生と相談しながら、こういう内容について生徒が理解できるか、というのをディスカッションしながら内容を決めていくことが、大切だということになります。

続きまして、工学部の水戸部先生に、まず工学部の高大連携の話をいただきまして、出張講義の予算については大体高校側が負担されて行ってしまうんですけども、高校のほうから 90 分の授業をお願いされることがあるんですが、なかなか90分、高校生を集中させて授業に引きつけていくのは非常に難しいので、何らかの、先生は芸という言葉を使っておられますが、生徒を引きつけるような芸を持っていないと出張講義に行っても成功したものとは言えない。逆にうまい先生の場合には、高校側としてもまた来年も来年もという風に何回もお願いするということになる、というような話をいただきました。

進学校の場合には、どうしても学校側のことで、あまり生徒のモチベーションは高くないので、逆に工業高校などの場合には、工学部ということもありますので、生徒も非常に熱心で、質問なども盛んに出るという報告をいただきました。

次に、高校の連携について、実際に工学部と小国高校が協定を結んで、単位認定を行なう授業が昨年度から始まりました。それについての報告を受けまして、生徒さんが実際に夏休みの期間、工学部の研究室で実験をして、それをレポートにまとめて発表し、それを高校側が単位認定するということです。その単位認定は、去年は理科の単位で一単位に認定されました。もともと、どうして小国高校との連携が始まったかというところは報告に書いてありますが、地元の高校への進学者がどんどん少なくなって、近県の進学校に行ってしまうことで、町の活性化が必要だということで、町が高校をサポートし工学部との連携が進んでいるという風なことが、連携の始まりだと言う紹介をいただきました。

実際に、高校と知り合うことによって、先生が物理研究会

などへ行かれると、高校の先生方が非常に熱心に教材開発などをされているということも報告いただきました。その段階でやっぱり高校の先生と知り合うことによって、高校入試、大学入試における大学の考え方とか、お互いの情報交換をする場にも非常に高大連携が役に立つということもありますし、ここでは先生が所属される機械システム工学科の問題ということで意見をいただいたんですけども、エンジニアの需要があるけれども人材確保が容易でないというところを、高校との連携でどういう風に人材を育てていくかということの話をいただきました。

その後質疑に入ったわけですが、紹介していただいた先ほどの予算関係。実際には、出張講義の場合には高校側の方から、お金が出る。高校側のほうもいろいろな出所がありまして、米沢の場合には、米沢の商工会議所のほうから高校側のほうに、大学の先生を呼んでこういう講座を開いてくれないかというような、お金の、経費の出し方もあるということをいただきました。

実際に出張講義に行ってみるといろいろなパターンがあるんですけども、私のように化学の場合には、実際に何か持って行って、先ほどの芸ではないですけども、その場で生徒を引きつけるようなことは簡単にできるんですけども、先生の場合にはロボットということで簡単に持ち運びできないので、ビデオで見せるようなことになってしまうんですけども、やっぱり高校生を飽きさせないようなことをできる人が行かなきゃいけない。誰でも出張講義に行っていっていいわけじゃなくて、ある程度の能力を持ったタレント性のある先生が行ったほうがいいという風な話をいただきました。

次に、実際に現場の高校側の意見を、明新館高校の山崎先生に個人的見解と断られたんですけども、率直な意見を伺いました。機会に恵まれすぎということをご説明したいと思うんですが、今、高校は、大学・短大から膨大な資料が、2 日間でも何メートルというくらいに、それくらい来るらしいです。どこの大学も少子化になっていますから、無料で何でもやりますから来てください、ぜひ来てくださいってくるわけです。ですから、大学の説明会はどこでもやっているの、逆に説明会の参加のチャンスを減らしたほうがいいのかという意見をいただきました。

例えば、県内の大学を一斉に、この日にオープンキャンパスにする、かつ、高校の部活なり授業を休みにして高校生全体が、そのオープンキャンパスにいけるようにするような仕組みもある程度いいのではないかと。高校生が大学のオープンキャンパス以外に訪れたときに感じたことらしいんですけど、やっぱり大学の活力を見せるべきであって、夏休みとか静かな時、やっぱり活気がない時に行っても、ある程度その施設が非常に立派であっても、高校生から見ると魅力的な大学には映らないこともあるらしいので、大学は、学生さんがたくさんいて活気があって、ああ、すごいなって思わせるような時に、ぜひオープンキャンパスをやっていたきたいというような意見をいただきました。

生徒自体に、あそこのオープンキャンパスに行くと非常に面白いというような情報がどんどん伝わっていき、生徒が自分から部活を休んでいくような感じになれば一番いいの

ではないかということをお願いしました。

報告の2番目の連携の下地というところでは、学生のインターンシップ、最近理学部でも、企業先が決まってきたので、高校でのインターンシップということができないだろうかと。学校ボランティアということで小・中・高に行っている教員志望の学生もいるんですけれども、システムとして、学生がインターンシップに行くことにより、高大連携の下地ができるのではないかと提案をいただきました。

メリットとしては、大学のPRができるし、高校の生徒さんから見ると、自分の将来像が見える。行く学生によっては社会性が養われるとか、「高校は業務が軽減される」というのは、ちょっと冗談っぽい話なんですけれども、高校と大学の人的つながり、先ほどの鶴浦先生のところにもあったんですけれども、そういうネットワーク作りが非常に大切ではないかという風な話をいただきまして、学生の就職時にメリットがあるかもしれないというところですよ。

今後の高大連携で、また出てくるんですけれども、人的交流で大学と高校の間を埋めるような教科書の作成とか、そういう実験メニューの開発などのようなことが今後生まれていくと、非常に新しい高大連携の形として可能性があるのではないかと提案をいただきました。

人的交流についての質問があったんですけれども、実際に山崎先生の経験で、山崎先生、化学なんですけれども、最初の赴任校というところが化学が一人で、周りに相談するような教員がいない場合には、結局、自分の出身大学の教員に聞いて指導を仰いだというような利点も、人的交流に当たるというお答えをいただきましたし、高校ボランティアについては、配布資料を見ていただくと、なかなか問題点となりそうところがあるんですけれども、それをうまく解決するようところ、方法があれば、ボランティアなりインターンシップというところが、今後の連携の次の道ではないかなと思います。単純にボランティアで話を持っていてもなかなか難しい。結局高校側と大学側のそれぞれの意識をどれくらいのところを持っていくかなというところが、今後の問題になっていくかなという風になります。

最後ちょっと間に合わなかったんですけれども、大学の事務のほうから、実際に入試情報のデータも紹介していただきながら、出張講義に行った高校からの入学者がどれくらい増えたかという数字をあげていただきました。もともと行った高校は進学校だったというところもあるんですけれども、最近には特に近県である宮城県、福島県からの入学者も増えていますし、こちらから出張講義で行った回数と入学者の増加に、ある程度の相関があるという風なことです。

事務のほうからも、先ほど山崎先生から紹介があった、学生のインターンシップというの、今後の連携の可能性としてあるのではないかと。さらに進んだ形とすると、資料として最後にあるんですけれども、高校との、中高一貫ではないんですけれども、そういう連携も含めて行く可能性もあるのではないかとこのところで大体時間になってしまいました。以上、そういうところですよ。よろしくお願いします。

司会 どうもありがとうございました。非常に濃密な議論が行

われたということで、短い時間で簡潔にご報告いただいたと思います。この全体会はあと30分ほどしかありませんが、できるだけ、皆様の多くが持たれている疑問等についての議論を進めたいと思っております。以後につきましては、皆様のご関心のあるテーマについて、ランダムにお話しさせていただいて、その中で議論を進めてまいりたいということです。

質問なさる場合には、お手をあげていただいて、お名前とご所属をぜひお願いいたします。というわけで、いかがでございましょうか。ぜひよろしくお願いいたします。

中村 高大連携に関して伺いたいことがあるんですけれども。今後のeラーニングの展開の中で、地域連携、高大連携などに活用してまいりたいという風に考えておりますが、明新館高校の山崎先生に伺いたいのですが、現状でも、あるURLにアクセスすると大学の授業が毎週見られるわけなんですけれども、そういう形で、簡便に授業を参考にしていただくということが普及していけば、高大連携の新しい形が可能になるかと思うんですけれども、そういうことに関するニーズというのはいかなるもののでしょうか。よろしければ教えていただきたいと思うんですけれども。

山崎 明新館高校の山崎です。ちょっと突然なので…。それは授業としてですか？



中村 もちろん授業としてということになりますと、さまざまな規則を制定して、協定を結ばなければならないわけですが。模擬授業とか出張講義でも作られた授業ですよね。そうではなくて毎週やっている実際の授業はこうなんだということが一目でわかるというのがあるわけなんです。

これは単位互換のeラーニングとして大学生向けに提供しているものなんですけれども、それをそのまま本当にお見せするかどうかというのはまだ何も考えていないんですが、例えばそんな形でクリックすると授業が見られますよ、という風なシステムが、高大連携の中に導入されていけば、足を運ばなくても、遠隔地の高校からでも、大学の授業を観察することができると思うんですけれども。そういうことについて、今後のニーズというのはいかにあるのでしょうか。

山崎 大学を理解するという点では、やはり3年生あたりで、少し志望校を考えようかという時に、もしかしたらクリックするかもしれませんが、ちょっと今の段階でどれくらいアクセスするかなといわれると、自信がありませんが…。

でも、大学に対する理解が深まるのであれば、活用する場面はあると思います。それもあって、それ以外の人的交

流もあってと。

例えば、そういうのがあるから出張講義はいいんじゃないかとか、そういうのは難しいかなと思っています。

栗山 eラーニングに関して、先日ある大学の先生と話をする機会があったんですけども、eラーニングをすることによってどういうメリットがあるかというところが、なかなか見えてこない人が多いと思うんです。単純にeラーニングをやっているといった時に、将来的に東大の先生がeラーニングをするのを、日本中の大学の先生が見ることによって、それで済んでしまうかという極端な話を考える人もいるわけですし…。

高大連携に関してなんですけれども、ラウンドテーブルで山崎先生の方からあったんですが、とにかく高校生は非常に忙しい。部活動などでなかなかオープンキャンパスなどにいけないという時に、もしかすると、可能性とすると、そこをクリックすることによって大学の、今配信されているのは教養教育ですから、教養教育で面白いことやっているな、あの先生面白いなっていうことを知る機会としてはあると思うんですけども。

あとは、高校側としては見る場所ですね。ハード的にこの高校でも今はインターネットを見られるかというと、そうでもないような気がするんです。実際に何か所かの高校を訪問した時は、進路室にインターネットに繋がっているコンピュータが何台ある程度。生徒がいつでも自由に、または非常にたくさんの人が使う環境にはあまりないような、というところも多いので、その辺の兼ね合いが必要になってくるのではないかという風に思います。

中村 ありがとうございます。今、フォローしていただいた栗山先生は、高大連携に情熱をささげられている方で、たまたま新幹線に乗り合わせた時に、「これが僕の去年の高大連携、地域連携の業績です」って一覧表を渡された覚えがあるんですけども、その時もちょっとお話したことなんですけど、物理的な事情でなかなか大学－高校間の人的交流ができないという場合に、補完のメディアとして使っていく可能性はあるのではないかという風に思うんです。

今の話、確かにニーズの面とか技術的な面で、今後考えていかなきゃならないことがあると思うんですが、山形県の基幹情報ネットワークっていうのが全高校を結んでいるわけです、県立高校に関しては。それがほとんど実質的な利用がなされていないということがあり、私が担当しております大学コンソーシアム山形では、はっきり言って県の補助金などを引き出すために、大学と高校との間の連携を何らかの形でもう少し活発化していきたいという風にも考えておまして、今どうということもないんですけども、今後、ちょっと検討課題として皆様の心に留めていただければという風に思います。どうもありがとうございました。

司会 どうもありがとうございます。今の点に関わって、もうちょっと何か聞きたいという方いらっしゃいませんか。高大連携とeラーニングの提携といいますか。いろいろな要

素があって、eラーニングを活用するということはあるであろうと。そうしてまたニーズの掘り起こしもあるんだろうということなんだろうけども。

黒沼 高大連携ではなくてeラーニングのことなんですけれども、この間セミナーに行ってみまして、「eラーニングというのはFDだ」という捉え方があるというのがありまして、いわゆるeラーニングのコンテンツを作ったり、授業そのものをどういう風に改善してうまく見せるかということを、eラーニングをやることによってすごくFDにつながっているというようなご意見もありましたけれども、その辺は何かお話にならないかなったでしょうか。



中村 今日の山大的パネリスト2人の話はほとんどそれぞれございまして、清塚先生の授業が、eラーニングというか、パワーポイントのスライドを導入されたことによってどのように改善されたかという話を中心でし、私の報告も、昨年、公開授業・検討会にかけましたeラーニング授業の、FDに関する部分を中心としてお話ししました。確かにそうだと思います。

それから、清塚先生もおっしゃったんですけども、撮影されてビデオになりますね。否応なく自分でも見ることになります。清塚先生がおっしゃったのは「最初はイヤだった」と。それがだんだんどうでも良くなってきました。普通になってきます。自分の話し方とか写り方とか、授業の内容とかを見るのが普通になってきます。これはいろいろな意味でFDのきっかけになっていくだろうという風に思います。清塚先生、どうぞ何かありましたら。

清塚 それは確かにそうなんです。そうした場合に今度、eラーニングというのを山形大学はいったいどう使っていくのかというのが問題になってくるのかなと、ちょっと僕は思っているんですけども。いわゆる学生の補充用の授業、教材として使っていくとか。あるいは本当に、ほかの大学の例を見ても、eラーニングで単位をどんどんとっている人、受講者がいっぱい増えているというのはあんまり多くないようなんです。今後山形大学としてはどうしていきたいのかっていうのが、今から考えていく必要があるなって思っています。

中村 考えていく必要がありますね。一緒に考えましょう。ただ、現在行なっているのは基本的には単位互換制度の中のeラーニングということなので、問題は単位互換制度の普及というところに帰結してくるんだろうと思います。

いろいろなメリットがありまして、コンソーシアムで謳ってい

るのは教育内容の双方向的な向上ということで、不十分なところを補うということですね。もっと具体的に言うと、私、再三言っているんですが、このeラーニングとコストダウンに関するところがなかなか良く伝わらない部分があるんですけれども、私、東北芸術工科大学で毎週授業やっていますけれども受講者は少ないです。それで相当のお金をいただいていますけれども、おんなじ授業をeラーニングでできますものね。

それからまた、学内的にはリモート講義の問題がありまして、遠隔キャンパス間で教員が移動して、例えば夜間の授業などを行っているわけなんですけれども、これに関しましては、例えば200人とかの受講生があるわけですよ。200人の授業は、直接やってもeラーニングやっても同じとは言いませんけれども、かなりeラーニングでも効果が上がる部分があります。

そういうこと考えていくと、きちんとしたやり方であればですけれども、いろいろな形で大学経営に関わってくる部分が出てくるだろうと思います。特に非常勤の削減というのはちゃんとやれば相当あると思います。ただ、あまり先生方は導入されてほしくないのかもしれないですね。

単位互換についてもeラーニングについてもきちんとしたプランを、全体像を今後構築していく必要があるだろうという風に思います。

司会 ありがとうございます。大きな問題だと思いますけれども、時間が気になるので、一番参加者が多くて、私も参加したんですけれども、まだ言い足りない、不完全燃焼であるという方が多いように見受けられるラウンドテーブル2について、問題提起等々、お話しただけだと思うんですけれども、いかがでございましょうか。

白杉 東北芸術工科大学の白杉と申します。

午前中、橋本先生から学生参画型の教育改善について。そしてラウンドテーブル2では学生参加による授業改善ですよね。少しレベルの違う話なんですけれども。学生参画によるFDということって、これはすごく驚きだったので、教職員のFDだって大変なのに、まず、学生を入れてもいいということ、どんな経緯で教員や幹部が飲み込んだのかっていうところを、少し伺いたいんですけれども。

うちは美大なので、FDっていう言葉だけで拒絶感を抱く教員が山ほどいまして、言葉を変えているんです今年から。FDを使わないように。

橋本 これはどこの大学でもそうだと思うんですが、FDということで、こういう研修会をやっても、あるいはもっと他のものをやっても、ある程度のところまでは浸透します。最初5人だったものが10人になり、少しずつ仲間が増えてきて、このままいい調子で行くのかなっていうところを多少感じるところがあると思います。

ところが、10パーセント越えたあたりから、何かちょっと壁のようなものに、どこの大学でもぶつかるといいます。大学によって多少違いまして、もう10パーセントに達する前から

すでにそういう状態になるところもあれば、3割ぐらいまでは何とかいけるということもあると思いますが、どこまでも順調にいくという大学は聞いたことがありません。



岡山大学の場合も大体2割を超えたか超えないかぐらいのところ、この先うまく行くのかなという危機感のようなものを持ちました。その時に、別に私が言い出したのではなくて、誰彼となく、FDを積極的にやっている人の中で、今日のラウンドテーブルのやり取りの中でもありましたように、やっぱり最大構成員は学生なんだから、学生の意識が変わってくると大学全体として少し違ってくるだろう。そうすると学生を巻き込むという形のほうが、むしろ教員を広げるということのほうがやりやすいのではないかな。あるいはもっと意味があるのではないかな。そういう考え方に立ち至ったという、そういうことでございます。

もちろん抵抗はありますよ。そういうことを提案した時にいろいろ抵抗ありましたから。その時に、丁寧なキャッチボールをやる。反対意見は何がどう反対なんだ。それは突き詰めて聞いてみると、必ずしも筋の通った反論ではない場合のほうが多いんですね。じゃあそこところはこうしますからという風なことという、大体相手はだんだん折れてくるというような所はあると思います。

白杉 ありがとうございます。もう一つ、学生を含んだグループというか集団に、公的な性格を持たせるという発想はどういう風なところから。

橋本 要するに、全部一連のものなんです。学生たちの声をただ言い出すだけに終わらせないようにするにはどうするか。それには公的な性格を付与すればそれなりに役割は持っていけるんじゃないか。だから学生を参画させるということの話の延長というか、議論の流れの中で、公的という部分は自然に出てきたんです。

白杉 ほとんどぶっちぎり、独走の現状でしょうか？

橋本 だからその時に、例えば理論武装をできないかと発掘していたら、例えば今日午前中お話ししたように文科省も実は2000年6月にこんなことをいっていると。それを例えば学長のところに持って行くと、「ああ、ああ。大学の方向はこれからこうなるんだ」というような話で、たまたまそれを持っていた時には、広中レポートという声がちょっとずつ出かっていた時期です。他の大学でそんなことを、実現は難しいんだけどそういう方向性もあるかなっていうことを

学長間同士で話をしたりもするんですね。

だからちょうどタイミングがよかったということなんだろうと思うんですが。暴走するには、いい時期だったということだろうと思います。



司会 どうもありがとうございます。もう一声いかがでしょうか。ラウンドテーブル2に参加された方。あるいは三原先生、小田先生、いかがでしょうか。コメントなどいただけますと。

橋本 あと1分だけ。ラウンドテーブル2でも、さまざまなところで学生参画というのがある程度進んできているという実感を、私、得たんですけれども。

今日の話の中でもちょっと気になったのは、そういうことを企画した時に、東北地方だからということではなくてどこでも同じなんですけど、上級生、3年生、4年生がどうしても中心になります。

岡山大学の一番の特徴は、1年生、2年生なんです。入ってきた直後のところでどう意識変革するか。これは非常に重要な要素ですから、何とか工夫を凝らして、1年生、2年生、それも新入生、入って間もないという学生たちをどう振り向かせていくか。そこをちょっと配慮していただければと思います。

三原 本当におっしゃるとおりです。1月にやった時に、準備期間が非常に短かったこともあって、3年生、4年生、ゼミに入っている学生だけだったということもあったので、今回は割と早いうちから掲示板に出したりとかいろいろしていただんですけど、その教育改善意見交換会の場で「掲示板を見た人？」って、教務職員の方から聞いてもらったら、数名だった。後はみんな、ゼミの教員から聞いて来たっていうようなことだったので、次にまたやる時にはいろいろな形で広報するので、下級生たちに「こんな会があるよ」、「行ったほうがいいよ」というようなことを、ぜひぜひ広めてくれということを行ったのが1点。

これは学生に言ったわけじゃないんですけど、やっても言ってもぜんぜん変わらないんだってことになれば、結局、行く意味がないというか、来なくなるわけですから、行つて言う、気持ちがあつとすただけでなく何か変わるというようなことを、1つでも2つでも具体的なことを示していつて、1年生からこの大学にはこういう会があるんだ。1年に何回かやるんだ。そこに行くことが言えてまた変わっていくんだ、というようなことが定着するようにしていきたいなと、教員の1人としては、強く責任を負いながら終えたということがありました。

司会 どうもありがとうございます。他にはいかがでしょうか。

金澤 どうもご意見ありがとうございました。東北地方のという風におっしゃったので、私、東北大学出身で、卒業したのはだいぶ昔ですので、今変わっているかもしれないんですが、私が大学1年生の時に2年生の先輩が、法学部だったのですが、ホウサイ、何の略なのか今になっては良くわからないんですが、大学の半分公的な支援をおそらく得ていたと思うんですけれども、オリエンテーションを学生がやっていたんです。

あの当時、東北大学は学生運動の余波で、入学式をやっていなかったものですから、そうしたオリエンテーション等は学生主体に全部やっていて、私たちは授業の取り方とか、鬼仏表といって、この先生の授業は取りやすいとか、この先生は鬼だとかいうのを、教えてもらったという経緯がありました。ですから、そういった縦の学生組織みたいなものが当時はあり、おそらく今も、何らかの形で残っているのではないかなと思うんです。

人文学部も、先ほどこちょっとラウンドテーブルの方でもお話ししたんですが、ゼミナール協議会という組織があり、今でこそ、ちょっと低調になってしまつてソフトボールくらいしかやっていないんですが、数年前まで、評価に関わるころまで行かないんですけれども、学生主体のさまざまな活動にいそしんでいたという風に聞いておりますので、おそらくないわけではない。

後はそれを我々がどのように支えていくか。あるいは学生さんがそういうのがあるというのをわかつてどういう風に利用していくかということではないかなという風に思うんです。補足ですけれども。

中村 今、金澤先生がおっしゃったのは、ラーニングコミュニティという言葉で表現されているもので、かつてはどこのどんな大学にでもそういうものがあつたわけなんです。鬼仏表から始まり、夜のマージャンから。そういうのは全部ラーニングコミュニティになっていたんでしょう。だから教員が何かを世話しなくてもできた時代があつたんですね。

今でもまったく無くなったというわけではないんですが、人間関係の変質ということが、たぶん背景には大きい問題としてあると思うんですが、それ以上に、大学のシステムというのが、高校から上がってきた学生にとっては非常にわかりづらいものになっていて、また教員のほうもシステムの変革に対応しきれてなくて。やっぱり教員学生一体となつて、現代の高等教育の現状に自分たちを慣れさせて、合わせていくっていう、そういう別のシステムを作らなくてはならなくなっているというのが、現状なんだろうと思うんです。

これは学生参画型の授業改善だけの問題ではなくて、就学支援のシステム、本学ではYUサポーターシステムというのがありますが、どこの大学でも就学支援ということについてはいろいろな形で力を入れざるを得なくなっているというのは、たぶんそういう人間関係の社会的な背景の問題と、それから大学内部のシステムの激変というこ

とが大きい要因として挙げられるのではないかなと思います。

三原 ちょっと喋りすぎかなと思いますが、公益大の三原です。

今のラーニングコミュニティということで言いますと、うちの大学は小さい規模なので、そのあたりが非常にうまくいきそうに見えて、実は、開学以来なかなかうまくいかない面もあったんですけど、今現在、我ながらというか、自分の大学ながらよくやっているなと思うんですけど、3年前から、新入生は新入生ガイダンスを3日間やりますけれど、そのうち全員の新入生合宿を1泊羽黒山でやっています。

これは厳しい修行をさせるためではなくて、どちらかというと、そんなのはぜんぜんなしで、教員と学生と、先輩学生たちがたくさん協力してくれるんですけど、そういう中でのコミュニケーションをはかるというようなことで、それをする以前、以後では、ちょっと雰囲気は違っている。やっぱり個人的なコンタクトっていうのはずいぶん大きくなっていく風になっています。

それと、新入生ガイダンスの折に、すでにサークル紹介とか、ウェルカムパーティっていうのも上級生が毎年盛大に行なうわけですけど、そちらになるべく学生を送り込むというか、行かせるようなことをしています。

来年度からは本格的に担任制を取りまして、今もほぼ準担任制をとっているわけですけど、基本的にミスマッチが起こった時の事もいろいろ考えつつ、そういった制度を導入して、なるべく学生が、生徒から学生にスムーズに移行できるようにというようなことで、やっています。

ですので、今回の教育改善意見交換会もいろいろなルートで言ったんですけど、ちょっと時期が悪い、試験でくたくた、レポートがまだ少し、2年生は残っているという時期です。そういう時期の問題もあって3、4年生だけだったんだという風に思っていますので、今後は1、2年生が参加しやすい日程を考えるという、その作業があるなと思っております。ご参考までに。



司会 どうもありがとうございます。もうそろそろ時間にもなりますが、是非ここで発言したい、あるいは聞いてみたいという方、いらっしゃいませんか。コーディネーターの皆さん、なにかないでしょうか。もう少し時間はありますので、どなたかいただけませんか。

三原 橋本先生にお聞きしたいのですが、ラウンドテーブルの際に、岡山大学では毎回の授業で、学生に3、4行書

いてもらって、それに教員がコメントをして返しているとおっしゃっていましたが、人数の多い授業もあるかと思うのですが、これは相当大変だと思うのですが、どのように対応していられるのでしょうか。

橋本 岡山大学ではシャトルカードというものを用意しております、ミニツツペーパーを1枚の紙にまとめたものなんですけれども、これを学生が数行書いて私がコメントを返すのと。

さっきハウツーと言ったのは返し方の問題ですね。総計で400人なので、1クラス400人ということではないのですが、一番多いクラスだと240人おります。返すということだけで結構大変なんですけど、これは今日、全然お話をしなかった橋本メソッドという形のところと関わってきてまして、簡単に言うとチームで受講する。個人単位で受講するのではなくてチームで受講するという形になります。

チームごとにまとめて返すという形をとりまして、どうしても私が手に余るときには返すためにだけTAを雇ったり。それから、教員によっては、多人数を対象にしてやっているという人で、学部ごとに色を変えて束ねておいて、勝手に取っていくようにというような形で返している場合もあります。

コメントをこんなに書くのは大変だというのは、これは別のハウツー物なんですけれども、私の一種の特技です。JRの通勤時間が片道50分かかります。そのJRの通勤の途中に書いています。もちろんそれだけでは足りませんけれども、そういうことができないと対応できません。

司会 ありがとうございます。いいお話を聞けたと思います。大体時間になりました。

各ラウンドテーブルの中での濃密な報告と議論につきましては、お手元にそれぞれの報告をまとめたものがありますけれども、これは後日報告書に掲載する予定でございますし、それぞれ参加された皆様の中でも、いろいろなご意見があり、これからどうしようかという構想もあろうかと思っております。

結局、橋本先生にご講演をいただいた件に関して言えば、学生参画と。学生を重視する、学生中心のという、そこにはやはり、教員が意識改革をしなければならないといったことが当然に付帯しておりますので、その点をどうするのかと。単なる授業改善の問題についても実は教員がネックになっている場合があるかもしれない。そして、もしかするとそういう人はこういう場には絶対出てこないのかもしれない。という場合にいったいどうするのか、いろいろ緊急の課題があるんだろうと思いますけれども、そういった点も含めて、今日は橋本先生はじめ、いろいろとためになるお話を聞かせていただいたという風に思います。まとめにもなっておりませんが、今日は非常に実りの多い日だったなという風に総括いたします。

では、全体会につきましてはこれでお開きということにいたします。どうもお疲れ様でございました。

(第8回教養教育ワークショップ参加者数)

部局等	人数
学長	1
副学長	1
人文学部	20
地域教育文化学部	16
理学部	7
工学部	12
事務局	10
山形県立保健医療大学	3
東北公益文科大学	2
山形県立米沢女子短期大学	1
山形短期大学	2
東北芸術工科大学	3
その他	4
計	82